

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅶ

下割遺跡Ⅲ

2011

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道 253 号

上越三和道路関係発掘調査報告書 VII

しもわり  
下割遺跡 III

2011

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

上越三和道路は、上越市街地と同市三和区を結ぶ地域高規格道路（自動車専用道路）で、上越市から南魚沼市に至る延長約 60km の一般国道 253 号上越魚沼地域振興快速道路の一部です。この地域高規格道路は、地域の活性化と他地域との交流を促進することを目的として建設される道路です。上越地域においては、高規格幹線道路である北陸自動車道と併せて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成することを目指し、これによって、沿線地域の産業・経済・文化の交流発展が促進されるものと期待されています。

本書は、この上越三和道路建設に先立ち、平成 20 年度に実施した下割遺跡の発掘調査報告書です。

下割遺跡は、縄文時代、古墳時代、古代、中世と長期間にわたって営まれた遺跡で、事業用地のみでも総延べ面積が 5 ヘクタールを越える大規模な遺跡です。発掘調査は平成 14 年度から順次実施しており、今回の調査は、平成 15 年度に調査を終了した中世遺跡の下層にある古墳時代遺跡を対象としました。調査によって、古墳時代前期の掘立柱建物や溝など人々の生活の痕跡の一部が出土しました。また、本遺跡を特徴付けるものとして、近畿地方に系譜をもつ土器群があり、しかもほかの遺跡と比較しても高い割合で見られることから、近畿地方と強い結びつきを持つ集団が暮らしたムラであると考えられます。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力を御援助をいただいた上越市教育委員会並びに地元の方々、また、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

新潟県教育委員会

教 育 長 武藤 克己

## 例 言

- 1 本報告書は、新潟県上越市大字米岡字中割 1,090 番地ほかに所在する下割遺跡の発掘調査記録である。
- 2 今回の発掘調査は上越三和道路の建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、発掘調査は調査主体である県教委が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に委託し、平成 20 年 5 月 12 日から 9 月 1 日に実施した。
- 3 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社吉田建設に委託して発掘調査を実施した。
- 4 出土遺物及び調査・整理に係わる各種資料は、一括して県教委が保存・管理している。
- 5 遺物の注記は、「下ワリⅢ」とし、出土地点や層位を続けて記した。
- 6 本書の図中で示す方位はすべて真北である。
- 7 遺物番号は種別に間わりなく、通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に [ ] で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅵ章の自然科学分析の文献等については章末に記載した。
- 9 調査成果の一部は、「埋文にいがき No.65」（平成 20 年 12 月 17 日）などで公表しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。
- 10 本報告書の作成に当たり、航空写真撮影・遺構の図化・自然科学分析は、以下の機関に委託した。  
航空写真撮影……………J・T 空撮  
遺構の図化……………有限会社東北測量設計社  
自然科学分析……………株式会社パリオ・サーヴェイ
- 11 遺構・遺物図のトレース及び各種：図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託して編集した。遺物写真撮影はデジタルカメラ（キャノン EOS Kiss Digital N）で撮影し、デジタル化した遺構写真と合わせて編集した。なお、図版作成・編集作業に係り、編集業者に支給した資料は以下のとおり。  
遺構図面図版：修正済み原図・レイアウト図（仮版）・文字データ（土層説明等）  
遺物図面図版：原図・拓影・レイアウト図（仮版）  
写真図版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図
- 12 本報告書の執筆は、尾崎高宏（埋文事業団調査課班長）、長沼吉嗣（株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部調査員）が担当し、編集は尾崎が担当した。分担は以下のとおり。  
第Ⅴ章 2・3C 長沼 第Ⅵ章 株式会社パリオ・サーヴェイ 左記以外尾崎
- 13 なお、平成 15 年度調査で検出した溝「03SD81」については、今年度調査範囲まで延伸したため、報告書における記載は 03SD81 に統一して使用する。ただし、土器片への注記記号は、現場における仮整理番号「08SD33」をそのまま使用している。図面台帳・写真台帳については報告番号に統一した。
- 14 発掘調査から本報告書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げます。  
伊藤 秀和 小島 博史 岡本 郁栄 加藤 由美子 北澤 卓哉 小島 幸雄 笹澤 正史 高橋 理彦  
立木 宏明 野村 忠司 湯尾 和広 上越市教育委員会 上越市米岡地区



# 目 次

## 第I章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	2
A 調査と調査体制	2
B 整理と整理体制	5

## 第II章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境	6
2 周辺の遺跡	7
A 縄文時代～弥生時代	7
B 古墳時代	7
C 古 代	8
D 中 世	8

## 第III章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定	10
2 基本層序	10

## 第IV章 遺 構

1 検出された遺構の概要	12
2 基本方針	12
3 遺構各説	12
A 掘立柱建物	12
B 周溝状遺構	13
C 溝	13
D 土 坑	14
E 性格不明遺構	14
F 中世の遺構	16

## 第V章 遺 物

1 出土遺物の概要	18
2 遺物の分布状況と傾向	18
3 図化及び記述の方法	20
A 分 類	20
B 遺構出土土器	23
C 包含層出土土器	27
D 中世の遺物	28
E 石製品等	28

## 第VI章 自然科学分析

1 下割遺跡の自然科学分析	29
A はじめに	29
B 試料	29
C 分析方法	30
D 結果	31
E 考察	36

## 第VII章 まとめ

1 出土土器の編年の位置付け	39
2 畿内系甕（タタキ甕・布留系甕）と遺跡の性格	40
3 土器集中遺構について	42
〈要約〉	43
〈引用・参考文献〉	44
〈観察表〉	45

### 挿図目次

第1図 試掘調査トレンチ位置図	3	第7図 器種分類(1)	21
第2図 本発掘調査対象範囲と平成20年度本発掘調査範囲	3	第8図 器種分類(2)	22
第3図 調査地点位置図	6	第9図 花粉化石群集の層位分布	33
第4図 遺跡分布図	9	第10図 検出珪藻化石・花粉化石・樹種の顕微鏡写真	35
第5図 グリッド設定図と基本層序柱状図	11	第11図 県内のタタキ甕と高田平野周辺の布留系甕	41
第6図 グリッド別遺物出土状況	18		

### 表目次

第1表 周辺の主な遺跡	8	第4表 珪藻分析結果(2)	32
第2表 グリッド別出土土器点数・重量集計	19	第5表 花粉分析結果	33
第3表 珪藻分析結果(1)	31	第6表 樹種同定結果	34

### 図版目次

図版1 遺跡全体図	16-16'
図版2 遺構全体図	図版9 遺構個別図(5) [遺構分割図(2) 17-17' ~ 23-23']
図版3 遺構分割図(1)	図版10 遺構分割図(3)
図版4 遺構個別図(1) [遺構分割図(1) 1-1' ~ 13-13']	図版11 遺構個別図(6) [遺構分割図(3) 1-1' ~ 10-10']
図版5 遺構個別図(2) [遺構分割図(1) 14-14' ~ 22-22']	図版12 遺構分割図(4)
図版6 遺構個別図(3) [遺構分割図(1) 23-23' ~ 33-33']	図版13 遺構分割図(5)
図版7 遺構分割図(2)	図版14 遺構個別図(7) [遺構分割図(4)・(5) 1-1' ~ 13-13']
図版8 遺構個別図(4) [遺構分割図(2) 1-1' ~	図版15 遺構分割図(6)

- 図版 16 遺構分割図 (7)
- 図版 17 遺構個別図 (8) [遺構分割図 (6)・(7)  
1-1' ~ 8-8']
- 図版 18 古墳時代の土器 (1) 03SD81 ①
- 図版 19 古墳時代の土器 (2) 03SD81 ②③・  
08SD171・08SK60・08SD164・08SK97・  
08SK76・08SK178・08P59・08P107
- 図版 20 古墳時代の土器 (3) 08SX1・08SX7・  
08SX12・08SX21・08SX22・08SX32 ①
- 図版 21 古墳時代の土器 (4) 08SX32 ②・  
08SX47・08SX75
- 図版 22 古墳時代の土器 (5) 08SX92・  
08SX113・08SX117・08SX118
- 図版 23 古墳時代の土器 (6) 08SX119・  
08SX128・08SX194・08SX238・包含層  
出土遺物①
- 図版 24 古墳時代の土器 (7) 包含層出土遺物②
- 図版 25 古墳時代の土器 (8)・中世の遺物・石製品等  
包含層出土遺物③・08SX213 (中世)
- 図版 26 近景
- 図版 27 調査区全景・出土土器
- 図版 28 調査区北側遺構群・掘立柱建物 (SB1) ①
- 図版 29 掘立柱建物 (SB1) ②
- 図版 30 掘立柱建物 (SB1) ③
- 図版 31 掘立柱建物 (SB1) ④・周溝状遺構 (SZ1) ①
- 図版 32 周溝状遺構 (SZ1) ②
- 図版 33 周溝状遺構 (SZ1) ③
- 図版 34 周溝状遺構 (SZ1) ④
- 図版 35 周溝状遺構 (SZ1) ⑤
- 図版 36 03SD81 ①
- 図版 37 03SD81 ②・08SD29・31
- 図版 38 08SD42・43・45・57・100
- 図版 39 08SD124・127・SX126・SD130
- 図版 40 08SD164・165・163・171・189
- 図版 41 08SD201・08SK24・37・60
- 図版 42 08SK97・101・110・121
- 図版 43 08SK157・172・178
- 図版 44 08P35・38・65・154
- 図版 45 08P155・156・158・08SX1・7
- 図版 46 08SX8・12・21 ①
- 図版 47 08SX21 ②・22 ①
- 図版 48 08SX22 ②・32・41・47
- 図版 49 08SX49・50・75・111
- 図版 50 08SX112・117・118・126・128 ①
- 図版 51 08SX128 ②・161・238 ①
- 図版 52 08SX238 ②・347. 中世の遺構：  
08SE46・103 ①
- 図版 53 中世の遺構：08SE103 ②・152・203・  
213 ①
- 図版 54 中世の遺構：08SX213 ②・西地区
- 図版 55 古墳時代の土器①
- 図版 56 古墳時代の土器②
- 図版 57 古墳時代の土器③
- 図版 58 古墳時代の土器④
- 図版 59 古墳時代の土器⑤・石製品等。中世の遺物

# 第 I 章 序 説

## 1 調査に至る経緯

上越三和道路は、上越沼沼地域振興快速道路（一般国道 253 号）の一部、上越市寺から上越市三和区（旧三和村）本郷に至る延長約 7.4km 区間を指す。

上越沼沼地域振興快速道路は上越市と南魚沼市（旧六日町）を結ぶ延長 60km の自動車専用の地域高規格道路として計画され、上越地方拠点都市の連携強化を図るとともに、上越地方と首都圏を結ぶ最短経路として広域的な交流と地域の活性化の促進に貢献することが期待されている。平成 10（1998）年に整備区間として国土交通省の指定を受けた。

国土交通省（以下、国交省）は上越三和道路の着工に向け、平成 13（2001）年 3 月 29 日、新潟県教育委員会（以下、県教委）に計画予定地内の埋蔵文化財の分布調査を依頼した。

平成 13 年 4 月に、県教委の依頼を受け、新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が分布調査を行ったところ、19 か所において中世以前の遺物を採集した。計画地は沖積平野の中央部に当たり、地中に遺跡が埋没している可能性があり、地表面の観察だけでは遺跡の有無を判断することが困難であることから、法線のほぼ全域について試掘調査が必要であると報告した。

国交省の依頼を受け、県教委は、試掘・確認調査を埋文事業団に委託し、平成 13～15 年度に実施した。

平成 14（2002）年 3 月、14,000m<sup>2</sup> を対象として試掘調査を実施し、調査の結果、上層が古代・中世、下層が古墳時代の遺構・遺物を多数包蔵していることを確認した。内 6,500m<sup>2</sup> については上下 2 面（延べ 13,000m<sup>2</sup>）について本発掘調査が必要と判断した。遺跡名については、北側に隣接する「下割遺跡」と時期・内容等が類似することから同遺跡の範囲拡大として取り扱うこととした（なお、下割遺跡については、平成 12 年度県営圃場整備事業に係る試掘調査により、上越市教育委員会が新たに発見した遺跡であり、東西約 450m、南北約 250m の範囲で古墳～古代の遺構・遺物が確認されている）。

同年 4～5 月には、24,150m<sup>2</sup> について試掘調査を実施し、上層において古代の遺物・遺構、中層で古墳・古代の遺物、下層で縄文時代の遺物の合計 3 層の遺物包含層が存在することが明らかになった。結果、上層全域 24,150m<sup>2</sup>、中層 12,400m<sup>2</sup>（古墳 5,000m<sup>2</sup>・古墳・古代 7,400m<sup>2</sup>）の本発掘調査が必要であり、下層については現地表下約 4m の深部にあるため、上層終了後に再確認調査が必要と判断した。

平成 15（2003）年 5・6 月には、下割遺跡調査範囲以西の 167,000m<sup>2</sup> を対象とする、試掘調査を実施し、清水田遺跡（中世）、延命寺遺跡（古代）、三角田遺跡（古代）を新発見・遺跡登録した。下割遺跡については上層・中層の新たに 6,600m<sup>2</sup>（延べ 13,200m<sup>2</sup>）について本発掘調査が必要であり、下層についても上・中層終了後の再確認調査が必要と判断した。

以上の調査の結果から、下割遺跡の本発掘調査範囲（平面積）は 44,750m<sup>2</sup> である。平成 14 年度に上層 6,500m<sup>2</sup>、平成 15 年度に上・中層 14,600m<sup>2</sup> について本発掘調査を実施した。

## 2 調査と整理作業

### A 調査と調査体制

#### (1) 試掘調査

##### 平成13年度

県教委からの委託を受け、平成14(2002)年3月4～8日埋文事業団が実施した。調査対象範囲14,000m<sup>2</sup>に任意にトレンチ(試掘坑)を設定し、重機を使用して徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況などを観察・記録した。調査によって、現地表下20～30cmで古代・中世の遺物包含層を確認した。トレンチ3・4・6～8・11・12では、溝や井戸などの遺構を検出した。遺構は調査範囲の東側に位置する米岡集落に向かって分布が密になる傾向が見られた。また、現地表下1～1.5mで古墳時代の遺物包含層を確認した。遺物は古墳時代前期末～中期の土器が出土したが、遺構は検出されなかった。

##### 平成14年度

県教委からの委託を受け、平成14(2002)年4月15日～5月8日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲24,150m<sup>2</sup>に任意のトレンチを設定し、重機を使用して徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況などを観察・記録した。

調査によって、現地表下20～30cmで古代の遺物包含層(上層)、同1.5m付近で古墳時代・古代の遺物包含層(中層)、同4m付近で縄文時代の遺物包含層(下層)を確認した。上層は平成13年度試掘調査古代・中世の遺物包含層、中層は同じく古墳時代の遺物包含層にそれぞれ対応すると判断した。

##### 平成15年度調査

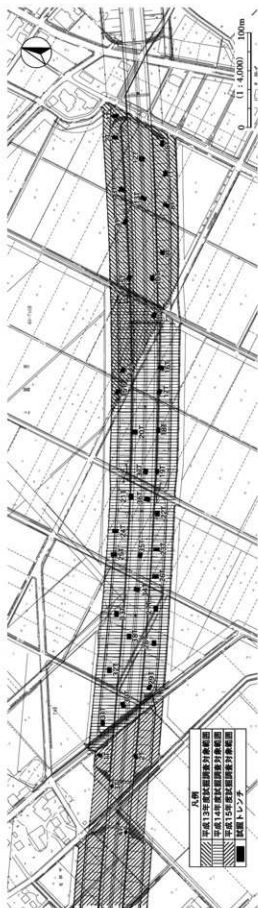
県教委からの委託を受け、平成15(2003)年5月6日～6月17日、7月15日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲は下割遺跡以西の167,000m<sup>2</sup>で、範囲内に任意にトレンチを設定し、重機を使用して徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況などを観察・記録した。調査によって、6,600m<sup>2</sup>(上・中層延べ13,200m<sup>2</sup>)について新たに本発掘調査が必要と判断した。要本発掘調査範囲では、現地表下20cmで古代・中世の遺物包含層(上層)、同30cmで古墳時代の遺物包含層(中層)を確認した。また、3トレンチでは現地表下約3.4mの灰色粘質土から柱根が出土した。遺物が伴わないため時間の確定ができなかったが、平成14年度試掘調査で確認した下層に対応する層と判断した。

#### (2) 本発掘調査

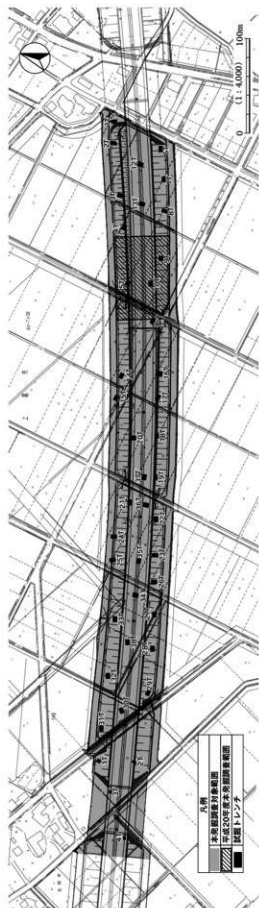
##### 平成14年度・平成15年度調査(『下割遺跡I』参照)

平成14年度の本発掘調査は、平成14年4月11日～10月11日に6,500m<sup>2</sup>(上層：中世面)を対象に実施した。調査によって、13世紀後半～14世紀の溝で区画された屋敷地を確認し、掘立柱建物・井戸などの遺構群のほか、屋敷地や集落間をつなぐ道路遺構を検出した。古代・中世・近世の遺物が出土した。

平成15年度調査は平成15年4月7日～11月21日に実施した。調査対象面積は、平成14年度調査部分の下位にある中層7,100m<sup>2</sup>(古墳時代)と西側に隣接する上層部分7,500m<sup>2</sup>の合計14,600m<sup>2</sup>が調



第1図 試験トランシア位置図



第2図 本架橋建設後試験トランシア位置図

査対象範囲である。

### 平成 20 年度調査

平成 20 年度の本発掘調査は、平成 20 (2008) 年 5 月 12 日～9 月 1 日に実施した。調査対象範囲は平成 15 年度上層調査終了範囲の内、中層の広がりか確認されている 3,384m<sup>2</sup> である。調査範囲中央には排水路があり、便宜上東地区と西地区と呼称し、試掘調査の結果、遺構・遺物が多く確認されている東地区から調査を進めることとした。4 月中旬から現場事務所設置等の準備作業を開始した。5 月 12 日から暗渠排水工事に並行して 0.4m<sup>2</sup> 級の重機を使用し、調査員の指示のもと、表土掘削作業を行った。6 月 10 日から作業員を投入し、人力による遺物包含層掘削作業を開始した。遺構検出・遺構掘削・記録作業についても包含層掘削に並行して行い、大グリッドごとに順次完了させていく形を進めた。調査の結果、遺構・遺物は、主に調査区の東半分偏在し、西に向かって僅少となる傾向が認められた。8 月下旬には東地区の大半の掘削作業を終了した。7 月 30 日～8 月 1 日に、残る西地区の調査を実施した。東地区西端の状況等から判断して、遺構・遺物が僅少であることが予測されたため、調査区全幅を掘削せず、幅 6m のトレンチによる調査を先行して実施することとした(図版 54 参照)。その際、遺物包含層についても、試掘確認調査の方法と同様に、重機掘削と人力掘削を併用しながら、慎重に数センチメートルずつ掘り下げた。結果、遺構は確認されず、出土遺物も土器小片が数点のみであるため、これ以上の調査は不要と判断し、西地区の調査を終了した。

8 月 29 日、ラジコンヘリコプターによる上空からの写真撮影と高所作業車による遺跡の全体写真(俯瞰近景)を実施した。9 月 1 日に下層(縄文時代)の有無について 3 か所のトレンチ調査を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。9 月中旬に現場事務所等の撤去等を行い、現地調査を終了した。

### (3) 調査体制

平成 13・14・15 年度に実施した試掘調査、平成 14・15 年度の調査体制については、『割遺跡 I・II』を参照されたい。

本発掘調査	(平成 20 年度)
調査期間	平成 20 年 5 月 12 日～9 月 1 日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭(財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長)
管理	斎藤 栄(同 総務課長)
庶務	長谷川 靖(同 総務課班長)
調査総括	藤巻 正信(同 調査課長)
調査指導	高橋 保雄(同 調査課課長代理)
調査担当	尾崎 高宏(同 調査課班長)
調査職員	野水 晃子(株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部調査員)
	矢部 英生(株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部調査員)
	長沼 吉嗣(株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部調査員)

## B 整理と整理体制

### (1) 整理作業

図面と写真の整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。遺物は図化できるように最低限の復元を行った。平成20年9月中旬から実測・拓本等の図化作業を実施するとともに、遺物の写真撮影、図版作成、原稿執筆を行った。

### (2) 整理体制

整理期間	平成20年9月2日～平成21年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
整理	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）
管理	斎藤 栄（同 総務課長）
庶務	長谷川 靖（同 総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（同 調査課長）
調査指導	高橋 保雄（同 調査課課長代理）
調査担当	尾崎 高宏（同 調査課班長）
調査職員	野水 晃子（株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部調査員） 矢部 英生（株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部調査員） 長沼 吉嗣（株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部調査員）
整理補助員	鈴木ゆかり 和田 常美（株式会社吉田建設埋蔵文化財事業部）

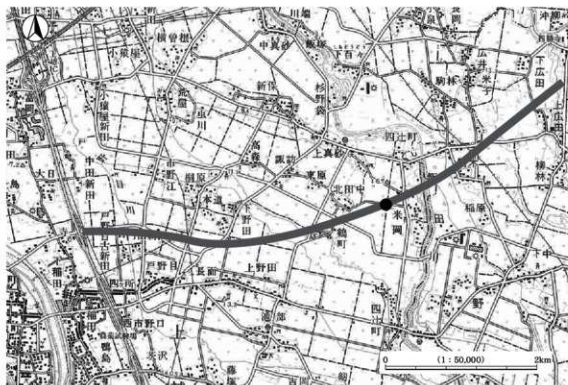


## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境

下割遺跡は上越市大字米岡字中割 1,090 番地ほかに所在する。上越市は、新潟県の南西部に展開する高田平野のほぼ全域を市域とする。高田は、東に米山山地、南東に関田山脈、南西に妙高山、西に頸城山地が連なり、裾野には丘陵や台地状の地形が発達している。これらの山地・丘陵からは大小の河川が流れ出ている。平野の西寄りには長野県に源を発する関川が北流し、日本海に注ぐ。関川へは、平野西部の矢代川・青田川、東部の保倉川などの支流が合流する。さらに保倉川へは、戸野目川・桑曾根川・飯田川などが注ぐ。これらの河川により、平野南部の山麓部には扇状地形、河川流域の低地部では微高地（自然堤防）が発達している。

本遺跡は、平野中央部を南から北に流れる飯田川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡に隣接する米岡集落は、飯田川が扇状地から北に屈曲した先の左岸に当たる。大正～昭和初期にかけて県の行った河川改修工事以前、飯田川は米岡集落付近で複雑に蛇行していたと伝えられる。米岡付近に限らず、飯田川は蛇行と流路の変更を繰り返し、その度に自然堤防が形成・拡大された。平成 15 年度調査において、古墳時代前期の多数の土器を検出した河川跡を検出しており、これはこうした旧河川流路の 1 つであると考えられる。



第 3 図 調査地点位置図（太線は上越三和道路法線）  
（国土地理院『高田東部』1:50,000 平成 11 年発行）

## 2 周辺の遺跡

今回の調査で中心となる古墳時代の遺跡及び遺跡の立地する飯田川流域の遺跡を中心に概観する。周辺の遺跡については、『新潟県埋蔵文化財調査報告書第120集 下朝遺跡Ⅰ』及び『新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 下朝遺跡Ⅱ』に詳しいので、周辺の遺跡概要については加筆修正の上、転載した。

### A 縄文時代～弥生時代

高田平野周辺の縄文時代の遺跡は東頸城丘陵や西頸城丘陵上に立地するものと、潟町潟湖群周辺に立地するものに分けることができる。下朝遺跡周辺の沖積地での縄文時代の遺跡はごくわずかであるが、本遺跡の平成14年度試掘調査において、現地表下約3.5～4mの深さから縄文時代後期の土器が出土した。これは、沖積地上において深部に遺跡が埋没している可能性を示す。

弥生時代の遺跡は、中・後期以降、潟湖周辺、正善寺川流域、関川流域、平野西側の丘陵周辺などを中心に分布する。沖積面上に立地するものは少なく、中島廻り遺跡(2)や子安遺跡(3)、吹上遺跡(5)、釜蓋遺跡(6)などがある。

### B 古墳時代

高田平野は県内最大の古墳集中地域であり、平野周縁の丘陵上を中心に中期～後期の群集墳が密集している。平野西部丘陵には天神堂古墳群(24)・観音平古墳群(23)・青田古墳群(25)・稲荷山古墳群(26)・南山古墳群(27)・黒田古墳群(28)・灰塚古墳(29)、矢代川流域では、梨ノ木古墳群(22)・谷内林古墳群(21)、関川流域では月岡遺跡(11：円形周溝状遺構を検出。円墳か?)・中俣1号墳(横穴式石室1基・H19道路工事にかかり新発見)、南東部の飯田川、柳池川流域には菅原古墳群(18)・高土古墳群(17)・宮口古墳群(15)・水科古墳群(14)・水古古墳群(13)・大野古墳群(30)・観音山墳墓群(31)がある。

観音山墳墓群については、中世の珠洲焼が表面採集されていたこともあり、従来まで中世の塚群として周知されていた。平成19年度に中部電力送電鉄塔建設に伴い、上越市教育委員会が開発範囲の確認調査と内1基の発掘調査を実施した。発掘調査を実施した23号墳は、墳丘の直径約9～9.5m・周溝幅1.2～2.4m、深さ0.9mで、主体部(長さ1.5m・幅0.75m・深さ0.15m、平面形隅丸方形・東西軸)から緑色凝灰岩及び滑石製の白玉、須恵器小片が出土し、古墳時代中期末～後期初頭の円墳であることが判明した〔北沢2008〕。また、周辺の確認調査坑からは、古墳の周溝と推定される溝を検出し、古墳時代後期初頭と推定される土器が出土した。周辺では、マウンド状の高まりが24基確認されていることから、中世の墳墓群と古墳群が混在している可能性もある。これまでに周知されている平野東部の群集墳は菅原古墳群を除き、丘陵縁部周辺に立地することが知られていたが、平野を見下ろす丘陵上にも古墳群が存在すること示唆する成果であると言える。

古墳時代の集落遺跡は、前期では、一之口遺跡(12)・子安遺跡(3)・中島廻り遺跡(2)・津倉田遺跡(7)・下朝遺跡・北前田遺跡(10)など、平野中央部自然堤防上で多数の遺跡が確認されている。

中期になると月岡遺跡・北朝遺跡・下朝遺跡など集落遺跡は激減する。中期末葉以降、後期(飛鳥時代含む)に入ると、遺跡数が再び増加し、略の上遺跡(32)・杉明遺跡(33)・宮ノ本遺跡(36)・岡嶺遺跡(37)等、平野の南東部の扇状地周辺に遺跡が集中する傾向にある。岡嶺遺跡は同一段丘上に立地する菅原古墳

群(18)の造墓主体となった集落である可能性が指摘されている〔秦はか1990〕。

## C 古 代

古代には沖積地の自然堤防上に遺跡が多く分布するようになる。関川流域では今池遺跡〔坂井はか1984〕や木長者原庵寺〔小島はか1984〕など、国府や国分寺との関連が推定される遺跡がある。本遺跡(上層)もこれらの遺跡とほぼ同じ標高(15～18m 弱)にあるが、飯田川左岸では、調査例が少ないこともあり、本遺跡よりも上流で古代の遺跡がほとんど見つからない。今後の調査が待たれるところである。

平安期の遺跡はいずれの河川流域においても、中～下流にかけて多数分布する。飯田川流域においても本遺跡のすぐ下流部で杉野袋遺跡(46)・竜石遺跡(47)・道珍野遺跡(48)などの遺跡がある。この時期に平坦な沖積面である高田面に遺跡が多数見つかるようになるのは、高田面の完全な離水が平安時代以降である〔高田平野団体研究グループ1980〕ことと関連付けられることが多い。しかし汀線の推移などの詳細な研究はむしろ多くの遺跡の発掘調査を待たなければならないため、本遺跡付近の離水と水田の拡大、遺跡の成立年代の関係は現時点でははっきりしない。

一方、高田平野岡緑の丘陵には須志器窯跡群が分布する。当地における須志器の生産は7世紀後半の下馬場古窯跡(49)に始まる。その後、8世紀以降、西側丘陵には滝寺(52)・大貫(51)・向橋(50)・下馬場(49)、東側丘陵には末野(56)・本郷(57)等の窯群が展開する。

## D 中 世

中世になると集落遺跡の他、城館跡、塚、墳墓、寺院跡などが高田平野岡緑の丘陵部で見られるようになる。一方、関川下流域の直江津周辺には、御館跡(62)、伝至徳寺跡(63)、安国寺跡(64)があり、越後府中としての繁栄を見せる。集落遺跡では、樋田遺跡(59)、水久保遺跡(61)、子安遺跡(3)、本遺跡がある。いずれも掘立柱建物・井戸などを溝で囲み、こうした溝による区画が集まって屋敷地を形成する。本遺跡の北西約3.5kmの重川の自然堤防上には横曾根Ⅰ～Ⅲ遺跡(58)があり、幅広い溝(堀)に囲まれ、青磁の酒会壺などの希少遺物も出土していることから、一般的集落ではなく、居館的な性格が指摘されている。

No	遺 跡 名	時 期	No	遺 跡 名	時 期	No	遺 跡 名	時 期
1	下別	埴～中	23	飯吉平古墳群	埴	45	保坂	平
2	中島廻り	弥・埴・平・中	24	天神堂古墳群	埴	46	杉野袋	平
3	子安	弥・埴～近世	25	古田古墳群	埴	47	竜石	平
4	渡太	弥	26	福寿山古墳群	埴	48	道珍野	平
5	吹上	弥	27	南山古墳群	埴	49	下馬場古窯跡	平
6	番蓋	弥	28	黒田古墳群	埴	50	向橋古窯跡	弥・平
7	津吉田	埴・磯島・奈	29	尻塚古墳群	埴	51	大貫古窯跡	平
8	前田	埴	30	大野古墳群	埴	52	滝寺古窯跡	平
9	八幡	埴・奈・平・中	31	飯吉山墳墓群	埴・中	53	今池之与古窯跡	平
10	北前田	埴	32	榎ノ上	磯島	54	神田山跡Ⅱ与窯跡	平
11	月柳	埴	33	杉野	磯島	55	神田山跡Ⅰ与窯跡	平
12	一之口	埴・磯島・平	34	山柳	磯島	56	末野古窯跡	平
13	水吉古墳	埴	35	延命寺	磯島	57	本郷古窯跡	奈～平
14	水科古墳群	埴	36	宮ノ本	埴	58	横曾根Ⅰ～Ⅲ	中
15	宮口古墳群	埴	37	阿須	埴～磯島	59	樋田	中
16	北方古墳群	埴	38	下新町	奈・平	60	中島古庵敷	中
17	高土古墳群	埴	39	今池	埴・奈・平・中	61	水久保	中
18	菅原31号墳	埴	40	木長者原庵寺	平	62	御館跡	中
19	大塚古墳	埴	41	二角田	奈	63	伝至徳寺跡	中
20	塚之宮古墳	埴	42	栗原	奈	64	安国寺跡	中
21	杉内林古墳群	埴	43	狐宮	平	65	春日山城跡	中
22	梨ノ木古墳群	埴	44	越前	平	66	穀ヶ尾城跡	中

第1表 周辺の主な遺跡



第4図 遺跡分布図 [国土地理院発行「高田東部」「高田西部」1:50,000原図]

## 第三章 調査の概要

### 1 グリッドと調査区の設定

グリッドについては、基本的に既往の調査の際に設定したものをそのまま使用した。国家座標を基準とし、10mの方眼を組んで大グリッドとし、大グリッドを2m四方に25等分したものを小グリッドとした。グリッドの呼称は北から南をアルファベットの英文字、東から西は算用数字を使用し、両者の組み合わせで表記した。なお、杭の呼称は、各大グリッドの北東隅の杭にその大グリッドの呼称を付した。小グリッドは各大グリッドの北東隅を1、南西隅を25となるように番号を付し、「14I-15」等と表した。

発掘調査区は、排水路を境とする東西2地区（以下、東地区・西地区）であり、東地区では、東西方向（14ライン）および南北方向（Jライン）に直交する2本の土層観察用のセクションベルトを設定した。それにより区画された調査区を便宜上、I～IVと細分し、細分区画ごとに調査を進めた。

遺構番号は調査年（西暦）08と遺構番号を合わせて（例）「08SB1」と呼称した。

### 2 基本層序

遺跡は高田平野の中央部、米岡集落西方に位置し、飯田川左岸の自然堤防上に立地する。遺物包含層は、上層（中世：平成14・15年度調査）が地表下約0.5～1mの標高13.5～13.8m、中層（古墳時代：平成15・20年度調査）が地表下約1.5～2mの標高12.6～13.5mに存在する。

調査前の現況は水田で、ほぼ平坦な地形であるが、旧来は現在の米岡集落付近を中心に標高が高く、南西側に向かって緩やかに傾斜する地形であったことが周辺部の試掘・確認調査の結果で明らかになっている【大居2002】。今回の調査範囲もおおむね北東側から南西側に向かってなだらかに傾斜し、遺構・遺物も地形が低くなるほどに僅少となる。

遺跡周辺の土質は、硬くしまりがあり、粘りの強い粘質土を基本とする。基本的には平成15年度調査の際の層序・層名に準じて観察を行っているが、適宜細分を加えた。V層では部分的に洪水由来の砂層や腐植をラミナ状に含む。X層以下は、大きく分けて青灰色系の粘質土と砂層が交互堆積している。

各遺構土層の記述に当たっては、土質や色調の差異が各遺構間で顕著ではないことから、混入物の有無や硬度の違い等に主眼を置いた。

#### 基本層序

V 層：明青灰色粘質土 粘性あり。しまりあり。上面が古代・中世の遺構検出面。褐鉄銹を含む。黒褐色粘土（厚0.5～1cm）の堆積が約10～15cmおきに見られる。

IX 1a 層：黒褐色粘質土 粘性あり。V層に比べしまりがない。灰色粘土がブロック状に混じる。古墳時代の遺物包含層。

IX 1a' 層：灰色粘土 5mm大の炭化物を少量含む。

IX 1b 層：オリーブ灰色粘質土 固くしまる。基本的に無遺物層。

IX 2 層：灰色粘質土 粘性あり。上面5cmに炭化物・遺物が集中する傾向が見られた。古墳時代の遺



## 第IV章 遺 構

### 1 検出された遺構の概要

今回調査範囲における古墳時代前期の旧地形は、おおむね北東方向から南西方向に緩やかに傾斜しており、遺構は東側（グリッド11～13ライン）の、より小高い場所に集中する傾向が見られた。平成15年度の東側隣接地の本発掘調査において旧河川跡が確認されており、今回の調査範囲は、その河川跡の西側に展開する自然堤防上に当たると考えられる。検出された遺構は、掘立柱建物1棟、周溝状遺構1か所、溝20条、土坑12基、ピット126基、性格不明遺構42か所がある。そのほか上層（中世）の遺構として、溝1条、井戸4基、性格不明遺構1か所も新たに検出した。

また、遺構の平面形や掘り込まれた痕跡が確認できないものの、土器類がまとまって出土したり、炭化物にまとまりが見られる範囲については、遺構として認識し、「性格不明遺構」として取り扱った。

### 2 基本方針

遺構の説明に当たっては、本文・遺構観察表・図面図版・写真図版を用いる。本文は遺構の種類ごとに記載するが、特に重要なもの、特徴的なものを中心とし、基本的に個別・網羅的な記載は行わない。個々の遺構の法量等の詳細については、遺構観察表を参照されたい。

図面図版は、1/1,200・1/400の全体図、1/100の分割平面図、1/40の上層断面図（セクション図）、1/60のエレベーション図を基本とした。遺構個別平面図については、溝等は分割平面図により掲載し、それ以外の建物、土坑、性格不明遺構については、1/40の個別平面図により示した。

土層断面図の各層の注記は、『新版 標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所監修）を使用し、観察・記述した。

写真図版は、特に重要な遺構や残存状態の良い遺構を中心とし、遺構の形状や特徴を端的に把握できるカットを選択して掲載したため、全遺構を網羅していない。

特に本文中で記載する場合を除き、遺構の検出面はV層の上面である。

### 3 遺 構 各 説

#### A 掘立柱建物（図版3・4、図版28～31）

##### 08SB1

今回調査範囲内では1棟を検出した。X層上面が検出面である。桁行3間（推定5.7m）梁行3間（5m）の建物であると推定される。北～西側が03SD81と重複し、削平されているため柱穴を検出することができなかった。08P94・08P96は、08P36、08P104間をほぼ3等分する間隔に位置しているが、同2基を結ぶラインから南に約35cm張り出す。またP95はP94・96のほぼ中間を直交する軸線上に位置することから棟持柱の可能性がある。その場合、棟方向が南北方向の建物となる（長軸方向はN-40°-E）。

柱穴は08P93・08P99の2基が平面円形である以外はすべて楕円形である。楕円形の柱穴については長径の平均が36cm、短径の平均が約30cmである。深度は南東側の08P93と08P99及び南側のP95が15cm以下と浅く、それ以外は40cm前後(標高12.3m前後)と類似している。

柱穴の直上に08SX113、08SX92が重複しており、これらよりは古い段階の遺構である。

## B 周溝状遺構 (図版7・8、図版31～35)

### 08SZ1

X層上面が検出面である。SD80およびSD87が弧状に巡る。SD71・74を加えた4条で、環状(方形)をなすことから、周溝状遺構と呼称する。溝に囲まれた範囲及び溝の周辺において、土器が比較的多く出土しており、人為的活動の痕跡が強く認められる。遺構群の性格の特定は困難であるが、形状・規模から堅穴住居もしくは平地住居等の壁溝等の可能性が高いと推測される。その場合の一辺(SD87・71間の距離)は、約6.4mである。溝の深度は10cm以下と総じて浅く、東及び北西側では溝状の落ち込みは確認できなかった。溝に囲まれた範囲内にP86・83・88など20cm以上の比較的深いピットが見られる。また、SD74の底面からピット状の落ち込みを検出した。

## C 溝

周溝状遺構として取り上げた4条(SD71・74・80・87)を除き、16条がある。ほぼ東西方向に軸を持ち、区画溝の性格が推定される03SD81のほか、ほぼ南北方向(若干西偏する)の08SD31・57・45・189、北西方向の08SD43・124などがある。03SD81を除くと、いずれも検出範囲での延長が3m以下と短く、覆土も単層のものが多い。断面形は、弧状もしくは半円状のものが大半を占める。

### 08SD57 (図版7・9、図版38)

12Iグリッドに位置し、軸方向はN-6°-E。覆土は単層で炭化物を少量含むが、包含層中からの掘り込みの痕跡は確認できなかった。遺構の東方数メートルの範囲内に08P23・08SK24のほか、器台が正位で出土した08SX21などの遺構があり、これらの遺構群との関連性(建物等の可能性)が推測される。

### 03SD81 (図版3・5、図版36・37)

11F・12F・13Fグリッドに位置する。基本的には断面半円状であるが、北側が急角度、南側が比較的緩やかに立ち上がる。平成15年度調査範囲から今回調査区に向かって延伸・横断し、調査区外西側方向に伸びる。平成15年度調査分と合わせると、ほぼ東西方向に走る。覆土はすべて粘質土である。底面標高を比較すると、途中、底面の凹凸はあるものの、おおむね東方向から西方向に向かって緩やかに深くなる。覆土4層最下面～5層上面付近で甕(2～8)・壺(12～14)・鉢(15・16)などの土器がまとまって出土した。また、土器に伴い、棒状の炭化材(ヤナギ属)が出土した。

### 08SD164・08SD165 (図版3・5、図版40)

11Gグリッドに位置し、軸方向はN-21°-W。一連の溝と推定される。08SD165北側は試掘調査坑により途切れる。覆土単層で、炭化物を多く含む。08SD164の検出面直上3cmで高杯(25)が出土した。

### 08SD171 (図版10・11、図版40)

溝として取り扱ったが、長楕円形の土坑等の可能性がある。東半分は調査区外周囲の暗渠により途切れる。15年度調査区では、本遺構の続きと見られる落ち込み等は検出されていないことから、総延長が大きく延伸することはないと考えられる。遺構北半にテラス状の平坦面があり、東側に向かって深くなるため、



断面形が階段状となる。覆土は、レンズ状堆積で、色調の明暗から3層に分層した。全体的に炭化物が混入し、特に2層では多く見られた。底面の3層から壺(24)、すべての層から糞A類(20～23)が出土した。

## D 土 坑

土坑と判断した遺構は、13基ある。大半は出土遺物がなく、覆土も単層のものが多く、遺物を伴う5基について個別に説明する。

### 08SK60 (図版7～9、図版41)

12H19 グリッド周辺に位置する。底面北側寄り、直径約0.8m、深さ0.34mの円形ビット状の落ち込みがある。SD87と重複し、本遺構の方が新しい。覆土は2層に分層でき、1層中から高杯杯部(26)が出土した。

### 08SK157 (図版10・11、図版43)

10I9 グリッドに位置する。東半分は調査範囲外周の暗渠により途切れる。08SD171と同様に、平成15年度調査区において続きが確認されておらず、現存長よりも大幅に延伸することはないと考えられる。断面形は弧状で、単層であるが、炭化物が多く含まれていた。08SD71と断面形状等が類似しており、一連の遺構であった可能性も考えられる。

### 08SK172 (図版10・11、図版43)

11H22 グリッドに位置する。断面形は箱状で、比較的急角度で立ち上がる。遺構東側にテラス状の平坦面があり、東西方向の断面形が階段状となる。覆土は色調の明暗から3層に分層でき、1・2層には炭化物が多く含まれていた。1層から糞A類の割部小片が出土した。

### 08SK178 (図版3・6、図版43)

大グリッド12H 杭付近に位置する。覆土は4層に分層でき、いずれの層も炭化物を多く含む。2層及び3層から土器が出土し、3層では、器台(34)・糞(32)が出土した。また、これらの土器に伴い、板状及び棒状の炭化材が出土しており、板状のものはヤナギ属、棒状のものはトリネコ属と同定された。

## E 性格不明遺構

平面形及び断面形が著しく不整形な形状のものは「性格不明遺構(SX)」として取り扱ったが、現地調査の呼称において、「土坑」との区分が必ずしも厳密でないものも含まれている。また、土器および炭化物が集中して分布する範囲については、遺構の掘り込み等が確認できないものの、分布範囲が活動痕跡を示す遺構であるとの認識のもと、性格不明遺構として取り扱うこととした。遺構の呼称の後に、括弧書き(土器集中)を付してその他の識別を図っている。

土器集中地点における遺物の出土深度は、IX 2層上面付近に偏在する傾向が見られた。基本層序においても、明確に細分はできないもののIX 2層上面に約5cmの厚さで炭化物が偏在するところも見られたことから、こうした炭化物及び土器の偏在する範囲が遺構である可能性は高いと考えられる。

### 08SX1 (土器集中) (図版3・6、図版45)

13H3・4に位置する。1.3×0.54mの範囲で土器が出土した。土器の分布状況は散漫であるが、正位の状態の壺底部(38)と横倒してつぶれた状態の器台(37)があり、周辺のグリッドからも同一個体と考えられる土器小片が出土した。おおむね原位置を保っていると考えられる。

**08SX7** (土器集中) (図版7・9、図版45)

13H2・3・7・8グリッドに位置する。直径約1.3mの範囲で土器が出土した。遺構の掘り込みは確認できなかった。細片が多く、分布は散漫である。口縁部資料が少ないため不詳であるが、甕数個体分が含まれる。

**08SX21** (土器集中) (図版7・9、図版47・48)

12I3・7グリッドに位置する。1.72×0.54mの範囲で土器が出土した。正位の状態ではつぶれた器台3点(46～48)、正位の状態の壺底部(45)が出土した。当時の原位置をそのまま保った状態であると考えられる。

**08SX22** (土器集中) (図版7～9、図版47・48)

12H19・20・24グリッドに位置する。周溝状遺構(08SD87)の西側に近接する。2.16×0.82mの範囲で土器が出土した。遺構の掘り込みは検出されていない。甕B類(42)が倒伏してつぶれた状態で出土した。これらの甕の破片のまとまりから50cm南東の位置で器台(43)が横倒してつぶれた状態で出土した。

**08SX32** (土器集中) (図版3・6、図版48)

13G24に位置し、直径約1.4mの範囲に土器が分布する。遺構の掘り込みは検出できなかった。今回調査で検出した土器集中の中で最もタタキ調整の甕A類がまとまって出土している。摩耗はほとんど見られず、いずれも横倒してつぶれた状態で出土している。また、西端では逆位の器台脚部(72)が出土している。

**08SX75** (土器集中) (図版3・6、図版49)

12H2に位置し、0.86×0.52mの楕円形をなす範囲に土器が分布する。遺構の掘り込みは検出できなかった。甕A類(65)が出土した。おおむね甕1個体分の破片が出土した。

**08SX92** (土器集中) (図版3・4・6)

12G10に位置し、1.6×1.24mの範囲に土器が分布する。遺構の掘り込みは検出できなかった。建物1の08P96の直上に一部の土器破片がかかること、08P95・08P96の覆土内に土器が混入しないことから、これらよりも新しい時期の遺構である可能性が高い。甕の破片を主体とし、西側に逆位の底部、東側に口縁部がまとまる傾向が認められる。

**08SX113** (土器集中) (図版3・4・6)

03SD81の南岸、建物1の柱穴08P114の直上に位置し、東西4.2×南北1.35mの範囲に土器が分布する。遺構の掘り込みは検出できなかったため遺構の切り合い関係から新旧を把握することはできないが、08P114覆土に土器の混入が認められないことから、建物よりも新しい時期の遺構である可能性が高い。甕A類及びB類が多く出土している。西側では、正位のままつぶれた甕口縁部が見られるなど、個体が識別できるまとまりが確認できた。

**08SX117** (土器集中) (図版3・5、図版50)

11F15に位置する。東半分は暗渠により途切れる。2層上面(1層との境界付近)で壺・鉢等が出土した。遺構の東半分は調査区外周の暗渠により途切れるものの、平成15年度調査区側では検出されていないことから大幅な遺構の延伸はないと考えられる。

**08SX118** (土器集中) (図版3・5、図版50)

11F20に位置する。03SD81の北岸、1.32×1.05mの範囲に土器が分布する。遺構の掘り込みは検

出できなかった。甕類がつぶれた状態で検出された。

#### 08SX194 (土器集中) (図版7・12)

13I10グリッドに位置する。甕1個体分が横倒しでつぶれた状態で出土した。遺構の掘り込みは検出できなかった。遺構西側が08SX186と接するが、土器片の分布状況に乱れがないことから、本遺構の方が新しいと判断した。

#### 08SX12 (図版15・17, 図版46)

16H23・24, 16I3・4グリッドに位置する。平面は3.6×3.1mの不整形で、深さ約0.2mで、底面が大きく波打つ。平面において周囲との色調の明確差は認められなかったが、炭化物の混入が目立つ。遺構のほぼ中心付近で逆位の状態ではつぶれた器台と甕が出土した。

#### 08SX41 (図版12・14, 図版48)

14G20・25, 15G16・21グリッドに位置する。平面長楕円で、長軸2.29m、短軸0.9mで、長軸がほぼ南北方向に一致する。遺構の断面形は、短軸方向が台形、長軸方向は弧状である。長軸は、北側が深く、立ち上がりが急であるのに対し、南側が平坦面状の凹凸を持ちながら緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分層でき、いずれもレンズ状堆積である。IX2層の自然堆積が遺構内に若干落ち込むこと、IX2層内で明確な掘り込みは検出できないことなどから、IX2層の堆積以前に形成された遺構であると判断した。

#### 08SX128 (図版12・14, 図版50・51)

14I13・14・18・19グリッドに位置する。1.5×1.04mの不整形で、平面東側が円形に近いのに対し、西側だけが楕円形状に突出した形状となる。覆土は2層に分層でき、1層で炭化物が多く混じり、壺・甕が出土した。遺構の西側から中心部にかけて壺(103)の破片がまとまる傾向が見られた。

#### 08SX238 (図版13・14, 図版51・52)

15J11・16グリッドに位置する。平面不整形で、北西—南東方向に長い形状を持つ。断面形は階段状で、遺構北東側の底部に土坑状の落ち込みを持つ。覆土は1層で、底面から約5cmのところ、甕1個体が横倒しでつぶれた状態で出土した。

### ビット

遺跡では126基のビットを検出した。平面形は円形もしくは楕円形である。平均的な規模は直径15cm前後、深さ10cm前後のものが多く、建物及び周溝状遺構に関連すると思われるもので深度20cm以上のものが認められる以外は、浅く、覆土が単層のものが大半を占める。断面形状はU字形が多く、杭と思われるV字形のものも少数ある。

## F 中世の遺構

井戸4基(08SE103・08SE152・08SE203・08SE46)、溝1条(08SD11)、性格不明遺構(08SX213)1基を検出した。遺物は08SX213から土師質土器の皿1点が出土したのみである。

これらの遺構は覆土が古墳時代遺構とは明らかに異なり、暗色で、X層土のブロックが斑状に多く混じるため、古墳期の遺構検出面での識別は容易であった。しかし、基本層序断面にかかり検出した08SD11の場合には、V層(中世遺構検出面)における遺構覆土と自然堆積土の識別が極めて困難であった。

その他、検出した井戸・性格不明遺構等についても、同質土を用いた人為的な埋戻し等の要因により、

V層上面での遺構の識別・検出が困難であったと考えられる。

井戸からは、側板・曲物・石等を用いた構造物等は検出されておらず、すべて素掘りであると考えられる。今回検出したのは底面の一部であり、V層・IX層等の厚さを加えた本来の遺構の深さは、現存深度よりも1m以上深くなる。

井戸底面の深度はおおむね標高12m前後で、X層以下の洪水堆積層（細砂層）からの湧水を目がけて掘削したものと推測される。井戸については、15Hグリッドで検出した08SE46を除き、上層の調査で検出した掘立柱建物群の直近に位置しており、これらに伴う可能性が高いと考えられる。

溝については、前回の調査において確認された屋敷地を囲む区画溝の方向と軸を同じにすることから、前回検出の溝同様、区画溝であると考えられる。

#### 08SE46（図版12・14、図版52）

15H17に位置する。覆土は5層に分層でき、3～5層は自然堆積土で、黒色土・炭化物を含むレンズ状堆積、1・2層は、X層土のブロックを多く含み、固くしまった土で、人為的埋め戻し土である。遺物は出土していない。

#### 08SE103（図版7・9、図版52・53）

11I19に位置し、平面ほぼ円形である。覆土は4層に分層できる。すべての層で黒色系のブロックが混じっており、人為的な埋め戻し土の可能性もある。遺構側壁からの崩落土に由来する地山のブロック土が多く混じる。遺物は出土していない。

#### 08SE152（図版10・11、図版53）

10I19・20に位置する。覆土は6層に分層できる。4～6層は自然堆積土で、腐植等の有機質を由来とする炭化物・黒色系土を多く含む。1～3は人為的な埋め戻し土で、黒色系・灰色系の色調の異なる土のブロックが斑状に混じる。遺物は出土していない。

#### 08SE203（図版10・11、図版53）

11I25に位置する。覆土は4層に分層できる。黄色土ブロックが多く混じる1層は、人為的な埋め戻し土、黒色土・炭化物を多く含む2～4層は自然堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

#### 08SX213（図版16・17、図版53・54）

15J11・16に位置する。検出面上面で中世土師器皿が出土した。覆土は1層で、X層土がブロック状に混入する。人為的な埋め戻し土と考えられる。

## 第V章 遺 物

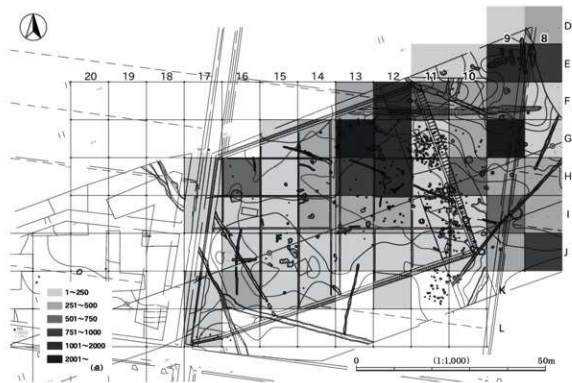
### 1 出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、整理箱（タテ54cm×ヨコ34cm×深さ10cm）で25箱で、古墳時代前期の土器が大多数を占める。その他の遺物としては、古墳時代の石製品（石鎌1点、ヒスイ原石1点）2点、中世の土師器皿1点のみであり、他時期の攪乱・混入がほとんど見られない良好な資料群である。

古墳時代前期の土器は、破片数・重量の分析によると土器は甕が全体の約半数以上を占め、更に近畿地方系諸の土器外面にタタキ調整を施す甕が高い比率を占める点が目される。前回の調査においても03SX1317・03SX1318等で出土しており、それらを加えると県内において最大の出土量となる。

### 2 遺物の分布状況と傾向

遺物の出土状況については、平成15年度の調査区（下湖遺跡II）と今回の調査区が東側で接していたため、10・11ラインについては15年度調査の結果と合わせて検討した。第6図、第2表は包含層・遺構における土師器片の出土点数を大グリッド（10×10m）単位で集計し、グレイの濃度により表したものである。出土傾向としては古墳前期の土師器片はほぼ全域から検出しているものの、その点数には大きな偏りが見られ、調査区内における遺構検出面の標高が12.6mよりも高い位置で遺物出土量が増加していることが分かる。12Fでは出土点数が1,600点を超え、その大部分は03SD81からの出土である。また、



第6図 グリッド別遺物出土状況（点数分布）

03SD81 から出土した器種はハケ調整の甕が主で、タタキ調整の遺物の出土が極端に少なく、他の遺構より若干、時期が下る印象を受ける。13G は遺物集中区 08SX32 が検出され 2,270 点出土した。その他、13H における 08SX1・7 や 12H グリッドの 08SZ1 など標高 12.6m 以上の地点で遺物集中区・遺構が多く検出されており、遺物点数がそれに伴い増加している傾向がうかがえる。16H グリッドで 523 点が検出されているのは自然木跡から、遺物集中区 SX47 が検出されたためである。

大グリッド	甕(タタキ)		甕(ハケ)		甕不明		その他		各グリッド 点数合計	各グリッド 重量合計
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量		
10I	0	0	0	0	0	0	36	170.4	36	170.4
11F	7	81.9	173	1,747.4	72	872.7	265	2,022.9	517	4,724.9
11G	5	56.8	0	0.0	12	216.6	138	998.4	155	1,271.8
11H	126	1,144.2	11	215.0	19	228.0	93	906.4	249	2,493.6
11I	3	22.1	2	12.6	23	250.7	69	348.1	97	633.5
11J	2	24.0	7	39.7	9	96.4	59	240.1	77	400.2
12F	458	4,512.1	620	7,266.7	138	966.0	403	3,027.4	1,619	15,772.2
12G	313	2,158.8	71	594.7	352	2,946.0	597	3,004.4	1,333	8,703.9
12H	192	1,723.6	220	1,852.8	406	3,143.9	518	3,240.9	1,336	9,961.2
12I	22	205.6	47	444.9	31	235.7	335	2,457.9	435	3,344.1
12J	36	318.7	0	0.0	12	47.7	71	342.2	119	708.6
12K	0	0.0	0	0.0	0	0.0	5	27.4	5	27.4
13F	39	261.4	41	519.8	56	619.0	153	940.8	289	2,341
13G	499	5,297.2	45	634.5	813	4,656.4	913	4,394.7	2,270	14,982.8
13H	114	1,138.2	63	604.4	150	2,228.1	648	3,678.5	975	7,649.2
13I	64	598.5	7	133.0	161	1,793.4	51	328.9	283	2,853.8
13J	0	0.0	0	0.0	1	16.7	5	20.1	6	36.8
14G	0	0.0	24	184.2	258	1,291.4	143	920.2	425	2,395.8
14H	3	9.7	0	0.0	11	35.3	299	2,020.2	313	2,065.2
14I	1	17.1	34	296.2	51	560.6	203	2,461.7	289	3,335.6
14J	0	0.0	0	0.0	0	0.0	14	90.7	14	90.7
14K	0	0.0	0	0.0	0	0.0	6	12.8	6	12.8
15G	0	0.0	0	0.0	37	368.8	33	237.3	70	606.1
15H	1	43.5	1	59.8	2	30.1	152	1,056.2	156	1,189.6
15I	0	0.0	0	0.0	11	101.6	25	134.1	36	235.7
15J	3	28.0	59	702.8	41	370.1	36	141.7	139	1,242.6
15K	2	11.7	0	0.0	4	63.4	0	0.0	6	75.1
16H	1	2.1	278	2,509.5	50	911.4	194	1,506.1	523	4,929.1
16I	0	0.0	20	189.2	8	72.1	118	677.6	146	938.9
16J	0	0.0	0	0.0	33	379.4	38	186.1	71	565.5
16K	10	159.5	1	31.3	121	657.0	181	1,202.5	313	2,050.3
17H	0	0.0	0	0.0	0	0.0	6	110.6	6	110.6
17I	0	0.0	0	0.0	0	0.0	11	25.9	11	25.9
17K	0	0.0	0	0.0	17	126.7	12	83.1	29	209.8
17L	0	0.0	0	0.0	1	18.0	9	21.9	10	39.9
総合計	1,901	17,814.7	1,724	18,038.5	2,900	23,303.2	5,839	37,038.2	12,364	96,194.6

第2表 グリッド別出土土器点数・重量集計

### 3 図化及び記述の方法

図化・掲載遺物の選択に当っては、遺構出土土器を中心に、器種や器形など、土器群の特徴を示すものを網羅するよう努めた。包含層出土土器については、遺構出土土器群で欠落している器種を中心に選択した。掲載遺物の説明には、本文・遺物観察表・遺物図版・遺物写真図版を用いる。本文は、遺構出土土器、包含層出土土器の順で記載する。遺構については、溝・土坑などの種別ごとにまとめて記載した。基本的には、すべての遺物を本文中で個別・網羅的に記載しないため、個々の遺物の詳細（出土位置・法量・調整・製作痕跡・消費痕跡等）については巻末の遺物観察表を参照されたい。

土器の胎土については、大半が、混入物等の特徴はほぼ共通しており、観察表において個別に記載していないが、ほかと明らかに異なるものや精良なものについては備考欄に記載した。

#### A 分類 (第7・8図)

器台・高杯・鉢・壺・甕などの大別器種に分類し、形態差をもとに細分した。細別分類は出土点数の多い甕についてのみ行った。

##### 器台

小型器台が大半を占め、受部が内湾して立ち上がるもの(43・47)、直線的にのびるもの(48)、棒状脚が付くと思われるもの(146)がある。また、装飾器台については、受部の透孔が円形のもの(142)、三角形のもの(143)がある。甕・壺に次いで、識別可能な破片の中では数が多い。

##### 高杯

出土点数が少なく、破片資料のみで、全体の器形が復元できるものはない。杯部形態から大きく3種に分けることができる。稜を持つ大型高杯(147)、内湾するもの(25・36)、外側に開くもの(17・26)がある。脚部は、畿内系譜の棒状脚(151・153・154)が見られる。154は、脚中位が膨らみ、古墳時代中期まで時期が下る可能性がある。また、脚部に楕円文を持つ、高杯脚部(72)については、東海系のものと考えられる。

##### 鉢

出土点数が少ない。底部平底では、折り返しの口縁を持つもの(73)、腕状に開くもの(16・44)がある。底部に孔を持つもの(有孔鉢)では、外面がハケ調整のもの(15)とタタキ調整のもの(139・140)がある。

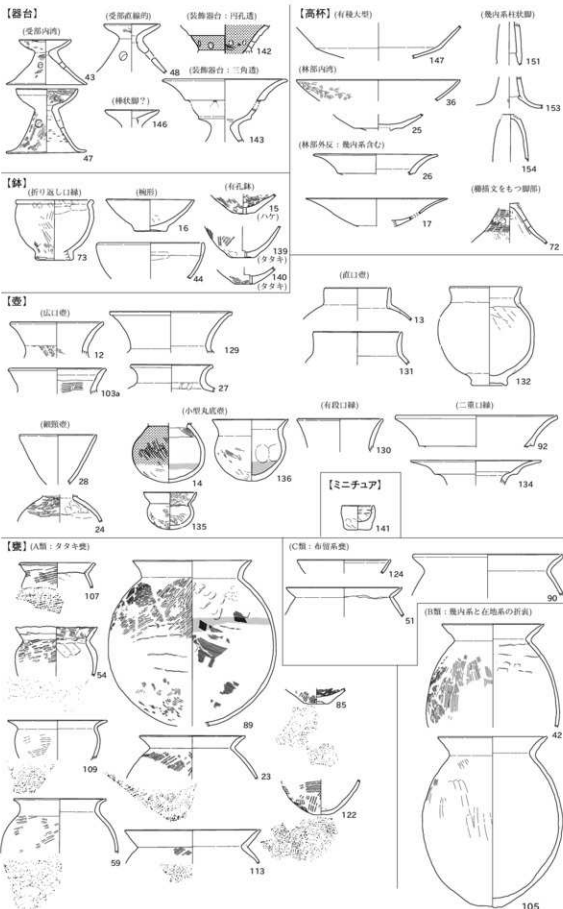
##### 壺

口縁部が外側に開く、広口壺(12・27・103・129など)が目立つ口縁部の端部の処理方法や屈曲の形態に差異がある。また、口縁部が上方向に直線的に伸びるもの(13・131・132)、有段口縁(130)・二重口縁(92・134)のものもある。細頸壺(24・28)、小型丸底壺(14・135)については、全体の器形を復元できるものは少ない。136については、丸底壺として分類したが被熱痕があり、甕の小型品の可能性がある。

##### 甕

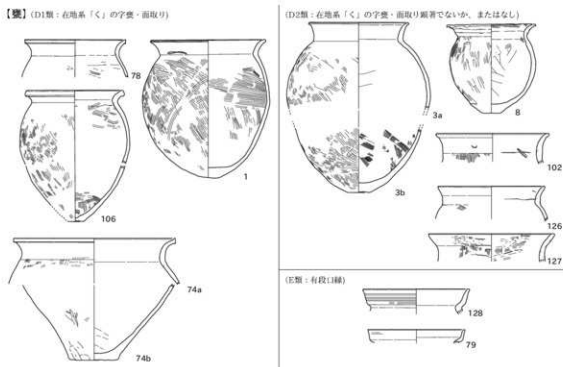
主に口縁部及び頸部の形態や系譜等も含む製作技法(器面調整等)の特徴からA～E類の5つに細分した。外面及び内面に炭化物が付着するものや被熱による表面の変化(赤変や剥落)が見られるものなど使用痕跡を持つものが多い。

A類 胴部外面の調整手法にタタキを用いる甕を一括した。タタキは右上がりの条痕を残すものが多い。



第7図 器種分類(1)





第8図 器種分類(2)

1条は幅約1～2mmで、平均的な条痕数は10cmあたりで約30条である。大半は全面にわたりタタキを施すが、胴部下半分にはハケを残すもの(89)が見られる。口縁部の屈曲は短く外側に開くもの(23・109など)、上方に直線的にのびたあと外側に開くもの(59・89など)等、その形態により細分が可能である。口頸部は、断面「く」の字状で、頸部内外面に鋭い屈曲部を持つ。特に内面は鋭角な稜を形成する。こうした口縁部及び右上がりのタタキ調整を持つ特徴は、近畿地方庄内式の甕(「河内形甕」)[寺沢1986]に類似する。

底部は、裏面に上げ底状のくぼみを持つものが多い。円板状の粘土を基部とし、その周囲に粘度紐を巻き上げて成形するものが大半を占める。

**B類** 口縁部はA類と極めて類似するが、調整手法にハケ・ナデのみを用いるもの。畿内系と在地系(ハケを主体とする甕)との「折衷型」として捉えられる。器形は胴部最大径が中位付近にあり、球胴状を示すが、器高が高く、全体としては長胴気味となる。

**C類** 口縁部が内湾ぎみに開くもので、断面「く」の字状に強く屈曲するもの。布留式甕の系譜で捉えることができるものを一括した。口縁端部を内面方向に引き出すもの(124・90)、内湾ぎみの口縁をもつもの(50)がある。

**D類** いわゆる在地系の「く」の字状口縁甕。胴部の調整はハケ及びナデを用いる。口縁端部の形状により2つに細分した。

1類 口縁端部に面を持つもの。端部に沿って上端及び下端を横方向のナデつまみ面を作りだす。

2類 口縁端部に面を持たないもの。口縁部が上方に直線的にのびたあと外側に開くもの(102・126)が見られる。

**E類** 有段口縁の甕。出土量は少ない。擬凹線を持つもの(128)など一部、弥生時代にさかのぼる可

能性のあるものも含まれる。

## B 遺構出土土器

### 03SD81 (08SD33) (図版 18・19, 図版 55・56)

遺構内から 1,085 点の遺物が出土した。出土遺物の大半は甕の破片で、壺・高杯・鉢もわずかに見られる。土器は 4 層最下面～5 層上面に集中し、甕 D 類 (1～8) が個体でまとまって出土した。遺構の最下面では小片類が散在するのみであったが、甕 A 類 (19) が出土した。

甕 (1～11・19) 1～6 は、口縁端部に面を持つ D1 類、7～9 は口縁端部に面を持たない D2 類である。外面調整は斜め方向 (左上がり) のハケが施される。1・4・8 など、胴部最大径が器高の中位付近にあり、球胴傾角を示すものが目立つ。口頸部の形態は、断面が「く」の字状に屈曲するもの (1・2・5～8) と直線的に上方に伸びたあと外側に開くもの (3・4・9) がある。1 の内面中位から上半にかけて幅約 6cm の帯状に炭化物 (コケ) の付着が見られた。9 は、広口で口縁部が長く、外面下部に 2～3mm 幅のミガキ調整が施される。壺にも分類可能な器形であるが、被熱による表面の弁変及び剥落が見られること、口縁部・胴部ともに外面に炭化物が顕著に付着することから甕に含めた。19 は溝底部出土の甕 A 類、頸部内面に比較的鋭い稜をもつ。

壺 (12～14) 12 は広口の壺、13 は直口壺で、口縁部が上方に直線的に伸び、球胴状の胴部を持つと考えられる。14 は小型丸底壺で、胴部外面に幅 4～5mm の斜め方向のミガキ調整が施される。内面の中位に幅約 1cm の帯状に炭化物が付着する。土器使用時に付着した内容物の上端の痕跡 (喫水線) と推測される。なお、熱を受けた痕跡等は確認できなかった。

鉢 (15・16) 15 は内外面がハケ調整の有孔鉢である。直径約 1cm の孔を持つ。16 は平底の鉢、甕の底部から胴下部の製作技法と共通する。製作途中で鉢に転じたものか。

高杯 (17・18) 17 は杯部で下半部に段を持ち、口縁部が外側に開く。いわゆる「畿内系屈折脚高杯 (以下、畿内系高杯とする)」である。18 は脚部で、「八」の字状に開くものか。外面赤彩される。内面上部は、脚部上端に粘土を充填した際の指の圧痕が見られる。

### 08SD171 (図版 19, 図版 56)

甕 (20～23) 甕 A 類が出土した。いずれも頸部 (屈曲部) 内面に明瞭な稜を持つ。21 は口縁部外面全面に炭化物が付着する。

壺 (24) 小型丸底壺の肩部である。胎土は粒子が細かく緻密精良である。外面は幅約 2mm、約 1.5cm のストロークで斜め上方もしくは横方向の細かいミガキが連続して施される。内面は、基本的にナデ調整であるが、粘土紐の接合部分を中心に連続する指の圧痕が見られる。

### 08SD164 (図版 19, 図版 56)

高杯 (25) 畿内系高杯の杯部。脚部とは別作りで、接合部分で破損している。破損部には杯底部を成形する際、脚上部に充填した円錐形粘土塊の痕跡が見られる。

### 08SK60 (図版 19, 図版 56)

高杯 (26) 大きく外反する。内・外面下部に段を持つ。

壺 (27) 口縁広口で端部に面を持つ。頸から肩部が大きく開くことから球胴状の胴部を持つか。

### 08SK76 (図版 19, 図版 56)

壺 (28) 細頸底壺の口縁部である。胎土は砂粒等の混入が少ないが、軟質で表面の剥離が著しい。

壘 (29) 壘 A 類の底部である。底部は側面の巻き上げ後、上方から粘土が充填される。底面で充填された粘土塊の突起が見られる。外面の調整は右上がりの連続したタタキが施される。

08SK97 (図版 19、図版 56)

高杯 (30) 畿内系高杯の杯部か。胎土は混入物が少なく緻密で、堅く焼きしまる。外面調整は、幅 2mm の精緻なミガキが施される。内面が直線的に横方向に開く。

08SK178 (図版 19、図版 56)

壘 (31 ~ 33) 31 は D2 類で、口縁部が短く、断面「く」の字状に屈曲する。外面の調整はハケを施す。32 は壘 A 類の胴部で、上部はタタキ (右上がり)、下部は斜め方向 (左上がり) のハケ調整が施される。内面はすべて斜めもしくは横方向のハケ調整である。胴部外面の中心に約 2 ~ 5cm の帯状の炭化物が付着し、それらよりも下位は表面全体が黒色化している。内面の底部付近にも炭化物が付着する。33 は頸部から肩部に大きく開く。胴部が球胴状となる器形か外面にススが付着する。

高杯 (34) 内面上部に上方から充填された円錐形の粘土塊の先端が残る。外面は幅 1 ~ 2mm の縦方向のミガキ調整が施される。透孔は 3 か所あり、上から見て正三角形配置となる位置にある。

08P59 (図版 19、図版 56)

壘 (35) 壘 A 類である。表面の風化が顕著であるが、外面のタタキ調整の痕跡がわずかに確認できる。口縁部内面が肥厚し、面をなして屈曲する。稜もほかと比較してシャープさを欠く。

08P107 (図版 19、図版 56)

高杯 (36) 内湾気味に立ち上がる高杯杯部で、東海地方系譜の杯部有種内湾の高杯に類するものか。外面の調整は横方向のミガキが施される。混入物が少なく精良な胎土を持つが、焼成不良のためか軟質である。

08SX1 (図版 20、図版 56)

器台 (37) 受部は内湾ぎみに立ち上がる。受部内面には使用に伴って生じたと見られる、細かい欠けと摩耗が観察できる。脚部の透孔は 3 か所 (上方から見て正三角形配置) に穿たれる。

壘 (38) 底部から胴下半部分である。胴部が外側に大きく開く (球胴か)。外面の調整はハケののち、幅約 1cm の縦方向のミガキが施される。一部にミガキ残されたハケが見られる。内面の調整は横方向のハケが施される。外周の約半分が垂直方向に被熱しており、表面が剥落、赤変している。実測図は被熱がなく、調整が良好に残存している残り半分の情報を示している。全体に被熱痕が及んでいないこと、残存部においてスス等の付着が見られないことなど、煮炊等への日常的な使用の痕跡ではなく、偶発的な要因 (火災や炉付近での被熱) もしくは意図的な要因 (火を使用した祭祀等) などによる痕跡を示す可能性も考えられる。

08SX7 (図版 20、図版 56)

壘 (39 ~ 41) 壘 A 類である。圃化したほかにも、タタキを有する胴部破片が検出されている。39 は口頸部で、頸部内面は稜を形成しない。40・41 は底部で、いずれも上げ底状となる。破損断面の観察から充填法による成形と判断した。

08SX12 (図版 20、図版 56)

壘 (42) B 類に分類した。A 類と同じように口頸部は鋭く屈曲し、頸部内面に稜を形成する。胴部は球胴に近い形態であるが、器高の比率が高くなる「縦長」の器形を持つと推定される。胴部外面はハケ、内面はナデ (版状工具) 調整が施される。畿内系 A 類の影響が強い口縁部と在地系の胴部が融合した器形であると考えられる。

器台(43) 小型器台である。外面及び受部内面が赤彩され、主に横方向の精緻なミガキ調整(幅1～2mm)、脚部内面はナデ調整が施される。受部内面の下半分及び口縁端部に使用痕跡と見られる表面の細かい欠け及び摩耗がある。脚部の透孔は3か所(上方から見て三角形配置)に穿たれる。

#### 0BSX21 (図版20、図版56・57)

鉢(44) 無頸の鉢である。胎土は1～3mmの砂粒が多く混じり、軟質。口縁部付近がわずかに内湾する。口縁部内面に帯状の粘土が貼り付けられ肥厚する。

壺(45) 壺底部である。1mm前後の細粒砂が混入する。内面の調整はハケ及びナデ(指圧痕含む)が施される。外面の調整は摩耗があり不詳だが、ミガキもしくはナデが施されていたと推測される。底部側縁に使用痕跡と見られる摩耗及び欠けがある。

器台(46～48) 3点いずれも脚部の透孔は3か所(上方から見て正三角形配置)に穿たれる。46は脚部のみで、中位付近から裾部にかけて若干内湾気味に開くことから、東海系の影響を受けたものか。砂粒の混入が少なく緻密である。内面は横方向に閉じ取るようにケズリが施される。47は受部が大きく内湾するもの。脚の裾部で横方向に大きく開く。外面は幅約2mmのミガキが施される。脚部は縦から斜め方向、受部は口縁部付近では横方向、下半分では貫通孔を中心に放射状に調整される。48は受部が若干内湾して開くもので、脚部は受部との接合部から大きく「八」字状に開く。透孔の直径(1.4cm)がほかよりも大きい。

#### 0BSX22 (図版20、図版57)

甕(49～53) 49・50はA類で、同一個体の可能性がある。口径が20cmを超える大型品で、口縁部が長く外側に開く。頸部内面に明瞭な稜を持つ。51はC類で、いわゆる「布留傾向甕」である。口頸部が「く」字状に屈曲し、内湾気味に開く。口縁部外面に炭化物が付着する。52はD2類である。口頸部が上方に直線的に伸びた後、外方に開く。断面が逆「コ」字状の甕。胴部外面はハケ、内面はナデが施される。外面の口縁部から肩部分にかけて帯状に炭化物が付着するほか、炭化物の下位は表面が黒色化している。53は底部で、断面観察から底部側面の粘土紐巻き上げ後、上部から円板状の粘度を充填して成形したと推定される。

#### 0BSX32 (図版20・21、図版57)

甕(54～71) 54～65・67・68はA類である。口頸部の特徴により細分可能である。54・55は小型品で、54は口縁部端部付近が連続する指の圧痕により、波状となる。外面に炭化物が付着し、表面の一部で赤変が認められた。内面は斜め方向のナデ(板状工具)により、平滑化される。56～62は口縁部が比較的長く外側に開くもので、頸部内外面の屈曲部が鋭角な稜線を形成しないもの。63～65は口頸部が特に急角度で「く」字に屈曲し、頸部内外面が鋭角となるものである。66は口縁部が若干内湾するもので、C類の布留傾向甕の可能性もある。67～71はいずれも上げ底状で、被熱痕跡を持ち、胴部中位に向かって外側に大きく開く。断面の観察では、67～69は外面タタキ調整が施される。

高杯(72) 脚部の資料である。砂粒の混入の少ない緻密な胎土を持つ。透孔は3か所(上方から見て正三角形配置)に穿たれる。透孔の上下に横方向の平行櫛描文が見られる。上位の櫛描文は1mm間隔、8条、下位のは1mm間隔、10条である。透孔下位には、平行櫛描文を切って横方向の櫛描きの波状文(1mm間隔、11条)が認められる。県内では、上越市中郷区龍峰遺跡[野村2000]にも類似がある。

#### 0BSX47 (図版21、図版57・58)

鉢(73) 口縁端部を外面方向に折り返すことにより肥厚し、段を作りだしている。端部付近の外面に

親指と思われる指圧痕が横方向に連続して見られる。胴部外面は斜め方向のハケ、内面はナデである。底部側縁の一部に被熱による表面の赤変と炭化物の付着が見られる。

壺(74～79) 74～78はD1類で、口縁端部を上(下)方向につまみあげて面をもつ。79はE類である。74は口径が25cm強と大型の甕である。胴上部(肩部)はハケ、胴下部から底部では斜め方向のハケのち、縦方向に近いミガキ(幅約5mm)が施される。接合・図化はできなかったが胴中央付近の小破片ではハケが見られた。被熱による外面の変化等が認められ、底面から5～6cmくらいの高さまでは表面が赤変、その上位は炭化物が付着している。内面もわずかに赤変している部分がある。75は口縁端部を上方に強く引き上げて比較的広い面を形成している。きわめて砂礫の多い胎土である。内外面ともに被熱および炭化物の付着が見られる。76・77は口縁端部が上方につまみあげられるもの、78は口縁端部が上下方に引き出されるもの。79はE類の有段壺口縁で、摩耗により不明瞭であるが、横方向に2条(幅約5mm)の線条痕があり、擬凹線文が施されていた可能性がある。弥生後期にさかのぼる可能性が高い。

#### 08SX75 (図版21、図版58)

壺(80) A類に分類した。口頸部内外の屈曲部はあまり鋭角ではない。図化した1点以外にも、外面をタタキする胴部破片が少量出土している。

#### 08SX92 (図版22、図版58)

壺(81～85) A類のタタキ調整の甕。口縁部及び底部資料を図化した。その他、接合・図化できなかった胴部破片が多数出土している。破片ではタタキ調整を持つものが多い。81～83は口頸部で、内外面の屈曲が比較的鋭角となる形態である。85は底面もタタキと同じ条痕が残る。

高杯(86) 杯部破片である。大きく外に反って開く器形である。砂粒の混入の少ない緻密な胎土を持つ。

#### 08SX113 (図版22、図版58)

壺(87～91) 87～89はタタキ調整を持つA類である。88は、外面の肩部から下部が全面にわたって炭化物が付着する。内面では外面の炭化物付着レベルよりも2～3cm下位までの高さで表面に帯状の黒色化が認められた。黒色化範囲が煮沸した内容物の噴水線と推定される。89は器形の大部分の復元が可能で、外面では、胴上部は右上がりのタタキ、胴下部は左上がりのハケ調整が施される。一方、内面では、左上がりのハケおよびナデが施される。胴部の外面中位に横方向の帯状に炭化物が付着する。一部は頸部から縦方向に帯状に広がり、内容物の吹きこぼれにより生じたコゲと推定される。内面では、頸部屈曲部から約4～5cm下の位置に2～3cmの帯状に炭化物が付着する。88同様、外面の炭化物付着範囲上端よりも約2cm下位に当る。90は口縁部が内湾する布留系のC類、91はD1類で、口縁部にもハケ調整が残る。

#### 08SX117 (図版22、図版58)

壺(92・93) 92は二重口縁の壺である。口縁端部を上方につまみあげ、面を持つ。93は口縁部が直線的に上方に伸びる直口壺である。

鉢(94) 壺等の底部の可能性もあるが、上端部に向かって厚さが薄くなることから破損部ではなく口縁部と判断し、鉢とした。外面は1～2mm幅のミガキ調整が施される。内面は底部付近に横方向に連続した指の圧痕が認められる。砂粒の動いた痕跡からナデ調整が推測されるが単位は不詳である。

#### 08SX118 (図版22、図版58)

壺(95～100) 図化資料以外にも甕の胴部破片が出土しているが、摩耗が著しいものが多い。95～97は、A類である。いずれも摩耗が著しく製作痕跡は不詳である。98は口縁部を欠くが、D類の甕か。

胴部外面にハケを施す。100は、破損部断面の観察から、円盤状の粘土塊を起点にして輪積み成形を行ったものと推測される。

#### 0BSX119 (図版 23, 図版 58)

壺(101) 小型丸底壺の口縁部である。外側に直線的に開く。表面の摩耗が著しく、調整等は不明で、砂粒(チャート礫)の混入が目立つ。

#### 0BSX128 (図版 23, 図版 58)

壺(102) D2類に分類した。口縁部が上方に直線的に長く伸びる。

壺(103a・103b・104) 103は、同一個体の口縁部と胴部下半から底部の資料で、今回報告したものと同一個体のものと見られる胴部破片が多数出土しているが、詳細な部位の特定ができないため図化していない。口縁端部に面を持つ広口の壺。胴下部の外面は、ハケ後、ミガキ(幅2～3mm)調整が施される。方向はいずれも斜め方向(左上がり)となる。内面はハケ調整が施される。口縁部外面は横方向の精緻なミガキ(幅約1mm)が施される。104は小型丸底壺の胴上部。外面は斜め方向のミガキ、内面は成形時の指の圧痕が見られる。

#### 0BSX194 (図版 23, 図版 58)

壺(105) B類に分類した。口縁部はA類に類似し、頸部が鋭角な屈曲部を持つ。土器表面は摩耗により調整等の遺存状況が良好でないが、外面では縦方向のハケ・板状工具によるナデが一部に残る。内面も調整の単位は不明であるが、砂粒の動きから縦(斜め)方向のハケもしくは板状工具のナデ調整が施される。

#### 0BSX238 (図版 23, 図版 58)

壺(106) D1類に分類した。口縁部が短く「く」字状に開き、端部に約8mmの広い面を持つ。弥生後期にさかのぼる可能性がある。外面は斜め方向のハケ、内面は横方向のハケが施される。外面の肩部に横方向の帯状の炭化物が付着し、その下位は表面の黒色化・赤色化が認められる。底部付近と口縁部の外周の約半分は、特に赤変が顕著に認められる(使用時の火の当たり方によるものか)。

### C 包含層出土土器 (図版 23～25, 図版 58・59)

壺(107～128) 107～123はA類に分類される。107は口縁端部を下方に引き出し、比較的広い面取りが施される。108は口縁部の屈曲が弱く、比較的長く上方にのびる。胴上半の張りもあまり顕著ではなく、球胴ではなく、長胴に近い形状をもつ。109は117は器壁が薄く、屈曲部内面に鋭い稜を持つ。120～123は壺の底部である。外面下部に右上がりのタタキ調整が施される。124はC類である。器壁が非常に薄く、口縁はわずかに内湾し、端部が内側に引き出されるなど典型的な布留裏の特徴を有している。胎土は精良で、雲母・長石粒子を含む。胎土が他の出土遺物と明らかに異なることから搬入品と考えられる。125～127はD類。127はD2類に細分され、内外面共にハケ調整が施されており、内面は口縁端部までハケが残る。

128はE類で、擬門線を持つ有段口縁の壺は他にSX47から1点出土しているのみであり(79)、いずれも口縁部しか出土していない。128の擬門線は3本の突起を持つ原体で数度に分けてひかれたとみられる。弥生時代後期～終末期にさかのぼる可能性も考えられる。

壺(129～138) 132は球胴に近い体部で、全体に器壁が厚い。屈曲部内面と底部外面に明確な輪積痕が残る。胎土は比較的精良である。133・134は二重口縁壺である。いずれも口縁部は強く外反する。

134 は内外面とも段部は明瞭である。135 は小型丸底壺である。内外面ともに幅 1.5～2mm 幅の丁寧なヘラミガキが施される。器壁は薄く、胎土はほかの壺類と比してやや精良だが、長石・チャート砂粒が多く混入している。136 は小型壺（甕の可能性もある）である。口縁は外傾して直線的に伸び、端部断面はやや先鋭する。体部外面にはスガが付着し、内面には黒色の付着物が水平帯状に見られる。液状の内容物が入れられた状態で被熱したと推測される。底部は直径約 2cm の平底状である。胎土には礫が多く混じる。

**有孔鉢 (139・140)** どちらも外面下部には右上がりのタタキ調整が施され、内面はナデ調整で仕上げられる。底部は直径約 3.5cm で単孔の直径は約 6～7mm、底部の中心軸からややはずれた位置に開けられている。また、139 の底部外面には指で平滑にならされた痕跡が残る。

**ミニチュア土器 (鉢) (141)** 手づくねで成形される。内外面ともにナデ調整され、体部はほぼ垂直に立ち上がる。底部は器壁が厚く平底状である。胎土は礫を多く含む。

**器台 (142～146)** 142・143 は内外面の一部に赤彩が残る。143 は装飾器台である。図は破片を図上復元したもので、受部破片には三角透しの一部と考えられる部分が残存している。146 は器台の受部である。断面が直線的に立ち上がることから棒状脚を持った器台の可能性がある。棒状脚の器台については、東北地方南部の会津盆地に多く見られる。〔吉田ほか 1990〕

**高杯 (147～154)** 出土点数が少なく図化できたのはいずれも杯部・脚部の破片のみであり、全体の器形が復元できるものはなかった。147 は稜を持つ大型高杯の杯部である。口縁端部と下半は欠損している。表面は摩耗し、調整は観察できない。器壁は非常に薄く、胎土は精良である。148 は有段の杯部である。口縁端部と下半は欠損している。内外面に明瞭な段部が見られる。151・153・154 は畿内系棒状脚の一部である。151 の裾部は欠損している。外面が淡く赤変し、表面には細かく浅いひび割れが入ることから被熱した可能性が考えられる。154 は脚部上半の破片である。ややエンタシス状を呈しており、古墳時代中期まで時期が下る可能性がある。

**不明 (155)** 厚手で外面をミガキ調整し、一部に赤彩が残る。内湾ぎみに伸び、段をもつ。壺とも考えたが、類例がなく、器種不明とした。

## D 中世の遺物 (図版 25、図版 59)

156 は 08SX213 から出土した土師質土器の皿である。手づくねにより成形される。13～14 世紀頃と推定される。

## E 石製品等 (図版 25、図版 59)

古墳時代の石製品は極めて少なく、掲載した 2 点のみである。157 は凝灰岩製の製品で器種は不明である。約半分しか残存していないが中央に孔をもつ輪状の製品と推測される。推定外径は約 4cm、内径は約 1.2cm である。158 はヒスイの原石で、中心に緑色部分がわずかに見られる。表面には被熱による表面の荒れとスス状の炭化物の付着が認められる。本遺跡では、過去の調査分も含め、玉作に関連する資料は出土していないため、加工を目的として持ち込まれたかどうかは不明である。

## 第VI章 自然科学分析

### 1 下割遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

#### A はじめに

新潟県上越市大字米岡に所在する下割遺跡は、高田平野のほぼ中央部、現在の飯田川左岸の沖積低地に立地する。本遺跡は、これまでの発掘調査結果から、古墳時代および中世の集落であることが確認されたほか、古墳時代以前の河川跡も検出されている〔新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2003・2004〕。また、これらの発掘調査区西側で実施された今回の発掘調査では、3 時期（縄文時代、古墳時代前期、古代・中世）の遺物包含層が確認され、掘立柱建物や大溝、土坑、等の遺構や、甕・器台等がまとまって出土する状況などが確認されている〔財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2008〕。

本報告では、下割遺跡の古環境変遷、建築材や炭化材等の樹種の検討を目的として、自然科学分析調査を実施する。

#### B 試料

試料は、調査区 14 ラインの東壁から採取された土壌試料 12 点と、土坑や柱穴、大溝等から出土した炭化材や柱根等からなる。以下に各試料の概要を記す。

##### (1) 土壌試料

試料は、14 ラインの基本層序東壁③地点（以下、基本層序）からフィルムケースにて採取された土壌試料 12 点である。これらの試料は、基本層序上位から V 層（試料番号 1～6）、IX1a 層（試料番号 7）、IX1a' 層（試料番号 8）、IX1b 層（試料番号 9）、IX1b' 層（試料番号 10）、IX2 層（試料番号 11）、X 層（試料番号 12）からなる。調査所見によれば、V 層は酸化鉄が発達する明青灰色粘土であり、黒色土・砂・シルト・粘土といった堆積物が確認されている。IX1a 層は黒褐色粘土、IX1a' 層は暗灰色粘土、IX1b 層は明青灰色粘土、IX1b' 層は暗灰色粘土、IX2 層・X 層はオリーブ灰色の粘土である。このうち、V 層上面は中世の遺構検出面、IX2 層は古墳時代の遺物包含層、X 層は古墳時代の遺構検出面とされている。また、試料の観察では、V 層（試料番号 2・3）、IX1a 層（試料番号 7）、IX1a' 層（試料番号 8）、IX1b' 層（試料番号 10）で微細な炭化物片の混じる状況が確認され、特に IX1a 層（試料番号 7）はその状況が顕著であった。

これらの試料を対象に、花粉分析、珪藻分析を行う。

##### (2) 柱根・炭化物

試料は、土器等とともに一括で出土した炭化材（SK178-3 層 炭 1～3、SD33-4 層 No.2,1,4）の 5 点と、Pit162 から出土した柱根 1 点の計 6 点である。このうち、SK178-3 層 炭 1・3 は、約 5mm 角以下の炭化材が多数認められ、同炭 2 と SD33-4 層 炭化材試料は、いずれも土壌塊の表面に薄く付着する状態であった。これらの試料の状況から、SK178 炭化材試料（炭 1・3）については、試料中に認められた炭



化材を無作為に各5点を抽出し、分析試料とした。したがって、分析調査試料は、6試料14点である。これらの試料を対象に樹種同定を行う。

## C 分析方法

### (1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法(4時間放置)の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、[原口<sup>ほか</sup>1998]、[Krammer 1992]、[Krammer & Lange-Bertalot 1986・1988・1991a・1991b]、[渡辺<sup>ほか</sup>2005]、[小林<sup>ほか</sup>2006]などを参照し、分類基準は、[Round et al. 1990]に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、[柳沢 2000]に従う。

同定結果は、中心類(Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae)と羽状類(Pennate diatoms)に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類(Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae)と有縦溝羽状珪藻類(Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae)に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性は、[Vos & de Wolf 1993]を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は[Lowe 1974]に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。堆積環境の解析にあたり、淡水生種(貧塩性種)については[安藤 1990]、陸生珪藻については[伊藤・堀内 1991]、汚濁耐性については[渡辺<sup>ほか</sup>2005]の環境指標値を参考とする。

### (2) 花粉分析

試料5ccを正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9、濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するすべての種類を対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料ではこの限りではない)。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は20 $\mu$ m以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表・図として示す。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位とする。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

### (3) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガ

ム・クロラル(抱水クロラル, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し, プレパラートを作製する。作製したプレパラートは, 生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は, 自然乾燥させた後, 3断面の剖断面を作製して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。木材組織の名称や特徴については, [島地・伊東 1982] や [Wheelerほか1998] を参考にする。また, 日本産木材の組織配列については, [林 1991] や [伊東 1995・1996・1997・1998・1999] を参考にする。

## D 結果

### (1) 珪藻分析

結果を第3・表に示す。珪藻化石の産出頻度はいずれの試料も20個体以下と少なく, 化石の保存状態も悪い。産出分類群数は, 合計で21属24分類群である。

各試料から産出する珪藻化石は, 淡水生種を主体とするが, 海水生種も産出する。試料による産出種の違いは特になく, 淡水生種の中には *Fragilaria vaucheriae*, *Meridion constrictum* 等の中〜下流性河川指標種群, *Eunotia flexuosa*, *Eunotia minor* 等の沼沢湿地付着生種群, *Laticola mutica*, *Pinnularia obscura*, *Hantzschia amphioxys* 等の陸生珪藻を含む。また, *Thalassionema nitzschioides*, *Coccosinodiscus* spp. 等の海水生種も産出する。

種 類	生態性		産地 動物種	基本群 V 種						
	塩分	pH		1	2	3	4	5	6	
<i>Bacillaria paxilla</i> (円蓋動物性)										
<i>Centis. Dumont</i> (中心空円蓋型)										
<i>Asterionax crassipes</i> var. <i>Keiseri</i>	Ogh-ind	ac-0	1-ph	-	-	-	-	-	-	-
<i>Asterionax indicus</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	ind	1-ph U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Asterionax</i> spp.	Ogh-unik	unik	unik	-	-	1	-	-	-	-
<i>Coccosinodiscus marginatus</i> Ehrenberg	Euh			-	-	1	-	-	-	-
<i>Coccosinodiscus</i> spp.	Euh			-	-	1	-	-	-	-
<i>Fossilis indica</i> (Ehr.) Cleve	Euh			B	-	-	-	-	1	-
<i>Styphnodiscus rotula</i> (Kütz.) Hendey	Ogh-ind	al-0	1-hi M	-	1	-	-	-	-	-
<i>Styphnodiscus</i> spp.	Ogh-unik	unik	unik	-	1	-	-	-	-	-
<i>Amphid. Pennant. Dumont</i> (扇蓋空円蓋型)										
<i>Amphidiscus</i> (扇蓋空型)										
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kütz.) Petrus	Ogh-ind	al-0	r-ph K,T	-	-	1	-	-	-	-
<i>Meridion constrictum</i> Kütz.	Ogh-ind	al-0	r-bi K,T	1	-	-	-	-	-	-
<i>Ehrasia alba</i> (Nitzsch) Compere	Ogh-ind	al-0	ind U	-	-	2	-	1	1	-
<i>Thalassionema nitzschioides</i> (Ehr.) Grunow	Euh			A,B	-	2	-	-	-	-
<i>Amphid. Pennant. Dumont</i> (扇蓋空円蓋型)										
<i>Amphid. Pennant. Dumont</i> (扇蓋空円蓋型)										
<i>Amphioxys capitata</i> (Kütz.) Schottan et R.E.M. Archibald	Ogh-ind	al-0	ind U	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella tenuis</i> (Breb.) Van Heurck	Ogh-ind	al-0	ind T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eucyrtus alveolatus</i> (Blanch.) D.G. Mann	Ogh-ind	ind	ind T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema curvicaule</i> Grunow	Ogh-ind	al-0	ind T	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unik	unik	unik	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unik	unik	unik	-	-	-	-	-	-	-
<i>Coccoloba</i> spp.	Ogh-unik	unik	unik	-	-	-	-	-	-	-
<i>Laticola mutica</i> (Kütz.) D.G. Mann	Ogh-ind	al-0	ind	RA,S	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gracilicula</i> Hustvedt	Ogh-hab	ac-0	ind	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia obscura</i> Hustvedt	Ogh-ind	ind	ind RA	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Grunow	Ogh-ind	ac-0	ind HBS	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unik	unik	unik	1	1	-	-	-	-	-
管藻類										
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind RALU	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia brevicauda</i> Grunow	Ogh-Meth	al-0	ind HBLU	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unik	unik	unik	-	-	1	-	-	1	-
<i>Tetradleptus prasinatus</i> (Grunow) D.G. Mann	Meth			H	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia robusta</i> (Kütz.) Hustvedt	Ogh-ind	al-0	ind T	-	-	-	-	1	-	-
瓦藻類										
<i>Eunotia flexuosa</i> (Breb.) Kuetzing	Ogh-hab	ac-0	1-ph O	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia minor</i> (Kütz.) Grunow	Ogh-hab	ind	ind O,T	1	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia rotunda</i> (Kütz.) D.G. Mann	Ogh-hab	ac-0	ind T	-	-	-	-	-	-	-
海水生種				0	1	0	0	0	1	
淡水・汽水生種				0	0	0	0	0	0	
汽水種				0	0	0	0	0	0	
汽水・淡水生種				0	0	0	0	0	0	
淡水種				3	3	5	1	2	2	
珪藻化石総数				3	4	8	1	2	3	

第3表 珪藻分析結果(1)

1 下湖遺跡の自然科学分析

種 類	生態性			炭化 形態	基本群分									
	偏分	pH	淡水		IX1a群 7	IX1a'群 8	IX1b群 9	IX1b' 10	IX2群 11	IX群 12				
<i>Bacillariophyta</i> (片貝類植物)														
<i>Centric Diatoms</i> (中心型片貝類)														
<i>Achnanthes crassipunctata</i> Kommer	Ogh-ind	ac-B	1-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes indica</i> (Ehr.) Simeon	Ogh-ind	ind	1-ph	U	1	1	-	-	-	2	-	1	-	-
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis marginatus</i> Ehrenberg	Euh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis</i> spp.	Euh				2	1	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnula rotunda</i> (Ehr.) Cleve	Euh	ab-B	B		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stephanodiscus rotula</i> (Kuetz.) Hendey	Ogh-ind	ab-B	1-bi	M	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stephanodiscus</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphioxys Pennae Diatoms</i> (短線状付片貝類)														
<i>Frustulia vaucheriae</i> (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	ab-B	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Mastixella contractus</i> Raft	Ogh-ind	ab-B	r-bi	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Urosalpinx</i> (Nitzsch) Comper	Ogh-ind	ab-B	ind	U	1	1	1	-	-	1	-	1	-	-
<i>Thalassiosira nitrochloae</i> (Grun.) Grunow	Euh		AB		1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Raphid Pennae Diatoms</i> (短線状付片貝類)														
<i>Raphid Pennae Diatoms</i> (短線状付片貝類)														
<i>Amphioxys rotunda</i> (Kuetz.) Schotten at R.E.M. Achnanthes	Ogh-ind	ab-B	ind	U	-	1	1	1	-	-	-	1	-	-
<i>Centric diatoms</i> (Ehr.) Nitzsch	Ogh-ind	ab-B	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilariopsis olivaceus</i> (Bleisch) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	T		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema curvifolium</i> Gregory	Ogh-ind	ab-B	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Centric</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Leptoclema</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	ab-B	ind	RA5	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia granulata</i> Hustich	Ogh-hab	ac-B	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia oblonga</i> Kuetz	Ogh-ind	ind	RA		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subquadrata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-B	ind	RL5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>管胞藻類</i>														
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RAU	5	2	-	-	2	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia brevirostris</i> Grunow	Ogh-Meh	ab-B	ind	RLU	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Fragilariopsis granulata</i> (Grunow) D.G.Mann	Meh		FI		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia subrotunda</i> (Kuetz.) Hustich	Ogh-ind	ab-B	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>管胞藻類</i>														
<i>Fragilariopsis</i> (Ehr.) Hustich	Ogh-hab	ac-B	1-ph	O	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Fragilariopsis minor</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-hab	ind	O,T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilariopsis venusta</i> (Kuetz.) De Troit	Ogh-hab	ac-B	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
海水生物					3	1	2	1	0	0	0	0	0	0
海水-汽水生物					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生物					0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
汽水-淡水生物					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生物					17	8	3	7	4	5	4	5	5	5
硅藻化石総数					20	10	5	8	4	5	5	5	5	5

<凡例>

凡例: 偏分値に対する生態性	pH: 水素イオン濃度に対する生態性	C.I.: 炭化に対する生態性
Euh: 海水生物	ab-B: 汽水-汽水生物	1-bi: 炭化生物
Meh: 汽水生物	ab-B: 汽水-汽水生物	1-ph: 炭化生物
Ogh-hab: 汽水-汽水生物	ind: pH不定性	ind: 炭化不定性
Ogh-ind: 汽水-汽水生物	ac-B: 好酸性	r-ph: 汽水-汽水生物
Ogh-hab: 汽水-汽水生物	ac-B: 好酸性	r-bi: 炭化生物
Ogh-unk: 汽水-汽水生物	unk: pH不明	unk: 炭化不明

<炭化形態群分>

A: 外生付着性, B: 内生付着性, U: 海水に沈下付着性 (以上は小林, 1988), K: 中-下流性河川付着性, M: 湖沼付着性, O: 湖沼付着性 (以上は安藤, 1990), S: 好酸性性, L: 塩成性, T: 好淡水性 (以上は Arai-Watanabe, 1993), R: 陸生性 (RAA群, RB群, RC群, RD群, RE群, RF群, RG群, RH群, RI群, RJ群, RK群, RL群, RM群, RN群, RO群, RP群, RQ群, RR群, RS群, RT群, RU群, RV群, RW群, RX群, RY群, RZ群), FI: 付着性, O: 付着性, T: 付着性, U: 付着性, V: 付着性, W: 付着性, X: 付着性, Y: 付着性, Z: 付着性

第4表 硅藻分析結果 (2)

(2) 花粉分析

結果を第5表、第9図に示す。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉総数が100個体未満の試料は、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を「+」で表示するに留めている。

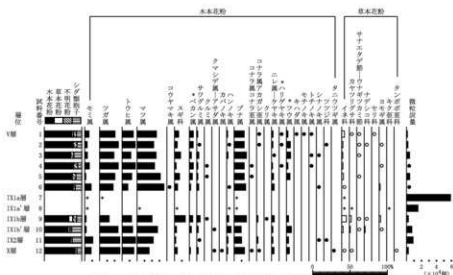
花粉化石の産出状況は比較的良好であるが、検出される花粉化石のほとんどは保存状態が非常に悪く、その中に普通～やや悪い程度の保存状態を示す花粉が少量混入する。

花粉化石の産出状況が悪いIX1a層・IX1a'層(試料番号7・8)を除く各試料は、いずれも花粉群集組成は類似し、木本花粉が優占する。木本花粉では、ツガ属やトウヒ属、マツ属、ブナ属が多く産出し、これにモミ属、スギ属、サワグルミ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属等を伴う。また、第三紀消滅種であるベカン属、フウ属も比較的高い割合で産出し、同じく消滅種のハリゲヤキ属等も確認される。これらの

分類群	試料名	基本土層														
		V層				IX1a層		IX1c層		IX1b層		IX1d層		IX2層		IX層
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
木本花粉																
木本花粉		14	7	4	13	2	10	1	2	2	2	2	12	18		
ワウミ		51	54	21	52	20	21	2	-	-	14	20	30	57		
トウモロ		37	38	13	37	13	9	-	-	-	14	15	20	33		
マツ属植物葉表皮		2	1	3	-	-	6	-	1	-	1	-	-	-		
マツ属 (不明)		62	47	25	49	40	36	-	1	22	28	24	34			
コウヤマキ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-			
スギ科		14	8	9	5	10	5	-	2	16	3	2	8			
ベニケ属		13	11	3	11	6	2	-	-	5	3	-	3			
ササヅミ属		3	1	3	3	2	3	-	-	5	2	1	4			
カスミ属		-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-			
アマシズメ-アサギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1			
カバノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
ハンノキ属		3	2	2	-	-	1	-	1	3	6	2	3			
ブナ属		33	29	18	28	20	18	1	7	18	10	11	29			
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-			
コナラ属アカガシ亜属		1	1	-	-	-	-	-	-	2	-	2	1			
ナラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-			
ニシキ-ケヤキ属		5	4	1	3	4	4	-	-	4	2	2	7			
ハナダケ属		1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-			
ワウミ		5	11	6	4	7	-	-	-	3	7	3	8			
キハダ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
モチノキ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
トチノキ属		1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-			
シナノキ属		-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1			
ワウミ科		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1			
カウワヤ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
日本花粉																
イネ科		11	4	2	4	4	1	2	4	9	3	-	1			
カヤツリグサ科		2	-	-	-	-	-	-	1	4	2	-	1			
サナエダ属-ウナギツカス属		1	1	1	-	1	-	-	-	1	1	-	-			
ナギシコ科		-	1	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-			
セリ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
ヨモギ属		-	1	-	1	-	2	-	-	3	1	-	-			
キク科		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-			
タンポポ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
不明花粉		27	29	13	30	20	10	2	1	17	7	7	14			
シダ類孢子																
シダ類孢子		48	36	34	30	31	27	4	16	23	45	41	34			
合計																
木本花粉		247	216	110	209	148	117	8	14	110	106	111	210			
日本花粉		15	7	3	5	5	3	2	6	18	9	0	3			
不明花粉		27	29	13	30	20	10	2	1	17	7	7	14			
シダ類孢子		48	36	34	30	31	27	4	16	23	45	41	34			
合計 (不明を除く)		310	259	147	244	184	147	11	36	151	140	152	247			
1ccあたりの濃縮数 [個]		1100	1800	4100	700	4300	900	58800	15200	2400	7100	8700	2400			

1) 濃縮数については、10の位を四捨五入して、100単位に丸めている。

第5表 花粉分析結果



図例: 木本花粉は木本花粉化土層、日本花粉はシダ類孢子は総数より不明花粉を除く(最も高数として百分率で算出した)。●は2750年、○は木本花粉(9000年)の層位について算出した濃縮率、\*は第三紀濃縮率を示す。濃縮率は、明確物1ccあたりに含まれる総数で示す。●は1000個以下を示す。

第9図 花粉化石群集の層位分布

第三紀消滅種が伴うことから、保存状態が悪い花粉は後背からの再堆積花粉である可能性がある。一方、これらに比べて保存状態が良い花粉（保存状態が普通～やや悪い程度）では、トウヒ属やマツ属、サワグルミ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属、モチノキ属、トチノキ属等があるが、その割合は1割未満である。

草本花粉は、わずかにイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属等が認められる。保存状態は普通～やや悪い程度のもが多く、シダ類胞子は比較的保存状態が良いものが多い。

微粒炭量は、V層は約700～4,200個/g(試料番号1:約1,100個/cc,試料番号2:約1,800個/cc,試料番号3:約4,100個/cc,試料番号4:約700個/cc,試料番号5:約4,200個/cc,試料番号6:約900個/cc)、IX1a層(試料番号7)は約58,800個/cc,IX1a'層(試料番号8)は約15,200個/cc,IX1b層(試料番号9)は約2,400個/cc,IX1b'層(試料番号10)は約7,100個/cc,IX2層(試料番号11)は約8,700個/cc, X層(試料番号12)は約2,400個/ccである。

### (3) 樹種同定

結果を第6表に示す。Pit162柱根は、落葉広葉樹のクリ、SK178・SD33から出土した炭化材は、落葉広葉樹2分類群(ヤナギ属・トネリコ属)に同定された。なお、SD33 No.2-1は、木材組織が観察できず、種類の同定には至らなかった。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

遺構名	Gr	層位	試料名	性状	点数	形状	樹種
SK178	11H-6	3層	炭1	炭化材	5	破片(小片)	ヤナギ属(5)
			炭3	炭化材	5	破片(小片)	ヤナギ属(5)
	12H-1	3層	炭2	炭化材	1	土塊埋付着	トネリコ属
Pit162	11G-24		柱根	生木	1	分節材状	クリ
SD33	12F-25	4層	No.2-1	炭化材	1	土塊埋付着	不明
	11F-25	4層	No.4	炭化材	1	土塊埋付着	トネリコ属

第6表 樹種同定結果

#### ・ヤナギ属(*Salix*) ヤナギ科

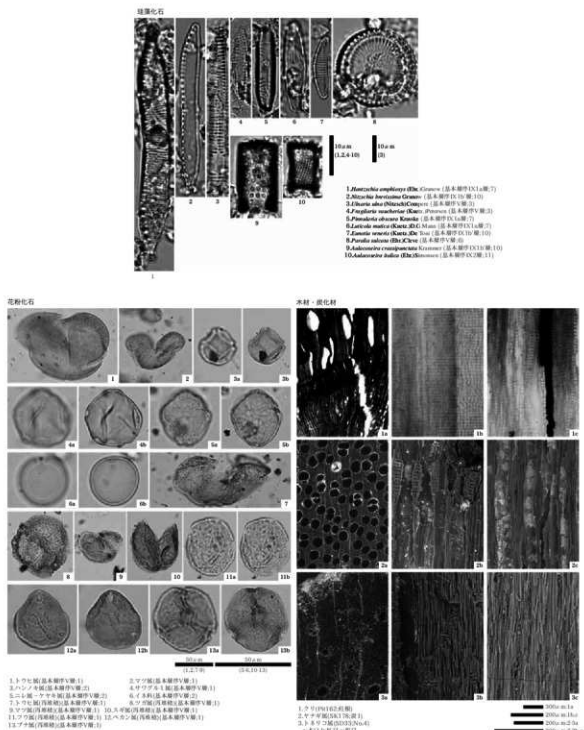
試料はいずれも小片であり、年輪界は観察できない。散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在する。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

#### ・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

試料はやや収縮している。環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

#### ・トネリコ属(*Fraxinus*) モクセイ科

試料はいずれも年輪界で割れており、早材部の大部分を欠く。早材部から晩材部への道管径の変化はやや急で、晩材部では単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管壁は比較的厚壁。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-2細胞幅、1-30細胞高。



第 10 図 検出珪藻化石・花粉化石・樹種の顕微鏡写真

## E 考 察

### (1) 古環境変遷

#### a) 堆積環境

基本層序 V～X 層は、いずれも珪藻化石は保存状態が悪く、また、産出数も非常に少なく、統計的に扱える数量は得られなかった。そのため、古墳時代～中世の堆積環境の変遷を明らかにすることは困難である。なお、化石が少なかった要因は、堆積後に溶解・消失した可能性や、堆積速度が速かったことにより相対的に堆積物に化石が取り込まれにくかった可能性などが考えられる。

この他に、各試料からは海水生種が少量産出した。飯田川や高田平野を流下する関川の上流域には、中新統の須川層、鮮新統の田麦川層・奈良立層などが分布しており〔竹内・加藤 1994〕、後述する花粉化石においても、第三紀消滅種が検出されている。したがって、各試料から産出した海水生種は、これらの海成層に由来する再堆積と考えられる。

#### b) 古植生

基本層序 V～X 層は、花粉化石が検出されたが、その産状は保存状態の悪い花粉が大半を占める状況であった。花粉群集は、いずれも木本類が優占し、ツガ属やトウヒ属、マツ属、ブナ属が多く産出し、モミ属、スギ属、サワグルミ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属等を伴うといった組成を示した。

これらの花粉化石の多くは色の濃い、保存状態の極めて悪い状態であった。このような花粉化石は、より古い時代の地層に堆積した花粉化石が再堆積したものである場合が多い。上越市を中心とした第四紀更新世～完新世の花粉分析結果でも、ツガ属、トウヒ属、マツ属、ブナ属、ハンノキ属等の多産する群集組成が得られている〔上越市史編さん委員会 2002〕。また、随伴する花粉化石には、第三紀消滅種であるベカン属、フウ属も比較的高い割合で産出し、さらに、消滅種のハリゲヤキ属等も産出した。上述したように、珪藻分析結果では、後背の海成層に由来すると考えられる海水生種が産出していることから、検出されたほとんどの花粉化石は、後背地域に分布する第三系層・第四系層からの再堆積であると考えられる。

一方、上記した再堆積と考えられる花粉に比べ保存状態が良かった花粉は、各基本層序の堆積時、あるいはその後の過程で取り込まれたと推定される。ただし、検出された花粉量が少なく、保存状態やシダ類胞子が多く検出されることなどを考慮すると、花粉化石・シダ類胞子は堆積後の経年変化による分解の影響を受けていると考えられる。

このような保存状況を示す花粉は、木本類では、トウヒ属やマツ属、サワグルミ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属、モチノキ属、トチノキ属等が認められた。定量解析に耐えうる個体数が得られなかったことから詳細な検討は困難であるが、周辺の河畔や低湿地には、サワグルミ属やハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属、モチノキ属、トチノキ属等が生育し、後背山地・丘陵等には、ブナ属等の落葉広葉樹、トウヒ属やマツ属等の針葉樹が生育していたと考えられる。また、草本類では、検出量は少なかったが、人里植物を多く含む分類群であるイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属等が認められた。したがって、遺跡周辺にはこれらの草本類からなる草地在り分布していた可能性がある。

下湖遺跡西方、関川右岸に位置する三角田遺跡では、8 世紀初頭から前葉～8 世紀後半から中世とされる堆積物を対象とした花粉分析調査が行われており、比較的良好な花粉群集が得られている〔パリオ・サーヴェイ株式会社 2006〕。これによれば、8 世紀初頭から前葉頃の周辺の山地・丘陵にはブナ属を主体と

する落葉広葉樹林が成立し、部分的にモミ属、スギ属等の温帯性針葉樹も混生しており、周辺河川の河畔にはクルミ属、ニレ属-ケヤキ属等が、低湿地にはハンノキ属が林分を形成していたと推定されている。8世紀後半～中世頃は、後背山地・丘陵や河畔等に生育する分類群に大きな変化は認められないが、マツ属の増加や湿地林を構成するハンノキ属の減少が指摘されている。下朝遺跡は、三角田遺跡に比較的近く、同様の立地にあること、多産した種類が本分析結果でも産出していることから、おそらく周辺の河畔や湿地等には同様の植生が認められたと考えられる。

各試料における微粒炭量は、IX1a層(試料番号7)やIX1a'層(試料番号8)で多い傾向にあり、特にIX1a層で多産した。この結果は、試料の観察所見における炭化物の混入状況とおおむね調和する。土壤中に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが知られており、その変化は人為活動の変化を反映している場合が多い[例えば安田1987;山野井1996;井上<sup>2002</sup>2002]。本遺跡では、V層上面・X層上面は遺構検出面、IX2層は古墳時代の遺物包含層とされているが、微粒炭量の有意な変化は認められなかった。

## (2) 木材利用

柱穴(PH162)から出土した柱根は、落葉広葉樹のクリであった。クリは、二次林や河畔林を構成し、木材は重硬で強度・耐朽性が高いが、加工はやや困難な部類に入る。柱材としては、強度や耐朽性が高い材質は適している。下朝遺跡の過去の調査結果によれば、古墳時代前期の柱根や礎板にオニグルミ、中世の柱根にクリやスギ、モクレン属が確認されている[バリノ・サーヴェイ株式会社2003・2004]。また、上記した三角田遺跡では、柱材(柱根)にオニグルミが多く利用されており、このほかに、スギやカツラ、トネリコ属等が確認されている[バリノ・サーヴェイ株式会社2006]。

土器等とともに一括で出土した炭化材のうち、SK178炭化材試料では、炭2はトネリコ属、小片が多数認められた炭1・3はすべてヤナギ属であった。ヤナギ属は、種によって材質が異なるが、一般的に強度や保存性は低い部類に入る。また、トネリコ属は、重硬で強度が高いという材質の特徴を有する。用途等は不明であるが、少なくとも材質の異なる2種類の木材の利用が看取される。一方、SD33から出土した炭化材は、No.2-1は組織が観察できず、種類不明であったが、No.4は落葉広葉樹のトネリコ属に同定された。トネリコ属には、湿地林の構成種であるヤチダモやシオジ等が含まれる。トネリコ属は、本遺跡の過去の分析調査では、旧河道から出土した杭に1点確認されている[バリノ・サーヴェイ株式会社2004]。

## 引用文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 73-88  
 Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistical Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.  
 原口和夫・三友清史・小林 弘 1998 「埼玉の藻類 珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 527-600  
 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所  
 井上 淳・吉川周作・千々和一豊 2002 「琵琶湖周辺域に分布する黒が土中の黒色木片について」『日本第四紀学会講演要旨集』32 74-75  
 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81-181  
 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所



- 66-176
- 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83-201
- 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30-166
- 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47-216
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 23-45
- 伊藤良永 2007 「珪藻分析の歩みと動向」『PALYNO No.5』パリーノ・サーヴェイ株式会社出版行会 61-66
- 上越市史編さん委員会 2002 『上越市史 資料編1 自然』上越市 613p
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 1-20
- 小杉正人 1989 「珪藻化石群集の形成過程と古生態解析」『日本ベントス研究会誌』35/36 17-28
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五 2006 『小林弘珪藻図鑑』第1巻 (株)内田老鶴園 531p
- Krammer, K. 1992 PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R.L., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2003 『一般国道253号 上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅰ 下湖遺跡Ⅰ 新潟県埋蔵文化財調査報告書第120集』 p41
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004 『一般国道253号 上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ 下湖遺跡Ⅱ 新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集』 p61
- パリーノ・サーヴェイ株式会社 2003 「木製品の樹種同定」『一般国道253号 上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅰ 下湖遺跡Ⅰ 新潟県埋蔵文化財調査報告書第120集』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 26-29
- パリーノ・サーヴェイ株式会社 2004 「木製品の樹種同定」『一般国道253号 上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅱ 下湖遺跡Ⅱ 新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 39-44
- パリーノ・サーヴェイ株式会社 2006 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 一般国道253号 上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅲ 三角田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 46-62
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 竹内主史・加藤碩一 1994 「Ⅲ. 中新統-下部更新統, 地域地質研究報告 5万分の1地質図幅」『新潟(7) 第61号 高田東部地域の地質』地質調査所 17-31
- Vos, P.C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. Hydrobiologica, 269/270, 285-296.
- 渡辺仁治・浅井一親・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子 2005 『淡水珪藻生態図鑑』内田老鶴園 666p
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語監修) 海青社 122p [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山野井 徹 1996 「黒土の成因に関する地質学的検討」『地質学雑誌』102 526-544
- 柳沢幸夫 2000 『PI-1-3-2. (5) 計数・同定・化石の研究法—採集から最新の解析法まで—』化石研究会 共立出版株式会社 49-50
- 安田喜恵 1987 『文明は緑を食べる』読売新聞社 227p
- 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2008 『埋文にいがた』8p

## 第七章 ま と め

### 1 出土土器の編年の位置付け

今回の調査範囲では、遺構の重複が少ないため、各遺構出土土器にもとづく詳細な編年を提示することは困難であるが、既往の調査成果や編年案〔川村 2000・滝沢 2005b〕との比較において出土土器群の位置付けを考えてみたい。時期については新潟県考古学会 2005 シンポジウム編年〔滝沢 2005b〕の時期区分を使用する。

遺構の重複関係が把握できるものとして、08SB1、08SX92・08SX113、03SD81 がある。08SX92・08SX113 は A 類のタタキ調整甕を主体とする土器群で、そのほか 90 のような布留甕の影響が見られる B 類の甕もみられる。A 類とした外面タタキ調整を施す畿内系甕（庄内式系）については、次項でも挙げるとおり、県内では、5 期以降に見られるようになる〔滝沢 2005a・b〕。頸城平野周辺の遺跡では、8 期以降に、C 類とした布留式系甕の出土事例が増加することから、当遺跡の A 類の甕については形式的に先行する 7 期頃に位置付けられる。

08SB1 については、柱穴に遺物を伴わないため、時期不詳であるが、ピットの上層を被覆して土器集中遺構 08S X 92・113 があり、建物土器集中遺構よりも先行する段階（7 期以前）に位置付けたい。

03SD81 については、重複関係から 08SB1 よりも新しい時期に位置付けられる。03SD81 の底部（5 層下面）から A 類のタタキ甕の破片が出土した。また、層位的に上位の 4 層からは、1～9 のような外面ハケ調整の甕が出土している。口縁部は端部に面をもつものが多いが、器壁の厚さを越えるような面は持たない。また、器形全体のわかるものは少ないが、1・2 のように長胴きみで丸底に近い底部をもつものや、3・4 のように頸部がすぼまり、球胴状の胴部をもつものなどが併存し、17 の畿内系屈折脚高杯の杯部が伴う。これら 4 層出土土器については、器種構成や球胴甕の定量化など、津倉田遺跡 SK287〔笹澤 ほか 1999〕や山三賀Ⅱ遺跡 SK1480〔坂井 ほか 1989〕等の 8 期の資料群との対比から 8 期頃と考えられる。

その他、重複関係のない遺構出土土器の時期を見ていく。08SX1 出土器台（37）、08SX21 出土器台（46～48）については、脚部高が比較的高く、透孔も脚上半部にあり、布留式との折衷甕が出土した 08SX12 出土器台よりも古相を呈することから、7 期頃に位置付けられる。08SX47 は、口縁端部を比較的に広く拡張した面取りを施す甕（75～78）を主体とし、有段口縁甕（79）も含むことから、03SD81 よりも古相を呈すると考えられ、6～7 期に位置付けられる。08SX117 の二重口縁甕については、頸部・胴部を欠くため、時期の確定は難しいが、段部内面の屈曲が不明瞭で、直線的に伸びる。津倉田遺跡 SK44 出土資料等との対比から 8 期頃と考えた。08SX238 の甕（106）については、口縁端部に幅広く面取りが施されており、弥生後期法仏式の系譜で捉えることができるもので、3～4 期に位置付けられると思われる。

一方、包含層出土土器群の中には、128 のように口縁部有段で擬凹縁をもつもの（6 期か）や 154 のようにエンタシス状を示す高杯脚部（9 期以降）など、今回主体となる時期よりも前後する時期の土器も若干含まれる。なお、エンタシス状の脚部を持つ高杯（154）については、IX 1b 層（上面）から出土しており、層位の関係とも整合する。

前回平成15年度調査においても、2～10期ごろまでの比較的長期にわたる土器群が検出されている。今回の調査区では7・8期前後の土器を主体とするが、3期～9期頃までの確認できた。本遺跡は、弥生後期以降、自然堤防上で中心域を時期ごとに移しながら古墳中期初頭ごろまで存続したことが分かる。

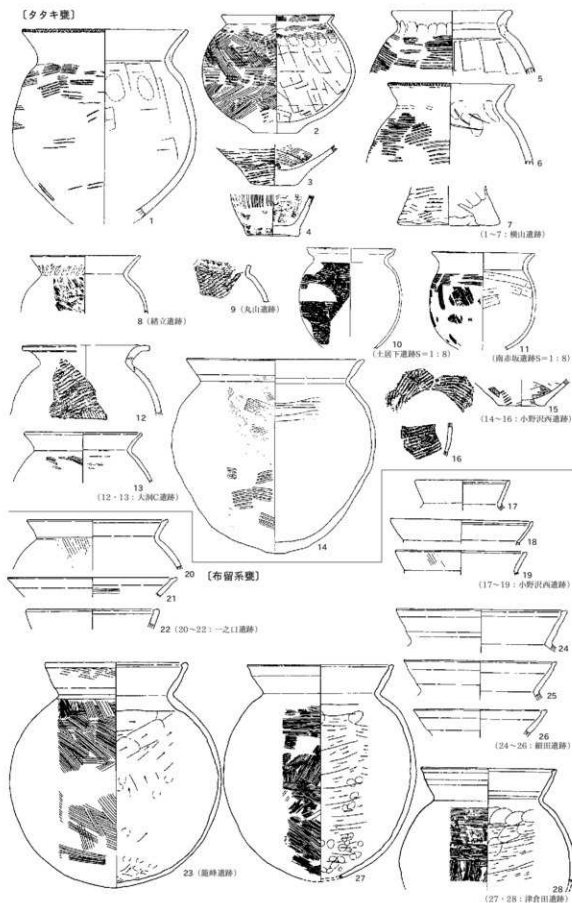
## 2 畿内系甕(タタキ甕・布留系甕)と遺跡の性格

県内において、外面にタタキ調整をもつ土器は、新潟市葛塚遺跡(包含層:6期?)〔関1999〕、同緒立遺跡(地区:榎栗部一括・詳細時期不詳)〔波邊ほか1994〕、同南赤坂遺跡(下段テラス:8期)〔前山ほか2002〕、長岡市横山遺跡(塚原:4・5期)〔駒形ほか1987〕、長岡市草薙遺跡〔未報告〕、上越市津倉田遺跡(SK24:10期か)〔笹澤ほか1999〕、同市丸山遺跡(2期)〔小野ほか1988〕、妙高市大洞原C遺跡(包含層:単体のため時期不詳)〔三ツ井ほか1997〕、同市小野沢西遺跡(SD2:時期不詳)〔土橋2004〕等の出土資料が知られている。いずれの事例も単体もしくは数点のみで、土器群の組成の中では少数かつ客体的なあり方を示している。一方、下割遺跡については、平成15年度本発掘調査の03SX1317、03SX1318等で出土した分を含めると、畿内系が出土するほかの遺跡と比べても突出して多く出土しており、器種構成において特異なあり方を示す。当遺跡出土のタタキ甕は、屈曲部(頸部)内面の稜が鋭角なものが多く、胴部は球胴(32・88・89など)で、胴部上半は右上がりのタタキ調整、胴部下半はハケ調整(32・89など)が見られる。いわゆる庄内式河内形甕〔寺沢1986〕の特徴に類似し、畿内出土のタタキ甕の変遷観〔杉本2006・西村2003〕との比較では、布留式Ⅰ〔米田1991〕・布留Ⅰ式〔寺沢1986〕に対比でき、本遺跡出土土器群の年代観(7・8期併行期)とおおむね整合する。ただし、当遺跡出土土器の底部のつくりは、平底を主体としており、尖底・丸底を指向する河内・大和の様相よりも、平底の指向が強い和泉地域の土器群〔西村前掲〕に近い印象がある。系譜等について、畿内周辺地域(伝播ルートの地域)も含め、今後、改めて比較検討を行いたい。

一方、当遺跡では、布留系の甕(51・66・90・124)も出土しており、タタキ甕同様、畿内系の影響が見られる。頸城平野周辺において布留系の甕が出土した遺跡は、本遺跡のほか、上越市津倉田遺跡〔笹澤ほか前掲〕・一之口遺跡西地区〔坂井ほか1986〕・横引遺跡〔小池ほか1995〕・龍峰遺跡〔野村ほか2000〕・妙高市小野沢西遺跡〔土橋前掲〕などがある。なお、土器胎土の観察では、124を除き、いずれも在地の土器群の胎土と大きな差異は認められず、他地域からの搬入品ではなく、畿内系の製作技法を用いて当地周辺で製作された土器群であると推定される。また、口縁部のつくり(在地系よりも外反の度合いが強く、屈曲部内面に稜を持つ)が畿内系を踏襲するもの、胴部をハケ調整し、長胴気味の器形をもつ在地との折衷と見られる土器群(42・105)が含まれることも、同一遺跡の中で畿内系の伝播と定着・変遷を示す資料として注目される。

北陸地方においては、加賀以西を中心に畿内系の「布留甕」が盛行するが、越中の東部を境としてその分布が確認されていない。こうした畿内系の甕については、主に太平洋側を中心に分布しており〔早野1996〕・〔西川1992〕・〔佐々木2005〕、北陸地方を通じた伝播ではなく、東山道(東海・信州・関東地方)を介し、関川水系の内水面をたどって平野周辺に拡散したものと考えられる。頸城平野周辺の畿内系を伴う遺跡においては、信州系の影響が一定量見られることも伝播ルートを考える有力な手掛かりとなろう。

本遺跡の平成15年度調査の調査範囲では幅12～25mの旧河川を検出し、河川沿いの微高地(自然堤防)上に柱穴に礎板を持つ棟持柱建物をもつ〔山崎2004〕。周辺では、古墳時代後期と推定される一之口遺跡西地区SB187(1間×3間以上)が、柱穴に礎板を伴う〔坂井ほか1986前掲〕。その他、県内において、



第 11 図 県内のタキ甕と高田平野周辺の布留系甕 (個別にスケールを示したものを以外すべて S = 1 : 4)

当該期の礎板を持つ掘立柱建物の類例は少ない。佐渡市蔵王遺跡では、大型の礎板をもつ平面正方形（1×1間）の建物跡が確認されている。その他、布掘りで地中梁を持つ大型建物や周溝を持つ大型建物もあり、鏡（内行花文・珠文）・銅鏝・ガラス玉・鳥形土製品・ミニチュア土器など祭祀行為に関連する遺物とあわせ、新徳玉作遺跡群の中でも核となる遺跡である〔山口2006〕。

下割遺跡の性格については、遺跡範囲の一部の調査であること、土器類以外に遺跡の性格を示すような遺物の出土がないことなどから推測の域は出ないが、畿内系土器（甕）が卓越している点や県内では希少な構造の建物を持つことを合わせて考えると、畿内に近い関係にある集団が水系沿いに形成した拠点的な集落跡である可能性がある。今後の周辺地区の調査の進展を待ってより詳細な検討を行いたい。

### 3 土器集中遺構について

遺跡では、土器が一定の範囲（ブロック）にまとまって出土した場所が11か所確認された。平成15年度の調査でも土器のみの集中か所が6か所確認されており、本遺跡の遺物分布の特徴的な在り方といえる。また、器種構成についても、正位の状態では器台が出土した08SX21を除き、甕を主体とするものが大半を占め、とくに畿内系の甕が多い点も特筆される。図化は口縁部及び底部資料が中心となったが、復元には至らなかったものの、胴部破片も定量出土しており、細片化した土器の集合体ではなく、個体もしくはそれに近い状態の土器から構成されると考えられる。出土状況は、正位もしくは、本来は正位のものが多い横例しとなった状態のものが目立ち、人為的行為により意図的に配置された可能性が高い。しかし、祭祀を想起させるような明確な規則性等は確認することはできなかった。糸魚川市横マクリ遺跡においても底部を欠くが、甕が正位で配置される事例があり、何らかの習慣や行為が反映した可能性が指摘されている〔渡邊ほか2008〕。本遺跡もそうした何らかの意図に基づく土器類の集中・集積行為と考えられる。

これらの土器群は遺物包含層としたIX2層の上面から5cmほどの深度にまとまる傾向が見られた。各遺構にかかる土器片の間に大きな高低差は見られず、おおむね平坦もしくは中心から外側にわずかに立ち上がる「皿状」の水平分布をとる。遺構としての掘り込みが確認できたのは08SX117のみであるが、これについても平面不整形で深度が約10cm程度と浅い皿状である。その他も、明確な遺構プランと掘り込みを持たないことや、土器についても大きく時期差が認められないことなどから、ごく短期間に営まれた遺構であろう。

一方、遺構としては認識できなかったものの、IX2層では上面に2～3cmの厚さで遺物を含む炭化物層が見られた。この炭化物層は調査範囲全域での広がりは認められず、調査区東側の遺物出土量が多い部分に偏在する傾向にあり、遺構・遺物の分布状況ともほぼ整合する在り方と言える。

第VI章に示した14ライン東壁基本層序の土壌分析結果によれば、人為的活動痕跡を示すとされる微粒炭量は遺物包含層と認識したIX2層よりも上位のIX1a層の方が多く、IX1a層からの遺物の出土量はIX2層に比べ少量である。IX1a層とIX2層の間には基本的に無遺物層（一部で遺物含む）で固くしめる粘質土のIX1b層が存在する。人為的活動痕跡は顕著に認められるものの、出土遺物が減少することから、IX1b～IX1a層の段階に、遺跡の中心地区の変化や居住域から生産域への変化など、土地利用の在り方が大きく変わったことが推測される。遺跡の空間利用の変遷については、今後、周辺の調査により明らかにするものと期待される。

## 要 約

- 1 下割遺跡は新潟県上越市大字米岡字中割 1,090 番地ほかに所在する。調査区は飯田川左岸の自然堤防上に立地し、現況は水田であった。古墳時代の遺物包含層の標高は 12.6m ～ 13.5m である。
- 2 発掘調査は上越三和道路の建設に伴い、平成 20 年 5 月 12 日から 9 月 1 日に実施した。平成 20 年度の調査範囲は平成 14 年度に上層（中世）の調査が終了した範囲の下層に存在する古墳時代遺跡を対象としている。調査面積は 3,384m<sup>2</sup> である。
- 3 調査の結果、古墳時代前期の掘立柱建物 1 棟、周溝状遺構 1 か所、溝 20 条、ピット 126 基、性格不明遺構 42 か所がある。そのほか上層（中世）の遺構として溝 1 条、井戸 4 基、性格不明遺構 1 か所がある。
- 4 遺物は古墳時代の土器が大半を占め、そのほか、古墳時代の石製品等（不明石製品 1 点・ヒスイ原石）、中世の土師質土器 1 点が出土した。
- 5 古墳時代の土器は古墳時代前期を主体とし、一部、弥生時代終末期、古墳時代中期の可能性があるものもわずかに含まれる。土器は甕を主体とし、識別可能な個体・破片の約半数を畿内系のタタキ甕が占めており、周辺の当該期遺跡と比較しても特異な在り方を示しており、県内では最多の出土量となる。

## 引用・参考文献

- 大居敬子 2002 『新潟県上越市中江北部第一地区ほ場整備事業地区遺跡発掘調査報告書（下割遺跡）』上越市教育委員会
- 尾崎高宏 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集 下馬場遺跡・細田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野 昭<sup>123</sup> 1988 『新潟県中頸城郡大潟町 丸山遺跡発掘調査報告書』大潟町教育委員会
- 春日真実 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸下流域を中心に—」『上越市史研究』第5号 新潟県上越市
- 小池義人<sup>123</sup> 1995 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集 横引遺跡 龍峰遺跡 柳平遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林建雄<sup>123</sup> 2000 『新潟県中頸城郡中郷村龍峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』新潟県中頸城郡中郷村教育委員会
- 小林健二 2006 「山梨県出土の畿内系叩き甕に関する覚書—甲府市塩部遺跡の調査から—」『研究紀要』22 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 駒形敏朗<sup>123</sup> 1987 『横山遺跡』長岡市教育委員会
- 坂井秀弥<sup>123</sup> 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡 下新町遺跡 子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥<sup>123</sup> 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 一之口遺跡西地区』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥<sup>123</sup> 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
- 佐々木満 2005 『龍部遺跡Ⅱ』甲府市文化財調査報告30 山梨県中地域振興局・甲府市教育委員会
- 笹澤正史<sup>123</sup> 1999 『新潟県上越市上千原地区ほ場整備関連発掘調査報告書 津合田遺跡』上越市教育委員会
- 上越市史編さん委員会 2003 『上越市史』資料編2 考古 上越市
- 杉本厚典 2006 「河内地域」『古式土器の年代学』(財)大阪府埋蔵文化財センター
- 関 雅之 1999 『葛塚遺跡』豊栄市教育委員会
- 滝沢規明 2005a 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』
- 滝沢規明 2005b 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 寺沢 薫<sup>123</sup> 1986 『矢部遺跡』奈良県文化財調査報告書第34集 奈良県立橿原考古学研究所
- 土橋由理子 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第131集 小野沢西遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 西川修一 1992 「関東における畿内系の甕について」『庄内式土器研究』Ⅱ 庄内式土器研究会
- 西村 歩 2003 「古墳出現期における和泉地域の土器様相と集落の動向」『古墳出現期の土器と実年代 シンポジウム資料集』(財)大阪府埋蔵文化財センター
- 野村忠司<sup>123</sup> 2000 『新潟県中頸城郡中郷村龍峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』新潟県中頸城郡中郷村教育委員会
- 秦 繁治<sup>123</sup> 1990 『岡嶺遺跡発掘調査報告書』新潟県清里村教育委員会
- 早野浩二 1996 『弥生時代後期～古墳時代前期の東海地方における畿内系の甕について』『第4回東海考古学フォーラム』東海考古学フォーラム
- 細井佳浩<sup>123</sup> 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第166集 土居下遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 前山精明・相田泰臣 2002 『南赤坂遺跡』巻町教育委員会
- 三ツ井朋子<sup>123</sup> 1997 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第120集 大洞原C遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山口忠明 2006 「蔵王遺跡について」『新潟県考古学会第18会大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 山崎忠良<sup>123</sup> 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第120集 下割遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良<sup>123</sup> 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 下割遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉田博行<sup>123</sup> 1990 『会津坂下町文化財調査報告書第17集 樋渡台畑遺跡』福島県河沼郡会津坂下町教育委員会
- 米田敏幸 1991 『土器の編年Ⅰ 近畿』『古墳時代の研究』6 雄山閣
- 渡邊裕之<sup>123</sup> 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 横マクリ遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡邊ますみ<sup>123</sup> 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』黒崎町教育委員会

## 遺構観察表

## 掘立柱建物 (SB1)

桁行	4.5m	架間	5.0m	床面積	22.5	主軸方位	N-45° 東				
柱穴番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面積 (m <sup>2</sup> )	柱穴間隔	基礎 (m)		備考
36	13G1	円形	U字状	0.39	-	0.4	12.3	P96-P96	1.9		
93	13G8	円形	溝状	0.3	-	0.11	12.62	P93-P99	1.57		底面に径 8cm の小ピットをもつ。
94	12G9-10	楕円形	台形状	0.44	0.32	0.41	12.3	P94-P104	1.35		
95	12G10	楕円形	円筒状	0.48	0.35	0.15	12.56	-	-		欄干柱
96	12G10	楕円形	溝状	0.36	0.32	0.38	12.35	P96-P94	1.62		
99	12G 2・3	楕円形	溝状	0.42	0.3	0.14	12.66	P99-P105	1.38		
104	12G9-10	楕円形	U字状	0.33	0.31	0.42	12.3	P104-P93	1.55		
105	12G2	楕円形	U字状	0.32	0.28	0.44	12.36	-	-		
114	12P25	楕円形	U字状	0.33	0.22	0.41	12.34	P114-P96	1.55		
120	12P22・12G2	円形	U字状	0.2	-	0.2	12.55	-	-		遺物に関連するかどうかは不明

## 溝 (SD)

遺構番号	遺構番号	グリッド	平面形	断面形	延長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	底面積 (m <sup>2</sup> )	備考
SD	11	15K・L1桁・J・K・L71	-	溝状 (台形状)	31	0.76 ~ 0.8	0.06 ~ 0.23	12.33 ~ 12.39	一部上面では土層入る。テラスを持つ。>SK62
SD	29	12I18	-	溝状	0.64	0.17	0.05	12.56	
SD	31	12P22・23・12G2・3	-	U字状	1.75	0.24	0.13	12.62	
SD	42	14G24・25	-	溝状	0.92	0.3	0.05	12.52	
SD	43	14G23・24	-	溝状	2.04	0.58	0.06	12.51	
SD	45	16G21,16H3・6	-	V字・溝状	3.76	0.3 ~ 0.36	0.12	12.64 ~ 12.66	
SD	57	12P 4・5・19	-	溝状	-	-	-	0.05	2.84
SD (両溝状遺構)	71	12I16・7・11・12	半楕形	溝状	1.14	0.6	0.07	12.62	両溝状遺構
SD (両溝状遺構)	74	12H7	半楕形	U字状	0.65	0.28	0.09	12.6	両溝状遺構 底面にピットあり 12.52 12.24
SD (両溝状遺構)	77	12H24	-	溝状	0.67	0.14 ~ 0.18	0.06	12.6	両溝状遺構
SD (両溝状遺構)	80	12H16・17・22・23	-	溝状	4	15 ~ 30	0.04	12.6 ~ 12.61	両溝状遺構 <SK81
GSSD	81	11F・12F・12P	-	円筒状	19以上	1.55 ~ 2.0	(0.57)	12.26	ほぼ東西方向。> 08SH01, > 08SH19
SD (両溝状遺構)	87	12H19・24	-	溝状	(1.46)	0.12 ~ 0.14	0.05	12.6	両溝状遺構
SD	100	12G24・25・12H4・5	半楕形	溝状	2.46	1.11	0.09	12.62	
SD	124	14H3・8・9・10	-	溝状	(4.8)	0.24 ~ 0.3	0.04	12.53 ~ 12.6	
SD	127	14H3・4	-	溝状	1.2	0.2 ~ 0.25	0.07	12.5 ~ 12.57	
SD	130	14H 5・10	-	溝状	2.72以上	0.18 ~ 0.26	0.04	12.64 ~ 12.6	
SD	164	11G20・25	-	溝状	1.7	0.18 ~ 0.25	0.06	12.62	SD165 と一連の溝群か
SD	165	11G20	-	溝状	0.8以上	0.26 ~ 0.23	0.06	12.61	SD164 と一連の溝群か
SD	171	10H25,10H5,11H16・21	-	溝状	3.75	0.7以上	0.14	12.4	
SD	189	13G20・25	-	溝状	1.93	0.16	0.02	12.5	
SD	201	11J7・8・12・13	-	溝状	1.56	0.2 ~ 0.42	0.05	12.5	

## 土坑 (SK)

遺構番号	遺構番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面積 (m <sup>2</sup> )	備考・遺構存在関係
SK	24	12B 8・9	楕円形	溝状	0.92	0.6	0.11	12.57	
SK	37	13G3・4	円形	溝状	0.68	-	0.13	12.49	
SK (両溝状遺構)	60	12H12・14・18・19	半楕形	溝状 (階段状)	-	-	0.12 (0.4)	12.5 (12.2)	底面に土坑状の落ち込み。
SK (両溝状遺構)	76	12H14	半楕形	溝状	0.92	0.66	0.1	12.56	
SK (両溝状遺構)	81	12H23	長方形	円形	0.78	0.6	0.26	12.4	> SK60, > SK82
SK (両溝状遺構)	82	12H23	半楕形	円形	0.46	0.44	0.1	12.54	
SK	97	11G25,12G21	楕円形	溝状	0.78	0.9	0.06	12.68	
SK	101	12G16・21	長方形	溝状	0.7	0.4	0.08	12.63	
SK	119	11H16	楕円形	溝状	0.9	0.8	0.07	12.63	
SK	121	14H24・25,14H4・6	半楕形	溝状	1.76	0.94	0.2	12.38	
SK	157	10E5・10	半楕形?	溝状?	2.15	0.87以上	0.12	12.5	
SK	172	11H21・22	半楕形	溝状	1.22	1.14	0.32	12.29	
SK	178	11G25,12G21,11H5,12H1	楕円形	円筒状	1.37	0.88	0.19	12.36	

## ピット (P)

遺構番号	遺構番号	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面積 (m <sup>2</sup> )	備考
P	14	14G21	円形	U字状	0.18	-	0.24	12.46	
P	23	12P4	楕円形	円筒状	0.32	0.24	0.11	12.57	
P	25	12B8	方形	溝状	0.3	-	0.08	12.58	
P (両溝状遺構)	53	12H22	楕円形	円筒状	0.37	0.24	0.14	12.52	
P (両溝状遺構)	54	12H23	楕円形	U字状	0.24	0.2	0.28	12.4	
P (両溝状遺構)	55	12H24	円形	U字状	0.2	-	0.36	12.4	
P (両溝状遺構)	59	12H10,13H6	円形	U字状	0.31	-	0.12	12.6	
P	65	16H14	円形	U字状	0.24	-	0.26	12.32	
P (両溝状遺構)	72	12H9	円形	U字状	0.32	0.29	0.38	12.36	
P (両溝状遺構)	73	12H12	円形	円筒状	0.2	-	0.07	12.6	
P (両溝状遺構)	78	12H24	楕円形	U字状	0.14	0.12	0.13	12.62	
P (両溝状遺構)	79	12H16	円形	V字状	0.14	-	0.14	12.5	断面下部が生る。
P (両溝状遺構)	83	12H12	楕円形	U字状	0.15	0.12	0.26		



観 察 表

遺構種別	遺構番号	グリッド	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面積高 (m)	備考
F (両溝状遺構関連)	84	12H18	円形	U字状	0.12	-	0.12	12.53	
F (両溝状遺構関連)	85	12H3	楕円形	V字状	0.22	0.2	0.08	12.6	
F (両溝状遺構関連)	86	12H12	円形	U字状	0.18	-	0.32	12.33	
F (両溝状遺構関連)	88	12H17	円形	V字状	0.13	-	0.2	12.44	断面下部が欠ける。肌少。
F (両溝状遺構関連)	89	12H19	楕円形	V字状	0.12	0.08	0.1	12.53	
F (両溝状遺構関連)	90	12H11	円形	U字状	0.1	-	0.22	12.48	
F	151	11H8	円形	平円状	0.14	-	0.06	12.59	
F	153	11H3	円形	U字状	0.13	-	0.14	12.51	
F	154	10H5	楕円形	U字状	0.22	0.15	0.28	12.28	
F	155	10K20	楕円形	竪状	0.3	0.25	0.08	12.47	
F	156	10H5+20	円形	V字状	0.1	-	0.26	12.29	断面下部が欠ける。肌少。
F	158	12H9	円形	U字状	0.17	-	0.25	12.31	
F	162	11G24	楕円形	竪状	0.2	0.16	0.04	12.62	柱状残存
F	169	11G19	円形	U字状	0.22	-	0.16	12.58	

性格不明遺構 (SX)

遺構種別	遺構番号	グリッド	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面積高 (m)	備考
SX	8	12G22	円形?	竪状	0.94	-	0.1	12.6	瓦工層での張り込みは明確ではない。
SX	41	14G20+25,15G16+21	長楕円形	円形-竪状	2.29	0.9	0.28	12.32	長軸方向に竪状の断面。
SX	49	14H25,15H21	不整形	竪状	1.74	0.54	0.08	12.5~12.55	
SX	50	14H23	不整形	竪状	0.58	0.5	0.12	12.48	
SX	111	13G4+5,9+10	不整形	竪状	1.68	(0.88)以上	0.08	12.52	
SX	112	12G20+25,13G16	不整形	竪状	3.75	0.45~1.35	0.08	12.57~12.55	SD100と同一流線形か。
SX	117	11F15	楕円?	竪状	1.98	(0.74)	0.24	12.6	2層以上に土層が集中して分取。
SX	119	12F21	円形?	竪状	(1.6)	(0.94)	-	-	<08H061
SX	126	14H3	長方形	竪状	1	0.78	0.07	12.5~12.55	
SX	128	14H12+4+19	不整形	竪状	1.5	1.04	0.08	12.51	
SX	136	15H17	不整形(方形)	竪状	0.48	0.2	0.38	12.2	
SX	161	1F15,12F21	不整形(積円)	竪状	1.64	0.72	0.05	12.71	
SX (中継)	213	15J19+24	楕円形	竪状	1.2	0.42~0.62	0.15	12.3	中継土層最盛出上。
SX	238	15J11+16	不整形	縦設状	2.68	1.54	0.3	12.26	1階出上。

性格不明遺構 (土器集中) (SX)

遺構種別	遺構番号	グリッド	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面積高 (m)	備考
SX (土器集中)	1	13H4+5	不明(楕円形)	不明	1.3	0.54	不明	12.75~12.8	
SX (土器集中)	7	13H2+3+7+8	不整形	不明	1.3	-	-	12.74~12.8	
SX (土器集中)	12	14H23+24,14G3+4	不整形	竪状	2.98	2.9	0.16	12.6	底面積込から土器出上
SX (土器集中)	21	12G3+7	不明	不明	1.72	0.54	不明	12.76~12.78	敷土が正盛出上。
SX (土器集中)	22	13H19+20+24+25	不明	不明	2.10	0.82	-	12.74~12.78	
SX (土器集中)	32	13G19+24	不明(不整形)	不明	1.4	-	-	12.71~12.79	
SX (土器集中)	47	14H16+21	不明(不整形)	不明	1.04	0.3	-	12.68~12.73	
SX (土器集中)	75	12H2	積円	不明	0.86	0.52	-	12.74~12.8	
SX (土器集中)	92	13G10	不明(楕円形)	不明	1.6	1.24	-	12.77~12.79	
SX (土器集中)	113	12F25,13F21	不明(不整形)	不明	4.2	(1.35)	-	12.85~12.99	
SX (土器集中)	118	11F19+20	不整形	不明	1.32	1.05	-	12.77	遺構の張り込みは確認できず。
SX (土器集中)	194	13H10	不明(円形)	不明	-	-	-	12.89~12.91	>SX186

井戸 (SE)

遺構種別	遺構番号	グリッド	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面積高 (m)	備考
SE (中継)	40	15H17	楕円形	U字状	0.79	0.61	0.8	11.91	
SE (中継)	103	11H19	楕円形	U字状	1.32	1.16	0.59	12.06	敷土から中継の遺構と判別した。
SE (中継)	152	10H19+20	円形	円筒状	1.22	-	0.66	11.9	
SE (中継)	203	10H25	楕円形	U字状	1.05	0.84	0.43	12.15	

## 遺物観察表

報告番号	出土位置			質量 (cm)				調整		製作材料	消費材料	備考	
	グランド	遺構	層位	口徑	器高	口径	最大径	外面	内面				
1	12F21	SD03	5上	D1 費	18.1	22.0		20.2	ハケ	ハケ	内面一部黒焼	スス 炭熱による赤変	内面に炭化物付着
2	12F22	SD03	5上	D1 費	18.6	(23.2)	4.1	20.0	ハケ	ハケ・ナデ	外面スス 内面黒焼	外面スス 内面黒焼	黒部黒部一部黒焼
3	11F25 - 12F16	SD03	4	D2 費	15.6	(26.9)	3.6	23.0	ハケ	ハケ・ナデ	外面一部黒焼	外面スス	一部黒焼
4	12F22	SD03	5上	D2 費	16.4			21.5	ハケ・ナデ	ナデ・ミガキ	内面黒焼	外面スス	
5	12F16	SD03	4	D2 費	18.8				ハケ	ハケ		外面一部スス	
6	12F16	SD03	5上	D2 費	20.6				ハケ	ナデ		外面スス	
7	11F20/25	SD03	4	D2 費	19.1				ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		外面スス	外面は器面が浮腫
8	12F22	SD03	5上	D2 費	13.9	14.3	3.5		ハケ・ナデ	ナデ	微細目肌	スス 炭熱による赤変	
9	12F22	SD03	4	D2 費	21.2			4.8		ミガキ		外面スス 内面黒焼	器にも分厚可
10	11F20 - 25	SD03	4	費			3.0				外面一部黒焼		
11	12F19	SD03	5	費			3.8				内外面一部黒焼	炭熱による器面酸化	
12	12F21	SD03	5上	費	14.3				ハケ	ハケ			広口器
13	12F19	SD03	5上	費	16.2							炭熱による赤変	直口器
14	11F20	SD03	4	小切痕				11.5	ミガキ	ハケ・ミガキ	内外面一部黒焼	内面に厚状の付着物	外面に赤変
15	12F20	SD03	4	有孔跡			3.8		ハケ	ハケ	外面一部黒焼		
16	12F20	SD03	5	跡	14.0	5.1	5.2		ナデ	ナデ	内面一部黒焼		裏の器底と類似
17	11F20/25	SD03	4	高杯	22.3								
18	11F20 - 25	SD03	4	高杯						ナデ	外面一部黒焼		微細目肌 外面赤変
19	12F18	SD03	5	A 費	15.9				タタキ	ハケ			
20	11H16	SD171	2	A 費	17.6								
21	11H21	SD171	3	A 費	18.5				タタキ	ナデ		外面スス	
22	11H16	SD171	1	A 費			5.4		タタキ	ナデ		炭熱による赤変	
23	11H16	SD171	2	A 費	16.5				タタキ				
24	11H21	SD171	3	費					ミガキ	ナデ	ナデ微細目肌		胎土組織 新断面
25	11G25	SD164	1	高杯								炭熱による赤変 外面 スス	裏内高杯
26	12H14 - 19	SK00	1	高杯	19.0								赤部か
27	12H19	SK00	1	費	12.8				ナデ	ナデ	微細目肌		広口器
28	12H14	SK76	1	費	12.2				ミガキか				新断面
29	12H14	SK76	1	A 費			4.6		タタキ・ハケ	ナデ	外面黒焼		
30	12G21	SK97	1	高杯					ミガキ	ミガキ			胎土組織
31	11H5	SK178	1	D2 費	12.2				ハケ	ナデ	外面一部黒焼		
32	11H5	SK178	3	A 費			23.2		ハケ・タタキ	ハケ		外面スス	内面に炭化物付着
33	12H1	SK178	2	D 費	12.0				ハケ	ハケ			スス
34	11H5	SK178	3	高杯					ミガキ	ナデ			
35	12H10	P59	1	A 費	19.0				タタキ	ナデ		スス	
36	12F24	P107	1	高杯					ミガキ		外面一部黒焼		
37	13H5	SK1	Ⅱ 2	器台	9.7	10.5	13.4	13.7	ミガキか	ナデ		受器内面細かく欠ける	受器赤変
38	13H5	SK1	Ⅱ 2	器台			6.4		ハケ・ミガキ	ハケ		炭熱による赤変・スス	跡も多く含む
39	13H3	SK7	Ⅱ 2	A 費	17.8								
40	12H12	SK7	Ⅱ 2	A 費			4.8		タタキ	ハケ			
41	13H3	SK7	Ⅱ 2	A 費			3.9						
42	16H4	SK12	1	器費	16.0				ハケ	ナデ		外面スス	
43	16H4	SK12	1	器台	81.0	7.2	12.8		ミガキ	ミガキ・ナデ		受器内面細かく欠ける	一部黒部(器口)赤
44	12H3	SK21	Ⅱ 2	跡	16.4				ナデ	ナデ			
45	12H3	SK21	Ⅱ 2	費			3.6	11.8	ハケ・ナデ		外面一部黒焼	器底微細目肌 欠け	
46	12H7	SK21	Ⅱ 2	器台			12.6		ミガキ	タタキ・ナデ	外面一部黒焼		
47	12H3	SK21	Ⅱ 2	器台	9.7	10.2	12.7		ミガキ	タタキ・ナデ			遺穴3か所
48	12H3	SK21	Ⅱ 2	器台	8.6				ミガキ	ナデ	内面黒焼	受器内面黒焼	遺穴3か所
49	12H19	SK22	Ⅱ 2	A 費	22.7				タタキ	ナデ		口縁黒焼	
50	12H19	SK22	Ⅱ 2	A 費	21.2				ハケ				
51	12H19	SK22	Ⅱ 2	C 費	18.2							外面スス	赤部赤
52	12H24	SK22	Ⅱ 2	D2 費	16.0				ハケ	ナデ		外面スス・炭化物	
53	12H25	SK22	Ⅱ 2	D2 費					ハケ	ナデ (転)	外面一部黒焼		
54	13G24	SK32	X	A 費	12.8		13.0		タタキ	ハケ			口縁・外面一部スス
55	13G24	SK32	X	A 費	13.6				タタキ				炭熱による赤変

観 察 表

観測 番号	出土位置			容積	法基 (cm)				調整		製作材料	消費材料	備考
	グリッド	遺構	層位		口径	器高	器径	器口径	調整				
									外面	内面			
56	13G24	SK32	X	A 類	16.1				タタキ				
57	13G24	SK32	X	A 類	18.4				タタキ				
58	13G24	SK32	X	A 類	16.7						内面一部黒焼	全体に黒焼か	
59	13G24	SK32	X	A 類	14.6				タタキ			外面一部スス	
60	13G24	SK32	X	A 類	18.4				タタキ	ハケ・ナデ		外面一部スス	
61	13G24	SK32	X	A 類	18.8				タタキか				
62	13G24	SK32	X	A 類	18.6				タタキか	漆黒		口縁部スス	
63	13G24	SK32	X	A 類	18.6				タタキ			外面スス	
64	13G24	SK32	X	A 類	16.4				タタキか			外面黒焼による赤変・割傷	
65	13G24	SK32	X	A 類	17.0				タタキ				
66	13G24	SK32	X	C7 類	16.4								
67	13G24	SK32	X	A 類			4.8		タタキ	タタリ・ナデ		外面スス 内面灰化物付着	黒焼による赤変
68	13G24	SK32	X	A 類			4.2		タタキ・ハケ	ナデ		外面スス 黒焼による赤変	
69	13G24	SK32	X	A 類			5.0		ハケ・タタキ	ナデ		外面スス 黒焼による赤変	
70	13G24	SK32	X	D1 類			4.4		ハケ			内面灰化物付着	黒焼による赤変
71	13G24	SK32	X	D1 類			3.4		ハケ	ハケ		外面スス 黒焼による赤変	
72	13G24	SK32	X	森林					七宝キ	ナデ	平文・流紋文		透穴3か所 赤変?
73	16H16	SK47	I	鉢	12.0	9.6	6.0		ハケ	ナデ	外面一部黒焼	外面スス 黒焼による赤変	口縁部に磨滅(凹部)が残る
74	16H16	SK47	I	D1 類	25.6		5.7		ハケ・七宝キ	ナデ		外面スス 黒焼による赤変	
75	16H21	SK47	I	D1 類	12.8		3.8		ナデ	ナデ	内面一部黒焼	外面スス	黒焼による赤変
76	16H16	SK47	I	D1 類	12.5					ナデ		外面スス 黒焼による赤変	
77	16H21	SK47	I	D1 類	15.7							外面一部スス	
78	16H21	SK47	I	D1 類	16.0				ハケ	ナデ		外面スス	
79	16H21	SK47	I	七宝	15.2				ナデ	ナデ	覆付部2条残存		靱皮口縁
80	12H2	SK75		A 類	15.6						内面一部黒焼		
81	12G10	SK92	Ⅱ	A 類	13.0				タタキ			外面スス	
82	12G10	SK92	Ⅱ	A 類	15.2				タタキ				器壁薄い
83	12G10	SK92	Ⅱ	A 類	20.6				タタキ				
84	12G10	SK92	Ⅱ	A 類			4.2		タタキ	ハケ		外面スス 黒焼による赤変	
85	12G10	SK92	Ⅱ	A 類			4.0		タタキ	ハケ	外面一部黒焼	外面スス	
86	12G10	SK92	Ⅱ	森林	23.0						一部黒焼		胎土剥離
87	12F25	SK113	Ⅱ	A 類	17.6				タタキ			外面スス	
88	12F25	SK113	Ⅱ	A 類	18.8		25.4		タタキ	ハケ・ナデ		外面スス	
89	12F25	SK113	Ⅱ	A 類	18.6		25.6		ハケ・タタキ	ハケ			
90	12F25	SK113	Ⅱ	C 類	23.6							黒焼による赤変	布留部内側
91	12F25	SK113	Ⅱ	D1 類	17.8				ハケ		内面一部黒焼	口縁部厚肌	
92	11F15	SK117	I	壺	25.6				ナデ	ナデ			胎土上段の磨滅より口縁部
93	11F15	SK117	I	壺	10.9				ナデ	ナデ	外面一部黒焼	口縁部磨滅(凹部)が残り	
94	11F15	SK117	I	鉢	17.2	4.9	3.0		七宝キ		外面黒焼		
95	11F20	SK118	I	A 類	16.0							外面スス	
96	11F20	SK118	I	A 類	15.1								
97	11F20	SK118	I	A 類	17.6							口縁部スス	
98	11F20	SK118	I	D 類?					ハケ				
99	11F20	SK118	I	壺			5.2		ナデ	ハケ	内面黒焼 胎面(凹)	外面黒焼による赤変・割傷	
100	11F20	SK118	I	壺			3.0					内外面黒焼による赤変	
101	12F21	SK119	2	小型壺	9.7								小型丸底型
102	1414	SK128	1	D2 類	18.6				ハケ				
103	1414	SK128	1	壺			6.4		ハケ・七宝キ	ハケ・ナデ		外面一部黒焼	広口型
104	1314	SK128	1	小型壺			11.3		七宝キ	ナデ	外面一部黒焼		小型丸底型
105	1310	SK194	Ⅱ	D 類	17.4	27.2	3.3	22.2	ナデ・ハケ	ナデ		スス 黒焼による赤変	黒焼により胎面一部剥離
106	15311	SK238	1	D1 類	15.2	20.8		17.4	ハケ	ナデ・ハケ		外面スス・灰化物	黒焼により胎面一部剥離
107	12H12		Ⅱ	A 類	11.8				タタキ	ナデ			

報告 番号	出土位置			形状	法基 (cm)				調整		製作時期	消費時期	備考
	グリッド	遺構	層位		口径	高さ	底径	最大径	調整				
									外面	内面			
108	12218		Ⅱ2	A 横	12.1			タタキ	ナデ			製熱による赤変	
109	13F23		Ⅱ2	A 横	15.8			タタキ				外面スス	
110	13E2		Ⅱ2	A 横	16.2			タタキ				外面スス	
111	15K10		Ⅱ2	A 横	21.0						外面一部調整		
112	16K16		Ⅱ2	A 横	19.8			タタキ	ナデ		外面一部調整		
113	16K17		Ⅱ2	A 横	21.4			タタキ			内外面一部調整		
114	16K17		Ⅱ2	A 横	15.8						内面調整		
115	11H22		Ⅱ2	A 横	15.2			タタキか			外面一部調整	製熱による赤変	
116	13Z3		Ⅱ2	A 横	16.0						一部調整	製熱による赤変	
117	14O付道			A 横	14.7								磨き跡、くの字に 置く痕跡
118	16J11		Ⅱ2	A 横	19.0							製熱痕跡	
119	13F21		Ⅱ2	A 横	17.8		3.3	タタキ	ナデ			製熱による赤変	
120	13H1		Ⅱ2	A 横			3.3	タタキ	ナデ・ハケ			外面スス 製熱による赤変 内面に灰化物付着	
121	11110		Ⅱ2	A 横				タタキ	ハケ		内面調整 外面一 部調整		
122	12112		Ⅱ2	A 横			2.4	タタキ	ナデ				
123	12H19		Ⅱ2	A 横			3.2	タタキ			内面灰化物付着		内面部分調整
124	11G10		Ⅱ2	C 横	14.6			ナデ	ナデ			外面スス 内面灰化物 付着	赤変
125	12H19		Ⅱ2	D1 横	16.2			ハケ	ナデ				
126	12H23		Ⅱ2	D2 横	16.8			ハケ・ナデ	ナデ			外面灰化物付着	
127	13G付道			D2 横	19.8			ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		磨削痕跡		
128	15H12		Ⅱ2	F 横	16.0			黒コナデ	黒コナデ		磨削痕跡あり	使用による磨耗	報告口縁埋没部
129	14H17		Ⅱ2	巻	19.3								動土に土灰の塊あり 広口部
130	12E2		Ⅱ2	巻	13.1								広口部
131	14H18		Ⅱ2	巻	13.9								直口部
132	12H25		Ⅱ2	巻	9.8	15.7	5.2	13.4	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	内面調整	底部欠け	半部にやや磨耗 直口部
133	12H18		Ⅱ2	巻	22.2			ミダキ	ミダキ				二重口縁部
134	13H15		Ⅱ2	巻	20.6								二重口縁部
135	11H・S 12H17		Ⅱ2	小型巻	8.4	5.3		ミダキ	ミダキ		内外面調整		小型丸底部
136	14G15		Ⅱ2	小型巻	12.0	9.8	2.0	ハケ・ケズリ	ナデ		内外面一部調整	外面スス 内面灰化物	底部約 2cm の平底 状
137	11E23		Ⅱ2	小型巻									小型丸底部
138	15H3		Ⅱ2	巻			5.5	ハケ	ハケ				
139	12F19		Ⅱ2	有孔鉢			3.5	タタキ	ナデ		外面一部調整		底部 1 孔
140	13G3		Ⅱ2	小型巻				タタキ	ナデ				底部 1 孔
141	13F21/23		Ⅱ2	(環)	5.0	3.9	4.0	ナデ	ナデ		磨削痕跡 外面一 部調整		ミニチュア土器
142	12H11		Ⅱ2	磨台							磨削痕跡		内外面調整
143	12H11		Ⅱ2	磨台	19.9			ミダキ	ミダキ		磨削 4 本所残存		受盤二角透しか
144	15H20		Ⅱ2	磨台			5.6		ハケ		磨削 2 本所残存		
145	15H24		Ⅱ2	磨台	8.7								
146	12G21		Ⅱ2	磨台	8.4			ミダキ	ミダキ		外面一部調整		底部の包物は不明
147	11E23		Ⅱ2	高杯									有粒土器 動土調整
148	13G11		Ⅱ2	高杯									動土調整
149	12G14		Ⅱ2	高杯									透穴
150	14E22		Ⅱ2	高杯									
151	14G16		Ⅱ2	高杯								製熱による赤変	製熱により表面灰化
152	12G19		Ⅱ2	高杯				ミダキ	ケズリ・ナデ		外面一部調整		中身付痕跡
153	13G付道			高杯				ミダキ	ナデ				
154	14H1		Ⅱ2	不明									エンタシス状
155	15H12		Ⅱ2	不明				ミダキ	ナデ		外面赤銅一部残存		厚手・内筒
156	15Z24	SK219	1	皿	14.7			ナデ	ナデ				中身 土層貫土器
157	12E25		Ⅱ2	不明 石製品	長 6.3	幅 3.8	厚 3.2	磨削痕					一部残存
158	14G12		Ⅱ2	原石	長 5.2	幅 4.7	厚 2.6	ヒスイ				表面を中心に製熱痕跡 あり	透穴

# 図 版

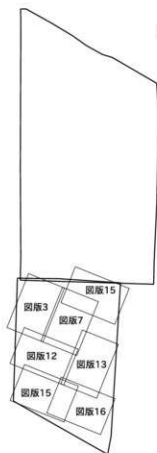
## 凡 例

- 1 遺構図版中のトーン種別は以下のとおり。

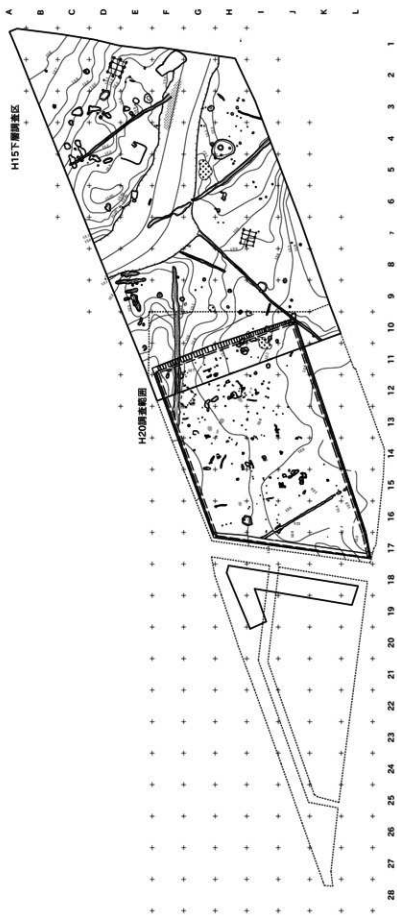
■ 土器集中遺構：土器がまとめて出土した範囲

▨ 不整形の落ち込み（木の根の痕跡か）

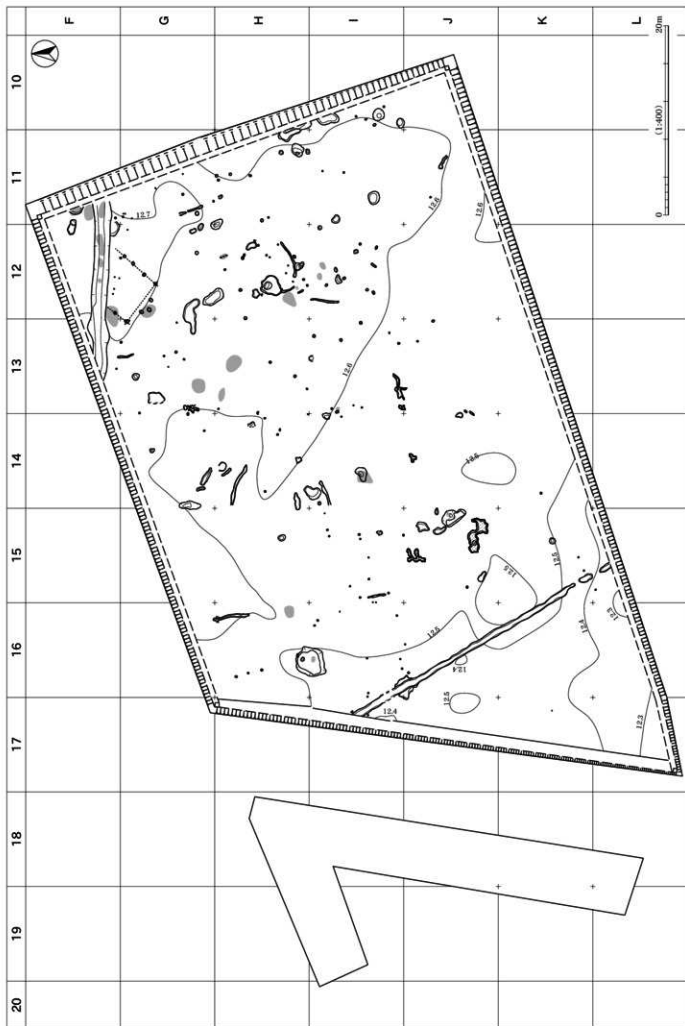
- 2 遺物図版中のトーン種別は各図版に示した。

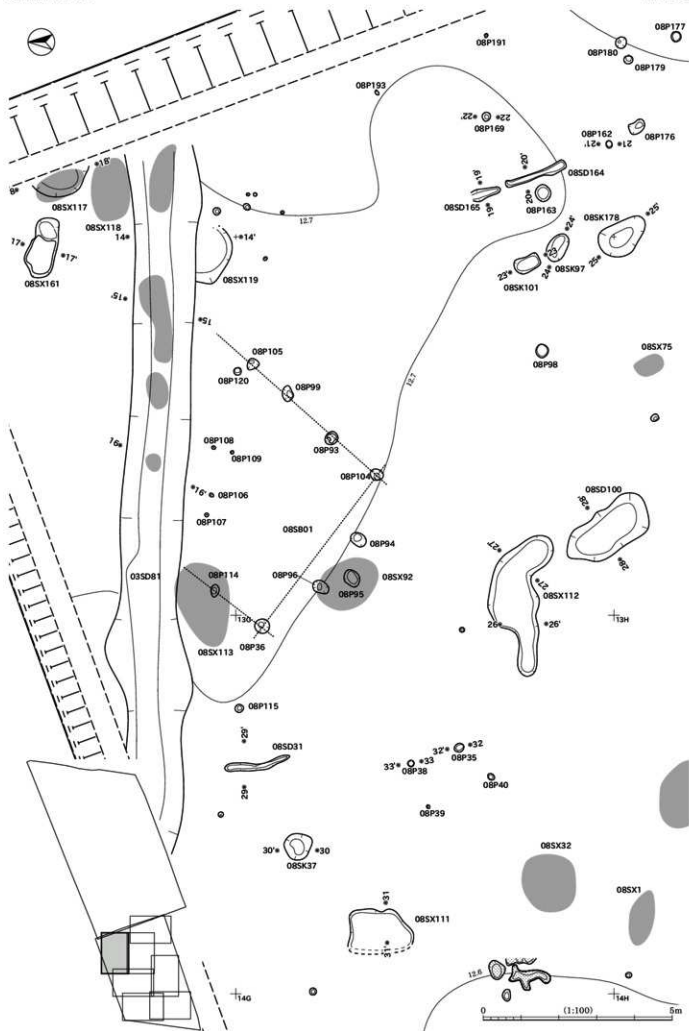


遺構平面図分割模式図



- ..... H15上層調査範囲
- ▨ H15B区(1)遺物集中区域
- H15上層集中遺構
- ▨ H20上層集中遺構

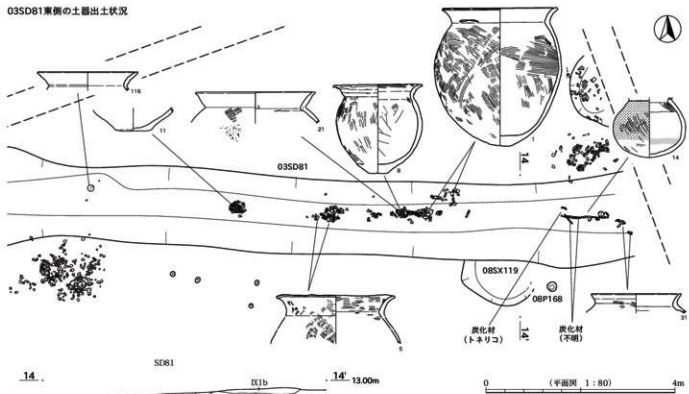






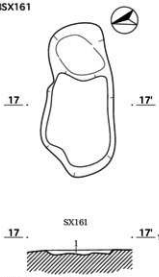


03SD81東側の土器出土状況



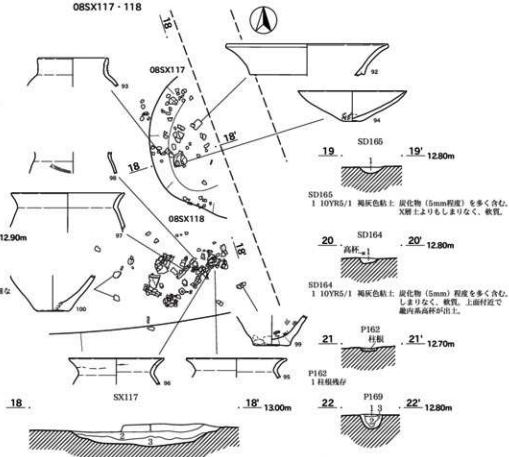
SD81  
 1 N2/1 褐色土: 濃縮な炭化物を含む。  
 2 7.5Y7/1 灰白色土: 海砂混入を多く含む。黒色土(濃縮な炭化物)をまだらに少量含む。  
 3 N3/1 褐色土: 炭化物(5mm程度)を多く含む。遺物が出土。  
 4 5GY6/1 オリーブ灰色土: 基本的に無炭化物。5よりも固くなる。  
 5 10YR5/1 褐色土: 炭化物(5-10mm程度)を多く含む。遺物が出土。  
 ①5Y/1 灰色粘土: 炭化物を含む。遺物が出土。  
 ②2.5Y/1 オリーブ灰色粘土: しまりなく軟質。

08SX161



SX161  
 1 10YR5/1 褐色土: X層よりも軟質。濃縮な炭化物を多く含む。

08SX117・118



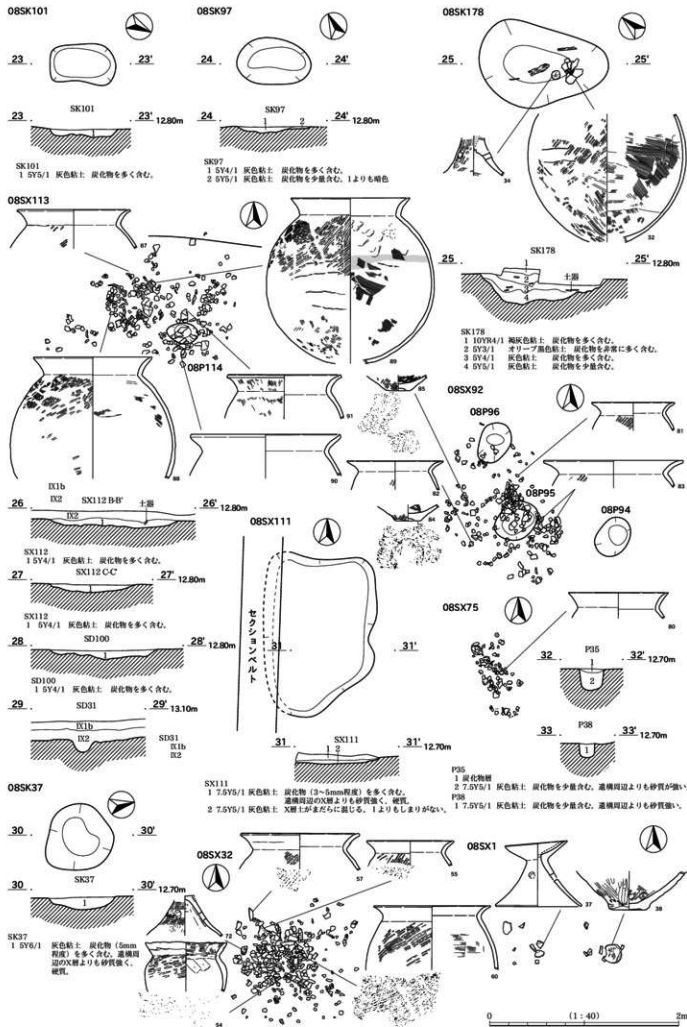
SX117  
 1 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土: 固くなる。細かい砂質が強い。  
 2 5YR4/1 褐色土: 炭化物(5mm程度)を多く含む。上面で土層が厚く出土。1よりも軟質でしまりがない。  
 3 5Y/1 灰色粘土: 2よりも軟質。濃縮な炭化物を多く含む。

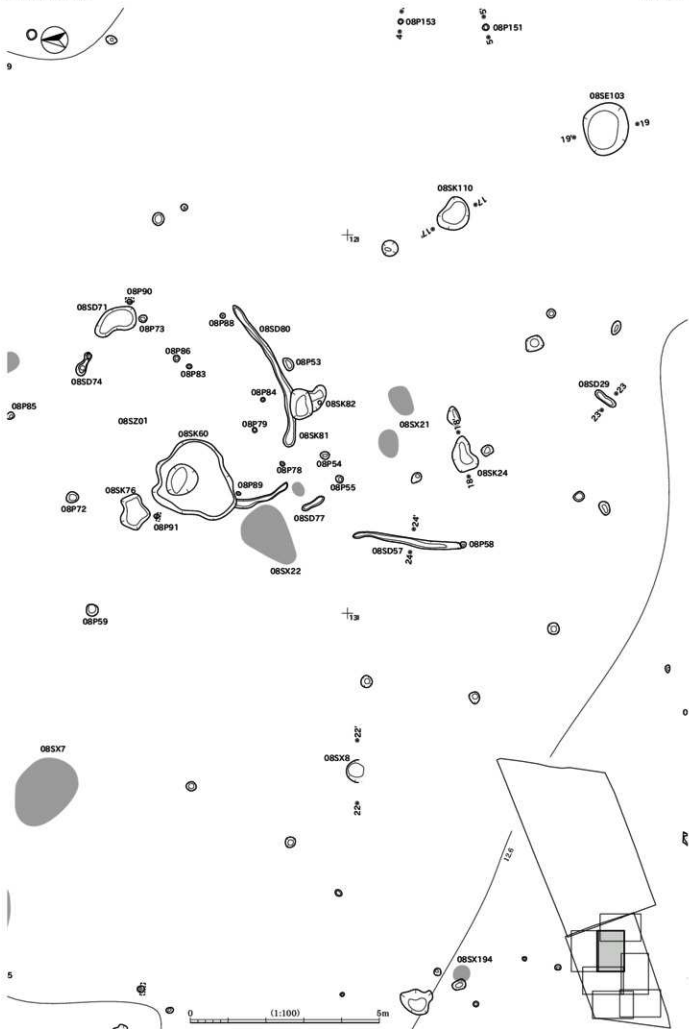
SD165  
 1 10YR5/1 褐色土: 炭化物(5mm程度)を多く含む。X層上よりもしまりなく、軟質。

SD164  
 1 10YR5/1 褐色土: 炭化物(5mm程度)を多く含む。しまりなく、軟質。上面付近で壺内基高杯が出土。

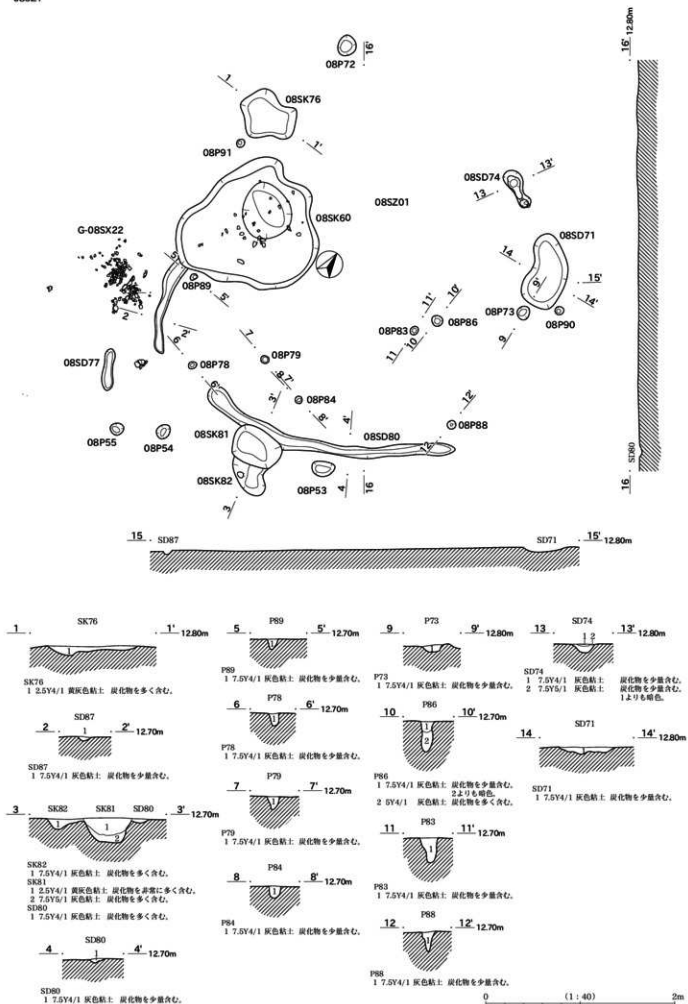
P162  
 1 柱礎残存

P169  
 1 5Y4/1 灰色粘土: 黒色微く軟質(木質の腐敗)。  
 2 7.5Y/1 灰色粘土: 黒褐色土が2-5mmの帯状に見られる。  
 3 7.5Y/1 灰色粘土: 2よりも固くなる。

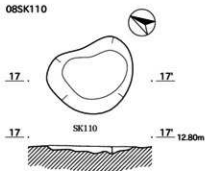




08SZ1

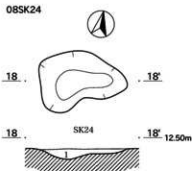


08SK110



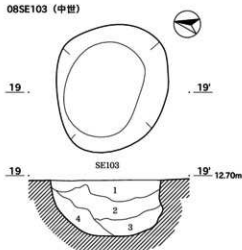
SK110  
1 5Y4/1 灰色粘土 炭化物を少量含む。

08SK24



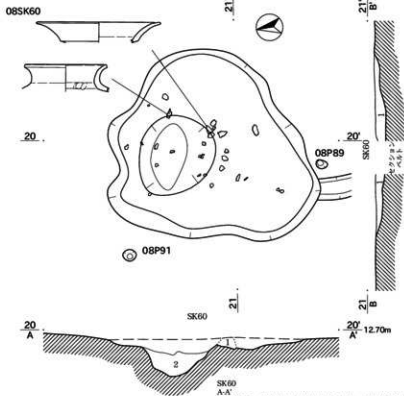
SK24  
1 7.5Y5/1 灰色粘土 炭化物を少量含む。

08SE103 (中世)



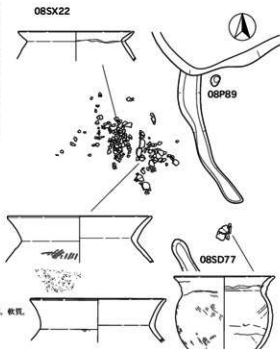
SE103  
1 N5/ 灰色粘土 暗灰色粘土ブロックを多く含む。  
2 7.5Y5/1 灰色粘土 オリーブ褐色粘土ブロックを非常に多く含む。  
3 5Y5/1 灰色粘土 オリーブ褐色粘土ブロックを少量含む。  
4 5Y5/1 灰色粘土 炭化物を少量含む。  
1~4はブロック状の粘土を多く含むことから人為的に炭された土と考えられる。

08SK60

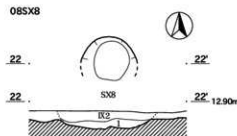


SK60  
A-A' 1 5Y4/1 灰色粘土 炭化物を多く含む。足跡中に崩壊、散骨。  
2 5Y5/1 灰色粘土 炭化物を少量含む。  
B-B' 1 5Y4/1 灰色粘土 炭化物を多く含む。

08SX22

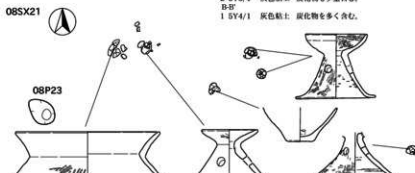


08SX8

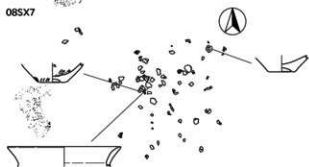


SX8  
1 10YR5/1 褐灰色粘土 炭化物 (5mm程度) を少量含む。X層土ブロックをまだらに含む。炭物出土。  
D2層に比べてしまりがなく、粘性が高い。

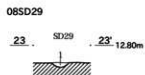
08SX21



08SX7

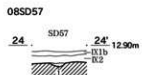


08SD29

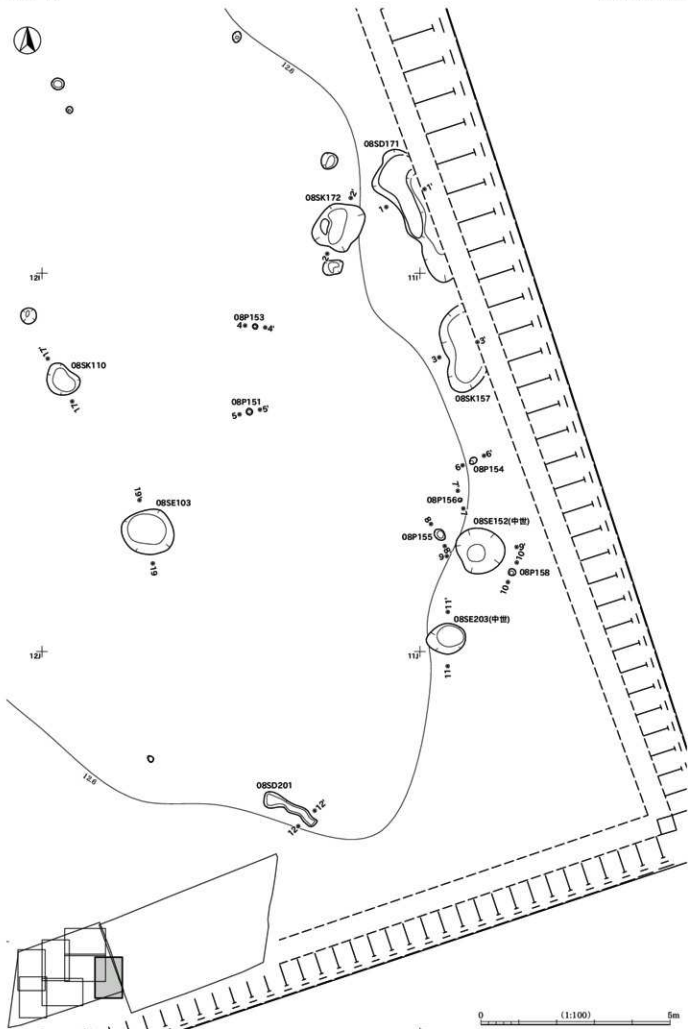


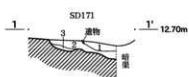
SD29  
1 2.5Y4/1 黄灰色粘土 炭化物を少量含む。

08SD57



SD57  
1 7.5Y5/1 灰色粘土 炭化物を少量含む。

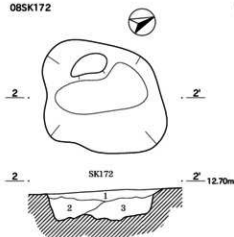




SD171

- 1 7.5Y5/1 灰色粘土: 炭化物を少量含む。
- 2 5Y4/1 灰色粘土: 炭化物を多く含む。
- 3 5Y5/1 灰色粘土: 炭化物を少量含む。

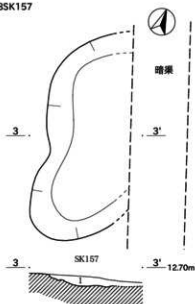
08SK172



SK172

- 1 5Y4/1 灰色粘土: 炭化物を多く含む。
- 2 5Y4/1 灰色粘土: 炭化物を非常に多く含む。
- 3 5Y5/1 灰色粘土: 文層とブロック・炭化物を少量含む。

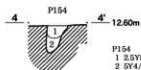
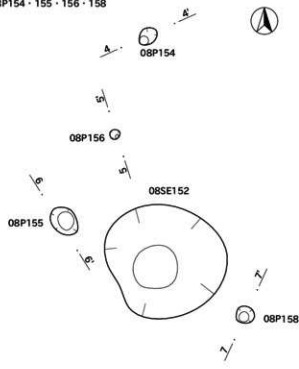
08SK157



SK157

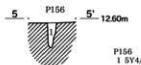
- 1 5Y4/1 灰色粘土: 炭化物を多く含む。

08P154・155・156・158



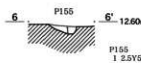
P154

- 1 2.5Y5/1 黄灰色粘土: 炭化物を多く含む。
- 2 5Y4/1 灰色粘土: 炭化物を少量含む。



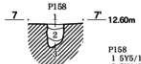
P156

- 1 5Y4/1 灰色粘土: 炭化物を多く含む。



P155

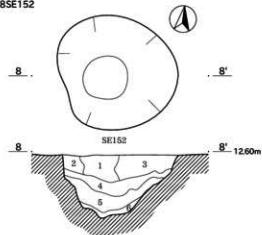
- 1 2.5Y5/1 黄灰色粘土: 炭化物を少量含む。



P158

- 1 5Y5/1 灰色粘土: 炭化物を少量含む。
- 2 5Y4/1 灰色粘土: 炭化物を多く含む。
- 3 5Y5/1 灰色粘土: 炭化物を少量含む。

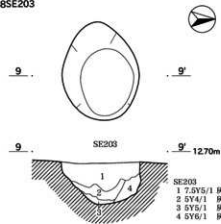
08SE152



SE152

- 1 2.5Y3/1 黒褐色粘土: 灰色粘土とブロックを多く含む。
- 2 5Y5/1 灰色粘土: 浅黄色粘土とブロックを少量含む。
- 3 5Y5/1 灰色粘土: 黒褐色粘土を少量含む。
- 4 7.5Y5/1 灰色粘土: 黒褐色粘土を多く含む。
- 5 7.5Y5/1 オリーブ黒色土: 灰色粘土・炭化物を多く含む。
- 6 5Y5/1 灰色粘土: 炭化物を少量含む。

08SE203



SE203

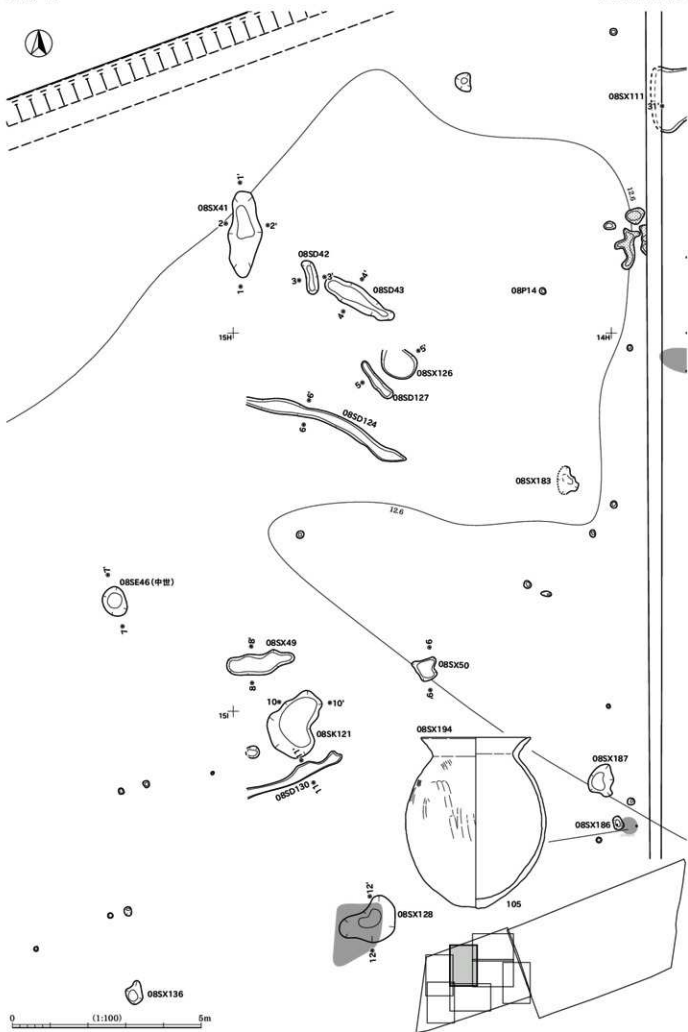
- 1 7.5Y5/1 灰色粘土: 黒褐色粘土とブロックを多く含む。
- 2 5Y4/1 灰色粘土: 黒褐色粘土とブロックを多く含む。
- 3 5Y5/1 灰色粘土: 炭化物を少量含む。
- 4 5Y6/1 灰色粘土: 黒褐色粘土とブロックを多く含む。



SD201

- 1 5Y4/1 灰色粘土: 炭化物を少量含む。







08SX237

0

08SX136

08SX238

08SX236

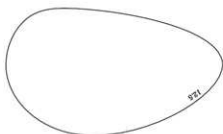
08SX235

15K+

91\*

15J+

6

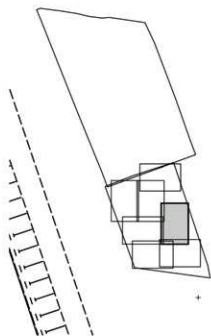


14K+

08SX241

08SX234

14J+

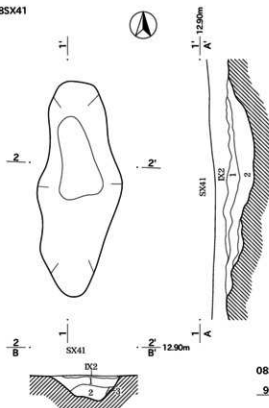


0 (1:100) 5m

13J+

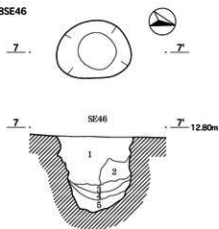
0

08SX41

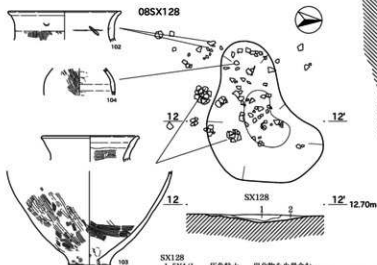


SX41 A-A'  
 1 7.5Y5/1 灰色粘土 炭化物をごく少量含む。2・3よりも固くしめる。  
 2 10Y4/1 灰色粘土 炭化物を多く含む。3よりも硬色。  
 3 10Y5/1 灰色粘土 炭化物・X層土ブロックを少量含む。  
 SX41 B-B'  
 1 7.5Y5/1 灰色粘土 炭化物をごく少量含む。2・3よりも固くしめる。  
 2 10Y4/1 灰色粘土 炭化物を多く含む。3よりも硬色。  
 3 10Y5/1 灰色粘土 炭化物・X層土ブロックを少量含む。

08SE46

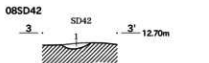


SE46 (上層遺構)  
 1 N4/1 灰色粘土 X層土ブロック・灰白色粒を少量含む。炭化物を多く含む。固くしめる。【人為的埋土】  
 2 7.5Y5/1 オリーブ黒色土 X層土ブロックを少量含む。炭化物を多く含む。固くしめる。【人為的埋土】  
 3 7.5Y4/1 灰色粘土 X層土ブロック・炭化物を少量含む。しまりなく軟質。  
 4 7.5Y2/2 オリーブ黒色土 微細な炭化物を少量含む。軟質。  
 5 10Y3/1 オリーブ黒色土 縦断面の端面上がまだらに凝結。4よりも硬色。



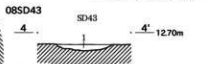
SX128  
 1 5Y4/1 灰色粘土 炭化物を少量含む。  
 2 10Y5/1 黒灰色粘土 X層土ブロックを少量含む。1層よりも軟質。

08SD42



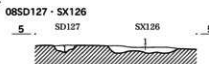
SD42  
 1 10Y5/1 灰色粘土 黒褐色粘土 (7.5YR3/1)ブロックが少量混じる。炭化物を少量含む。

08SD43



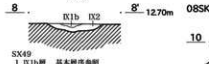
SD43  
 1 10Y5/1 灰色粘土 炭化物を少量含む。

08SD127・SX126



SD127  
 1 10Y5/1 黒灰色粘土 X層土ブロックを少量含む。  
 SX126  
 1 10Y5/1 黒灰色粘土 X層土ブロックを少量含む。

08SX49



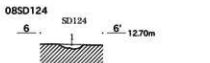
SX49  
 1 IX1b層 基本層序参照  
 2 IX2層 基本層序参照

08SX50



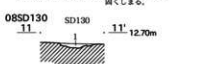
SX50  
 1 10YR5/1 黒灰色粘土 炭化物を多く含む。

08SD124



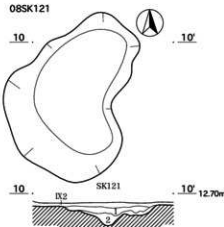
SD124  
 1 10YR5/1 黒灰色粘土 炭化物を少量含む。固くしめる。

08SD130



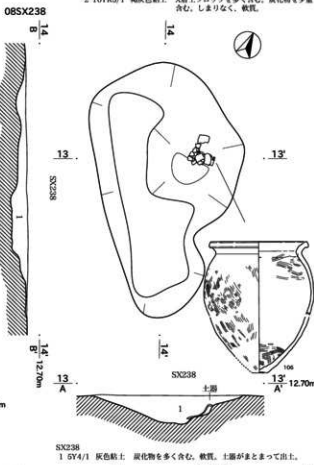
SD130  
 1 10YR5/1 黒灰色粘土 X層土ブロック。炭化物を少量含む。

08SK121

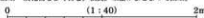


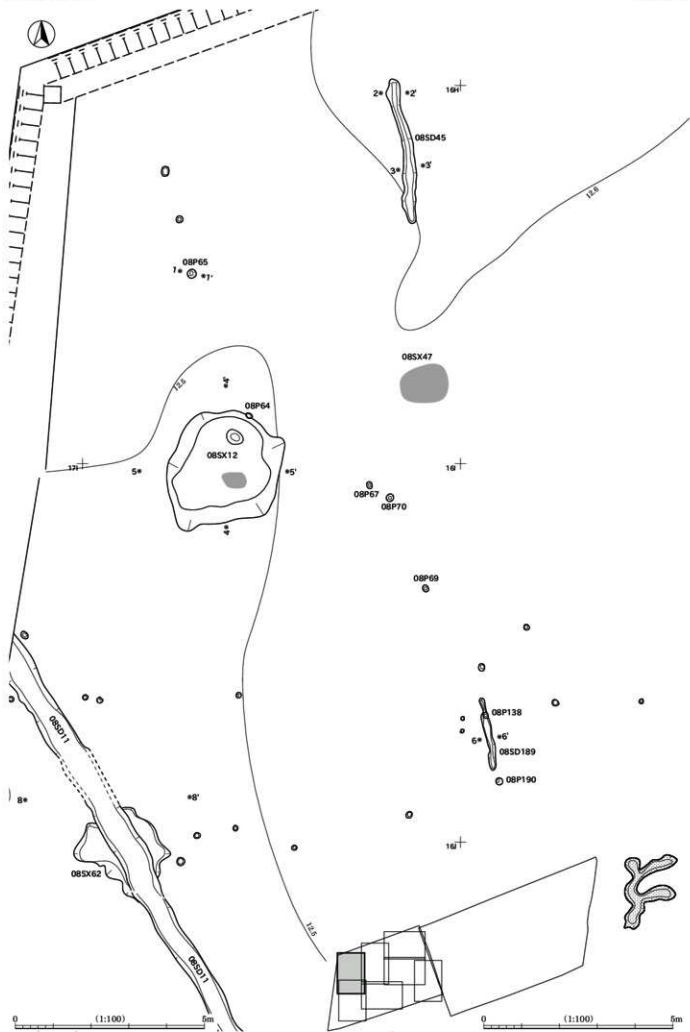
SK121  
 1 10YR5/1 黒灰色粘土 炭化物を多く含む。2よりも固くしめる。  
 2 10YR5/1 黒灰色粘土 X層土ブロックを多く含む。炭化物を少量含む。しまりなく、軟質。

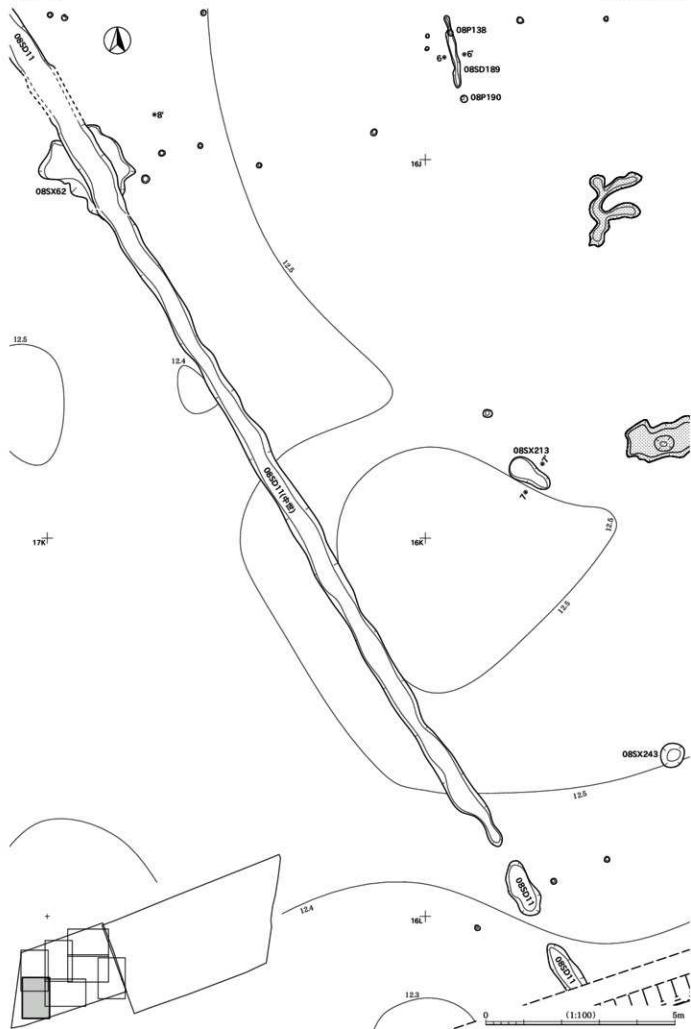
08SX238



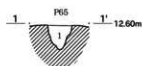
SX238  
 1 5Y4/1 灰色粘土 炭化物を多く含む。軟質。土層がまとまって出土。  
 (1:40)







OBP65

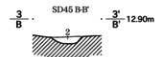


P65  
1 5Y6/1 灰系粘土: 灰白色粘土が塊状に露じる。微細な炭化物を少量含む。

O8SD45

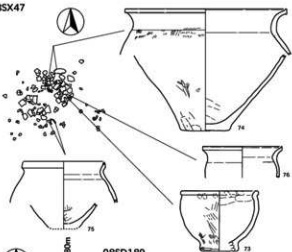


SD45 (IX2検出) A-A'  
1 7.5Y7/1 灰白色粘土: 2よりも固くしめる。  
2 7.5Y6/1 灰系粘土: 炭化物を少量含む。

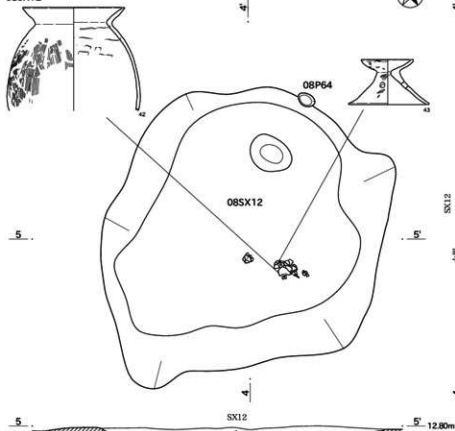


SD45 (IX2検出) B-B'  
2 7.5Y6/1 灰系粘土: 炭化物を少量含む。

OBSX47

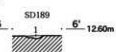


O8SX12



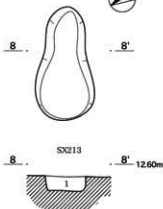
SX12 (IX2検出)  
1 5PB4/1 暗青灰色粘土: 遺構の中心付近で炭化物 (1~20mm) を多く含む。

O8SD189

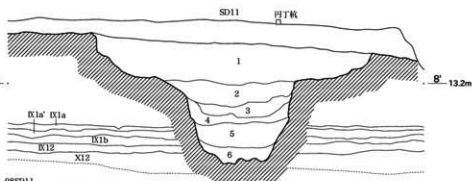


SD189  
1 5B5/1 青灰色粘土: 文層土がまだらに露じる。微細な炭化物をごく少量含む。

O8SX213

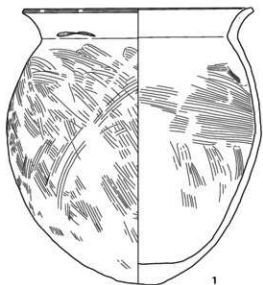


SX213 (上層遺構)  
1 5B5/1 青灰色砂質シルト  
灰色細砂・文層土ブロック  
がまだらに露じる。土層間  
風・クル4 (続) 出土。

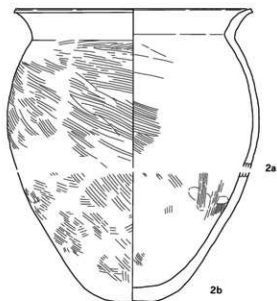


O8SD11  
1 7.5Y7/4 濃い青色砂質シルト。  
2 7.5Y6/1 灰系シルト質砂 細粒の砂。  
3 7.5Y7/1 灰白色土: 2よりも粒子細かい砂。  
4 N7/0 灰白色土: 2よりも粒子粗い砂。  
5 N6/0 灰系砂: 4よりも粒子粗い砂。  
6 5G7/1 暗緑灰色粘土: 暗灰色・灰白色粘土ブロックを露に含む。  
炭化物 (5~10mm程度) をまばらに含む。粘性強く、固くしめる。

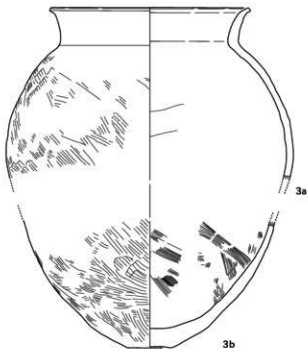
03SD81 (08SD33) ①



1

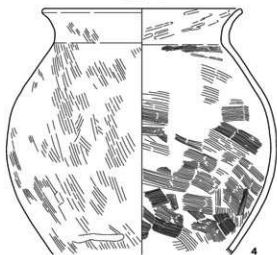


2b



3a

3b



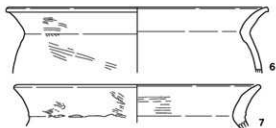
4



5



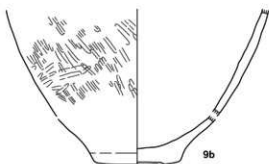
9a



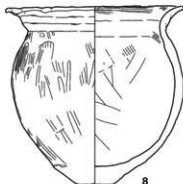
6



7



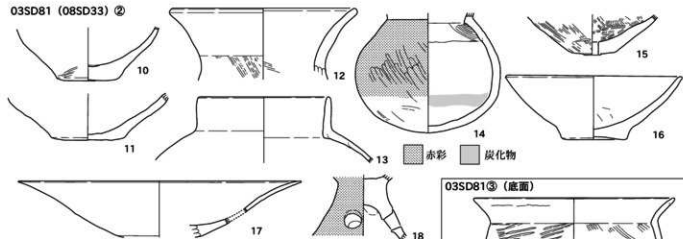
9b



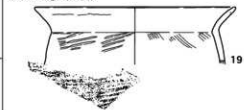
8

0 15cm (1.3)

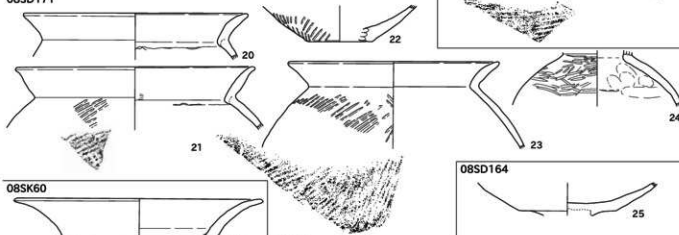
03SD81 (08SD33) ㊷



03SD81㊸ (底面)



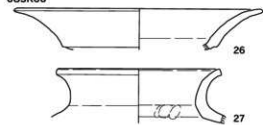
08SD171



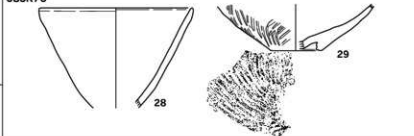
08SD164



08SK60



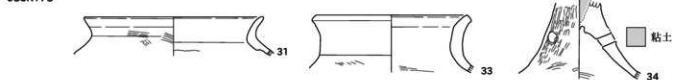
08SK76



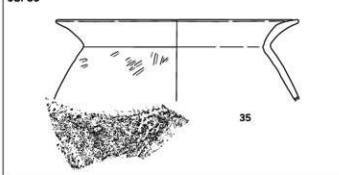
08SK97



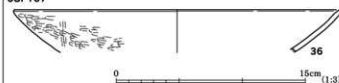
08SK178



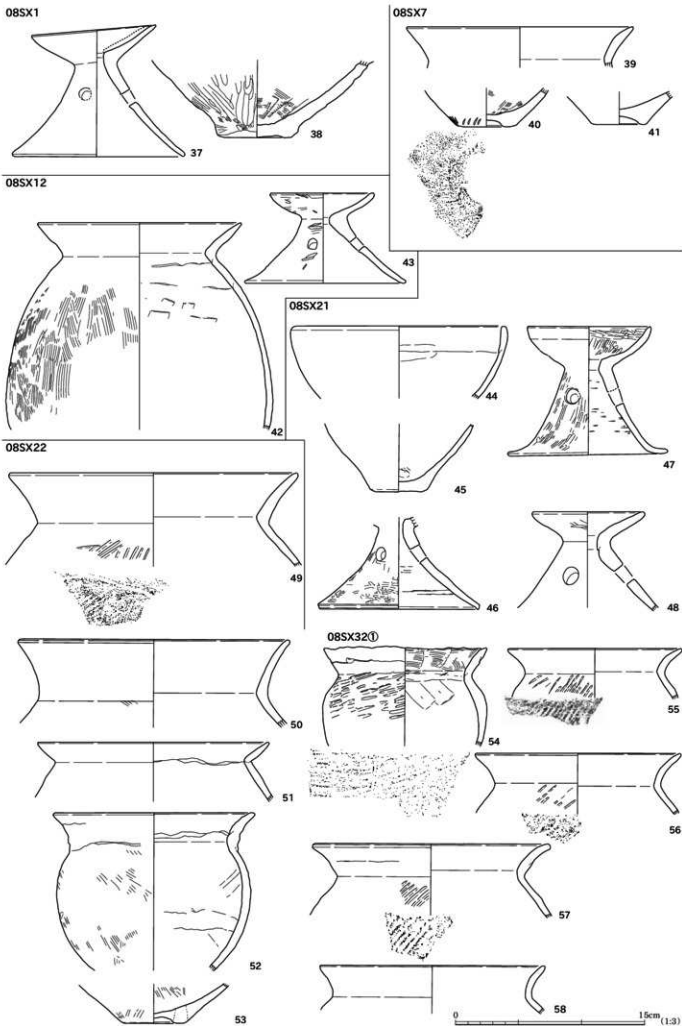
08P59



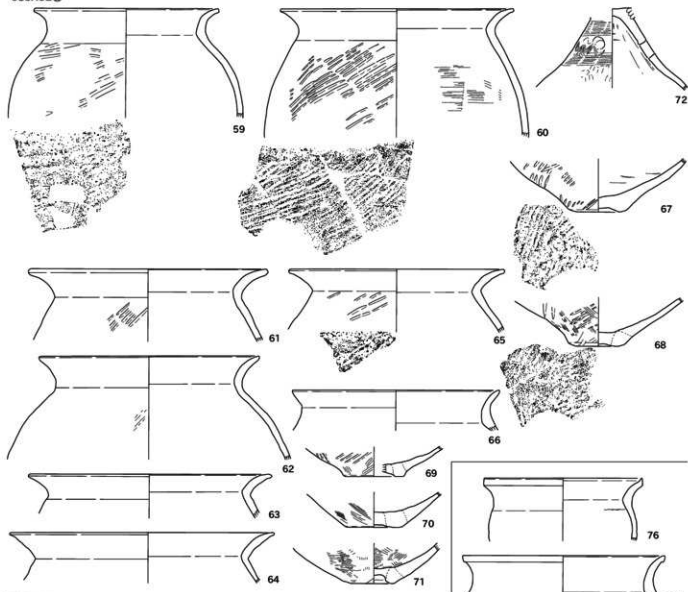
08P107



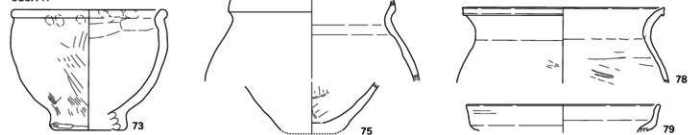




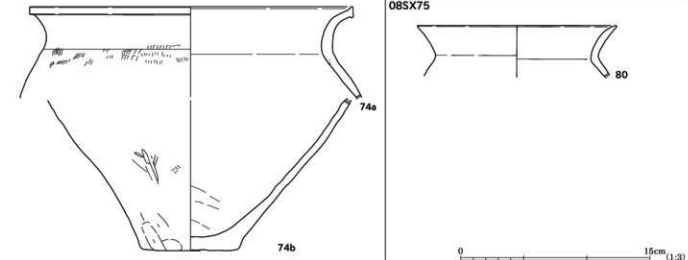
08SX32②



08SX47

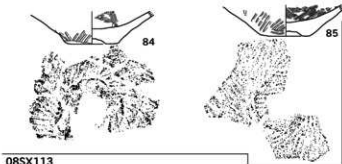
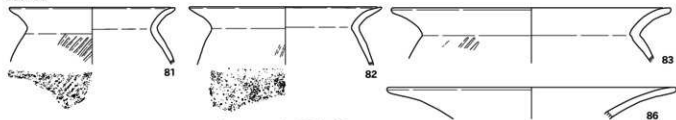


08SX75

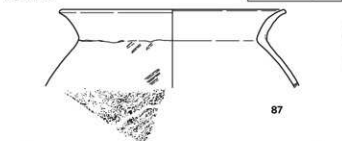


0 15cm (1:3)

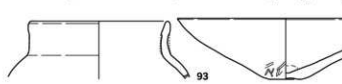
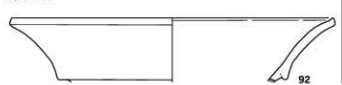
08SX92



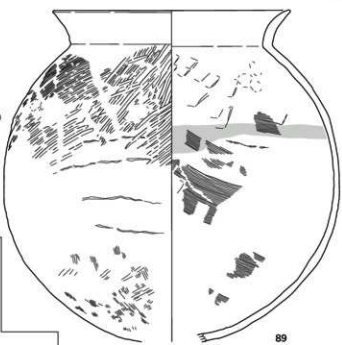
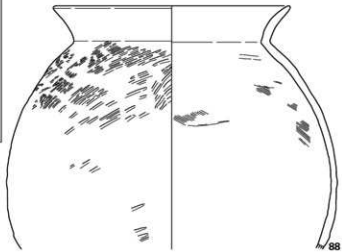
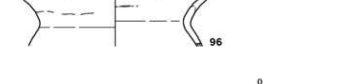
08SX113



08SX117



08SX118



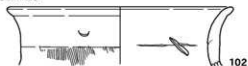
0 15cm (1:3)

08SX119

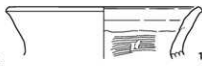


101

08SX128

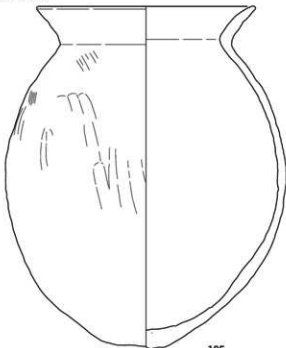


102

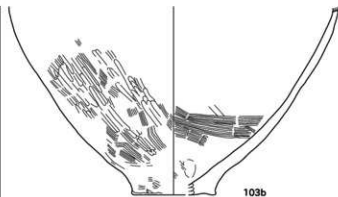


103a

08SX194



105

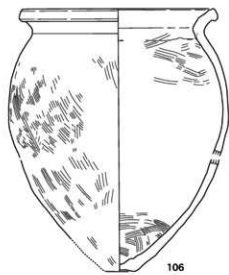


103b



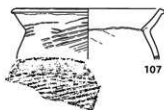
104

08SX238



106

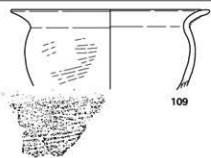
包含層出土遺物①



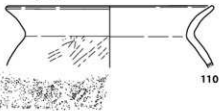
107



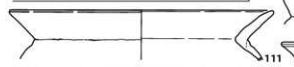
108



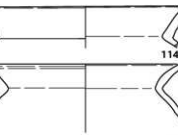
109



110



111



114



116



112



115



117



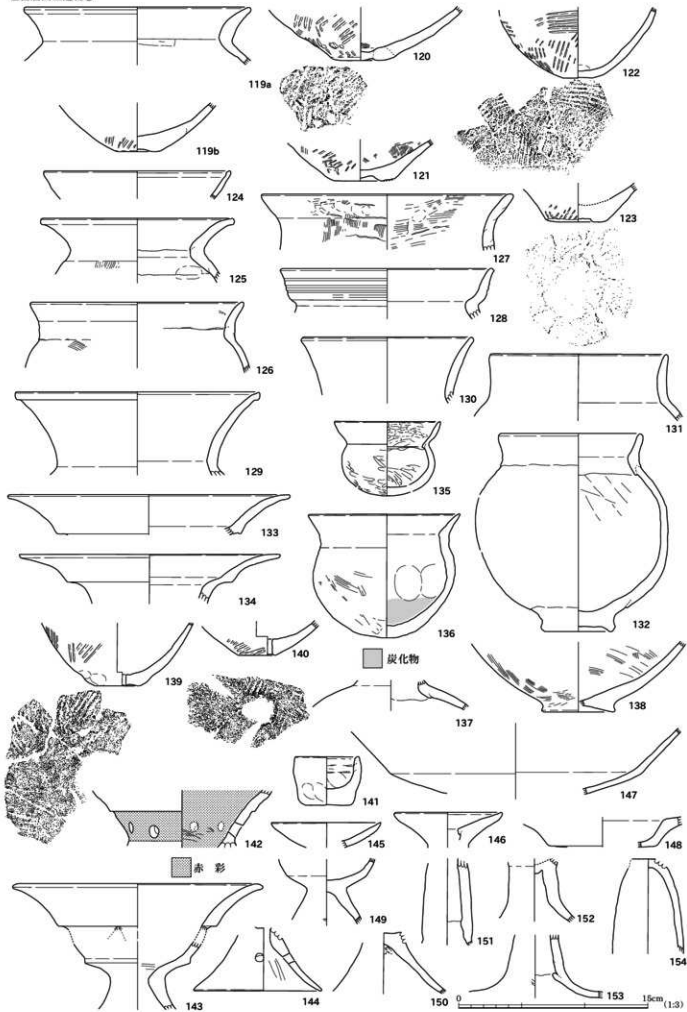
113



118

0 15cm (1:3)

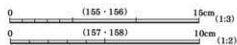
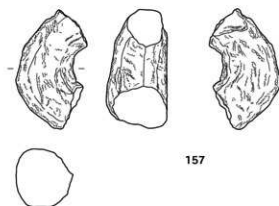
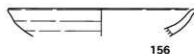
包含層出土遺物②



包含層出土遺物③



08SX213 (中世)





近景 東から



近景 西から



調査区全景 上から



土器集合





調査区北側遺構群 北東から



SB1 南西から



P114 断面 東から



P114 完掘状況 東から



P96 断面 東から



P96 完掘状況 東から



P105 断面 南から



P105 完掘状況 南から



P36 断面 東から



P36 断面 東から



P95 断面 南西から



P95 完掘状況 南から



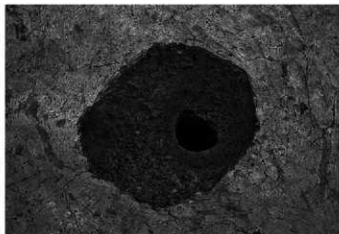
P99 断面 南から



P99 完掘状況 南から



P93 断面 東から



P93 完掘状況 東から



P94 断面 東から



P94 完掘状況 東から



P104 断面 東から



P104 完掘状況 東から



SK76 断面 南から



SK76 完掘状況 南から



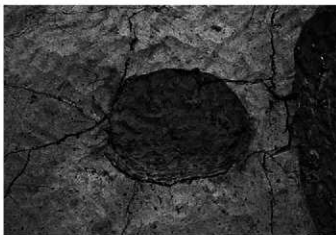
P89 断面 南から



P89 完掘状況 南から



P73 断面 東から



P73 完掘状況 東から



P73 断面 西から



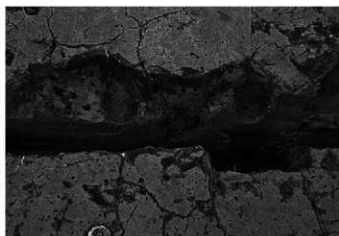
P73 完掘状況 西から



SD74 断面 東から



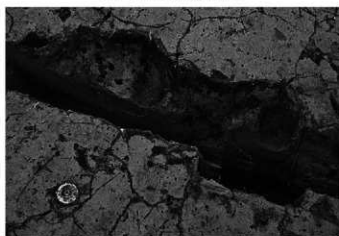
SD74 完掘状況 東から



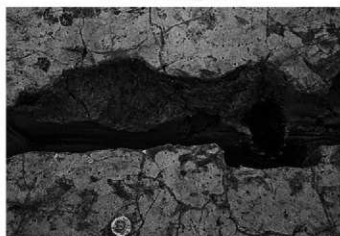
SZ1・SD74 完掘状況 南から



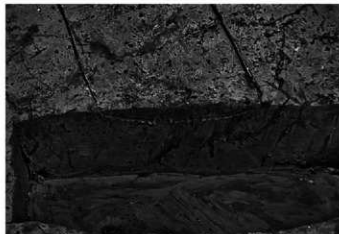
SZ1・SD74 完掘状況 南から



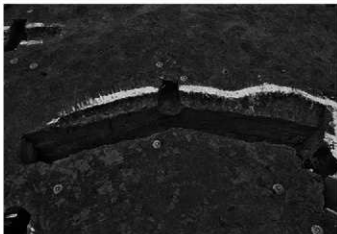
SZ1・SD74 完掘状況 南から



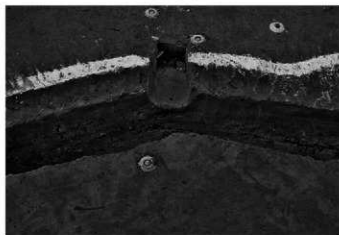
SZ1・SD74 完掘状況 南から



SD87 断面 北から



SZ1・SD87 断面 東から



SZ1・SD87 断面 東から



SZ1・SD87 断面 北から



P78 断面 南から



P78 完掘状況 南から



P86 断面 東から



P86 完掘状況 東から



SD71 断面 南から



SD71 完掘状況 南から



SK81・82、SD70 断面 東から



SK81・82 完掘状況 東から



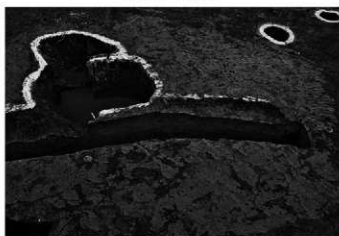
SZ1 遺構検出状況 東から



SD80 断面 東から



SZ1・SD80 断面 北から



SZ1・SD80 断面 北から



P79 断面 南から



P79 完掘状況 南から



P84 断面 南から



P84 完掘状況 南から



P83 断面 東から



P83 完掘状況 南から



P88 断面 東から



P88 完掘状況 東から





03SD81 遺構検出状況 東から



03SD81 遺物出土状況 西から



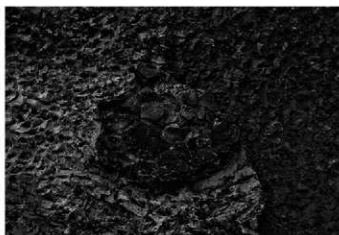
03SD81 遺物出土状況 南から



03SD81 遺物出土状況 南から



03SD81 遺物出土状況 南から



03SD81 遺物出土状況 北から



03SD81 遺物出土状況 西から



03SD81 遺物出土状況 北から



03SD81 遺物出土状況 西から



03SD81 遺物出土状況 東から



03SD81 断面 東から



03SD81 完掘状況 東から



SD29 断面 北東から



SD31 断面 南から



SD31 断面 南から



SD31 完掘 西から



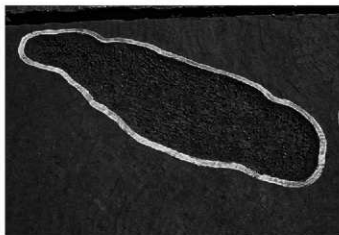
SD42 断面 南から



SD42 完掘状況 東から



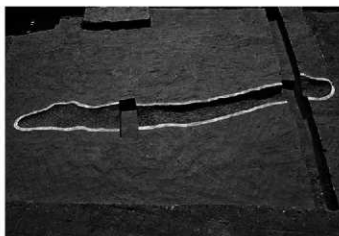
SD43 断面 南東から



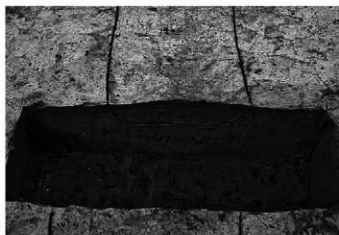
SD43 完掘状況 北から



SD45 断面 南から



SD45 完掘状況 東から



SD57 断面 南から



SD100 断面 南から



SD124 遺物出土状況 北から



SD124 遺物出土状況 北から



SD124 断面 東から



SD124 完掘状況 北から



SD127 断面 南から



SD127・SX126 完掘状況 北から



SD130 断面 東から



SD130 完掘状況 南から



SD164 遺物出土状況 南から



SD165 遺物出土状況 南から



SD164 断面 南から



SD165 断面 南から



SD163・164・165 完掘状況 南から



SD171 断面 南から



SD189 断面 南から



SD189 完掘状況 東から



SD201 断面 東から



SD201 完掘状況 東から



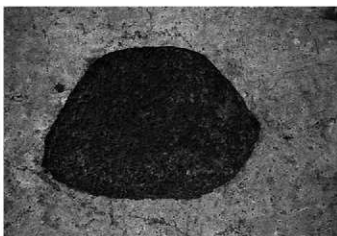
SK24 断面 南から



SK24 完掘状況 南から



SK37 断面 東から



SK37 完掘状況 東から



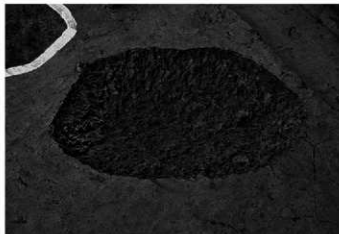
SK60 遺構検出状況 南から



SK60 断面 東から



SK97 断面 南から



SK97 完掘状況 南から



SK101 断面 東から



SK101 完掘状況 東から



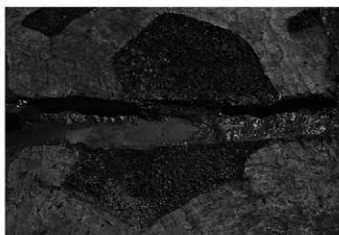
SK110 断面 東から



SK110 完掘状況 東から



SK121 断面 北から



SK121 完掘状況 北から



SK157 断面 南から



SK157 完掘状況 南から



SK172 断面 東から



SK172 完掘状況 東から



SK178 炭化材検出状況 南から



SK178 断面 南から



SK178 遺物出土状況 南から



SK178 完掘状況 南から





P35 断面 東から



P35 完掘状況 東から



P38 遺構検出状況 東から



P38 断面 東から



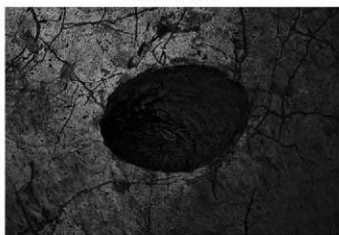
P65 断面 南から



P65 完掘状況 南から



P154 断面 南から



P154 完掘状況 南から



P155 断面 西から



P155 完掘状況 西から



P156 断面 東から



P156 完掘状況 東から



P158 断面 東から



P158 完掘状況 東から



SX1 遺物出土状況 南から



SX7 遺物出土状況 北から



SX8 断面 南から



SX8 完掘状況 南から



SX12 断面 東から



SX12 断面 東から



SX12 遺物出土状況 東から



SX12 完掘状況 北から



SX21 遺物出土状況 南から



SX21 遺物出土状況 南から



SX21 遺物出土状況 南から



SX21 遺物出土状況 南から



SX21 遺物出土状況 南から



SX21 遺物出土状況 南から



SX21 遺物出土状況 南から



SX21 遺物出土状況 南から



SX22 遺物出土状況 南から



SX22 遺物出土状況 西から



SX22 遺物出土状況 南から



SX22 遺物出土状況 (アップ) 南から



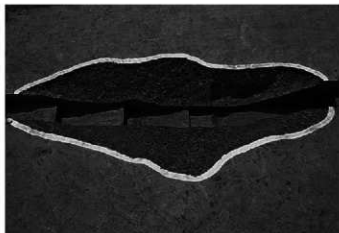
SX32 遺物出土状況 北から



SX32 遺物出土状況 (アップ) 北から



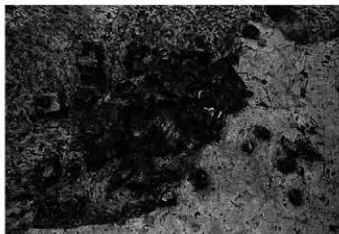
SX41 断面 北から



SX41 完掘状況 東から



SX47 遺物出土状況 南から



SX47 遺物出土状況 (アップ) 南から



SX49 断面 東から



SX49 完掘状況 北から



SX50 断面 西から



SX50 完掘状況 南から



SX75 遺物出土状況 東から



SX111 遺構検出状況 東から



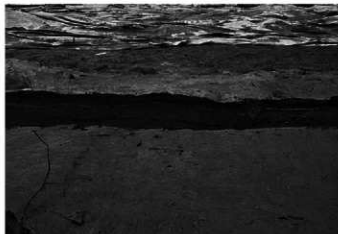
SX111 断面 南から



SX111 完掘状況 東から



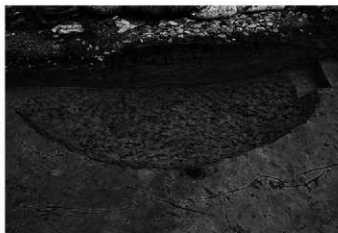
SX112 断面 西から



SX112 断面 東から



SX117 遺物出土状況 南西から



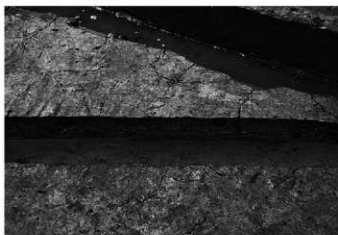
SX117 断面・完掘状況 西から



SX117・118 遺構検出状況 西から



SX118 遺物出土状況 南から



SX126 断面 南から



SX128 遺物出土状況 上から



SX128 断面 東から



SX128 完掘状況 東から



SX161 遺構検出状況 西から



SX161 断面 西から



SX161 完掘状況 西から



SX238 遺物出土状況 西から



SX238 南半部分断面 東から



SX238 北半部分断面 東から





SX238 断面 (東西ベルト) 南から



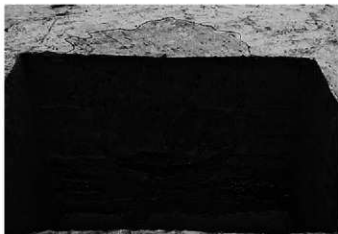
SX238 完掘状況 西から



SX347 遺物出土状況 上から



SE46 断面 東から



SE46 断面 東から



SE46 完掘状況 東から



SE103 遺構検出状況 東から



SE103 断面 東から



SE103 完掘状況 東から



SE152 遺構検出状況 南から



SE152 断面 西から



SE152 完掘状況 南から



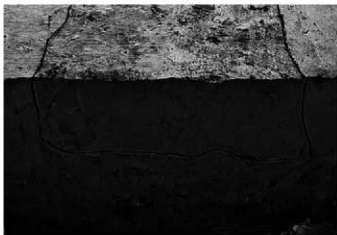
SE203 断面 東から



SE203 完掘状況 西から



SX213 遺構検出状況 北東から



SX213 断面 北西から



SX213 完掘状況 北東から



西地区調査風景 北から



西地区完掘 北から



西地区完掘 南から



2a



3a



2b



3b



5



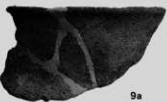
4



6



7



9a



10



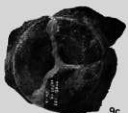
11



8

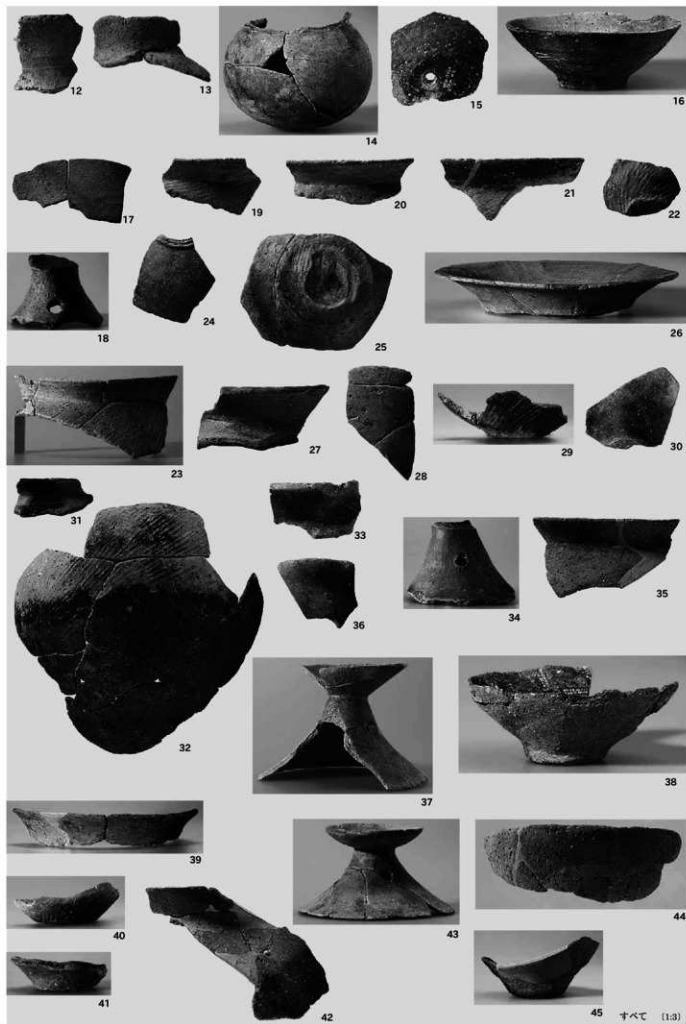


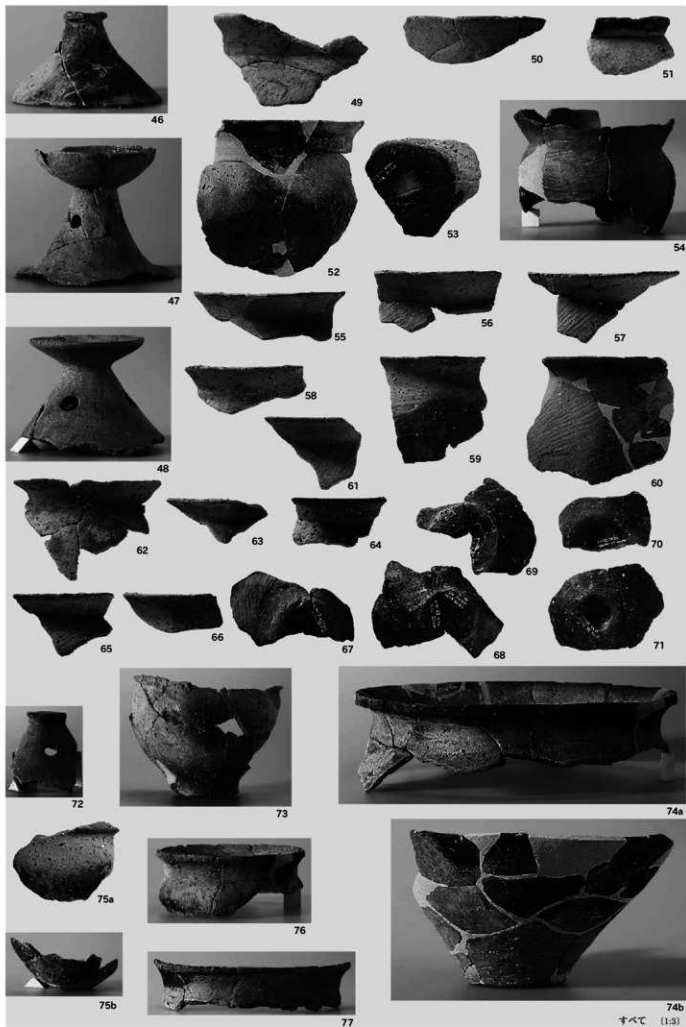
9b

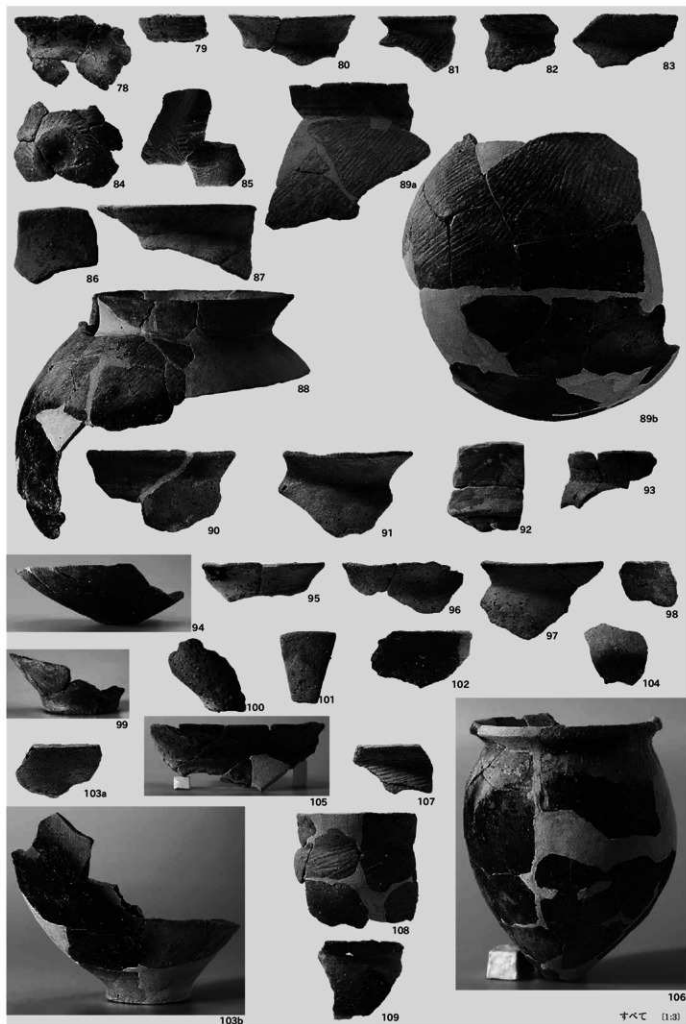


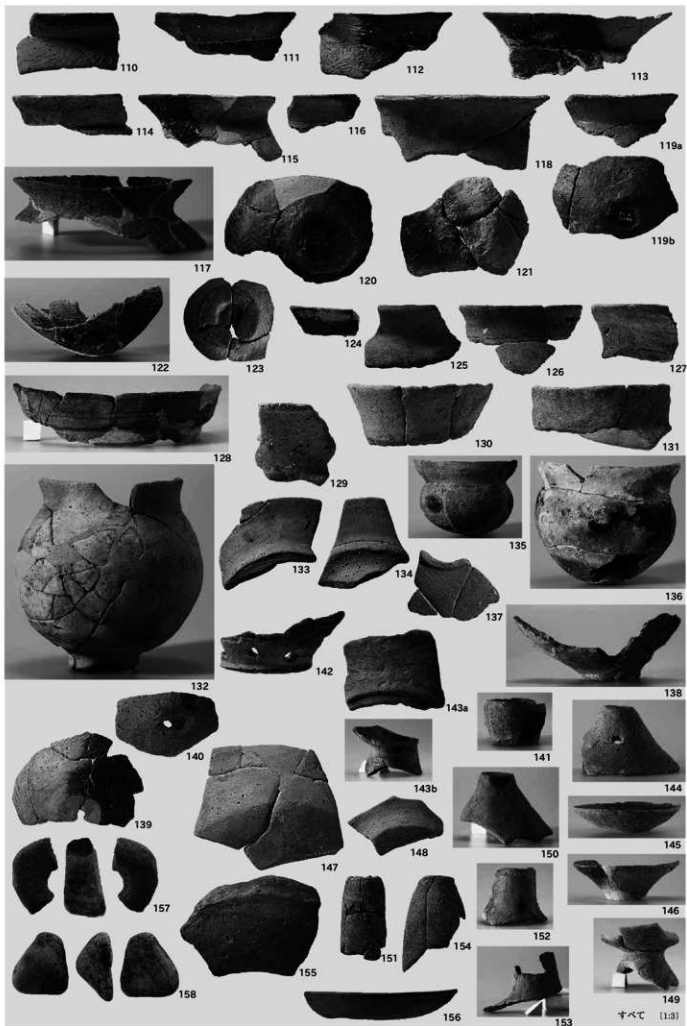
9c

すべて (1:3)











## 報告書抄録

ふりがな	しもわりいせき 3							
書名	下割遺跡III							
副書名	一般国道上越三和道路関係発掘調査報告書							
巻次	VII							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第217集							
編者名	尾崎高宏（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団） 長沼吉嗣（株式会社吉田建設） ハリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	西暦2011（平成23）年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
下割遺跡	新潟県上越市 大字米岡字中割 1090番地ほか	15222	266	37度 7分 59秒	138度 18分 54秒	20080512 ～ 20010901	3,384㎡	道路建設（上越三和道路）
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
下割遺跡	集落跡	古墳時代前期		掘立柱建物 (1棟)  周溝状遺構 (1か所)  溝(20条)  土坑(12基)  ピット(126基)  性格不明遺構 (42か所)		土器(土師器)  石製品等(不明石製品・ ヒスイ原石)		自然堤防上(微高地)に営まれた集落の一部。調査範囲西側は遺構・遺物の分布が薄くなるため集落の西縁と考えられる。
	集落跡	中世 (鎌倉・室町時代)		溝(1条)  井戸(4基)  性格不明遺構 (1か所)		土師質土器		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第217集

一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅶ  
下胡遺跡Ⅲ

平成23年3月30日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会

平成23年3月31日発行

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1  
電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1  
電話 0250(25)3981  
FAX 0250(25)3986

印刷・製本 新高速印刷株式会社

〒950-0063 新潟市中央区南出来島2-1-25  
電話 025(285)3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書第217集『下割遺跡Ⅲ』正誤表

頁	正	誤
報告書抄録	20080512～	20080512～
調査期間	20080901	20010901